

笠岡市埋蔵文化財発掘調査報告 1

山陽自動車道建設に伴う

本谷遺跡

1987年9月

建設省岡山国道工事事務所
笠岡市教育委員会

序 文

山陽自動車道は、大阪市吹田市を起点として瀬戸内海沿岸の主要都市を経て、山口県山口市に至る延長470kmの高速自動車道路であります。

建設省岡山国道工事事務所では、岡山県倉敷市～岡山県笠岡市までの建設を担当しています。この間の道路予定地内にある埋蔵文化財の保存に努めるため、文化庁及び岡山県教育委員会などと協議し、昭和54年度から発掘調査を行い記録保存しております。

本書は一連の発掘調査を行う中で、笠岡市内における本谷遺跡・園井土井遺跡・鍛冶屋遺跡の3遺跡のうち本谷遺跡について昭和60年度から昭和62年度にかけて実施したものである。

この調査記録が、中世から近世にかけての人々の生活等を解明するうえに貴重な資料になり、郷土の埋蔵文化財として、教育、学術のために広く活用されることを期待するものであります。

なお、この発掘調査及び本書の編集は、笠岡市教育委員会に委託し実施したものであり、ここに関係各位の御尽力に対し深甚なる謝意を表すものであります。

昭和62年9月

建設省岡山国道工事事務所

所長 辻 勝 成

序 文

建設中の山陽自動車道は、大阪府吹田市を起点とし、瀬戸内海沿岸都市を経て、山口県山口市に至る470kmの高速自動車道であります。

このうち、倉敷インターチェンジから福山インターチェンジまでの区間については、瀬戸大橋開通に合わせ昭和62年度開通をめざして工事が進められています。

この自動車道建設にともない、笠岡市内においては、本谷遺跡・園井土井遺跡・鍛冶屋遺跡の3遺跡の発掘調査が行われることとなり、このうち本谷遺跡について、笠岡市教育委員会が建設省岡山工事事務所から委託をうけて、昭和60年度から昭和62年度にかけて発掘調査を行いました。

調査の結果、中世の集落跡、江戸時代の屋敷跡・墓群や当時の生活を偲ばせる遺物が多数検出され、笠岡の歴史を理解するうえで貴重な資料を得ることができ、当時の人々の生活をかいま見ることができました。

報告書は、必ずしも十分に意を尽したものとは言えませんが、消失していく埋蔵文化財を永く記録・保存してゆくことが、今後の文化財の保護・保存に役立ち、歴史の研究や郷土の理解の一助となれば幸いと存じます。

なお、現地調査の実施、報告書の作成にあたり、建設省岡山国道工事事務所、岡山県教育委員会文化課、岡山県古代古備文化財センター、並びに笠岡市文化財保護委員会、笠岡市史編纂室をはじめ、炎天下また真冬の極寒のなか調査に従事してくださいました方々の多大な御協力と御指導に対し、厚くお礼申し上げます。

昭和62年9月

笠岡市教育委員会

教育長 仁 科 一 夫

例 言

1. 本書は笠岡市教育委員会が建設省中国地方建設局からの委託を受けて実施した「本谷遺跡」の発掘調査の概要報告書である。
2. 遺跡は岡山県笠岡市今立字本谷に所在する。
3. 発掘作業は教育委員会職員網本善光・岩崎仁司が担当し、専門委員の指導、助言を得て昭和60年7月17日から昭和61年10月4日まで実施した。
4. 本報告書の執筆・編集は、第2章本谷C遺跡炉までを網本が行い、以降を岩崎が行った。また考察は各々文末に文責を記した。
5. ^{14}C 年代の測定は、年代研究会代表 山田治教授、人骨の鑑定は岡山理科大学人類学教室池田次郎教授に依頼して御教示を得た。
6. 本書に使用したレベルの数値は海拔高である。方位は磁北である。
7. 本書第2図に使用した地形図は、笠岡市発行の25000分の1地形図を複製・縮小したものである。
8. 発掘調査で出土した遺物、及び実測図・写真類は、すべて笠岡市教育委員会に保管している。

目 次

序 文	
例 目	
第1章 序 説	9
第1節 調査の経緯	9
第2節 調査の体制	10
第3節 遺跡の分布	13
第2章 調査の概要	15
第1節 地理・歴史的環境	15
第2節 昭和59年度の調査（本谷遺跡散布地）	18
1 調査の概略	18
2 調査の結果	18
3 小 結	19
第3節 昭和60年度の調査（本谷A遺跡・本谷遺跡東側散布地）	20
1 調査の経過	20
2 調査の概略	22
3 日記抄	22
4 本谷A遺跡の調査	23
(1) 本谷A遺跡の概略	23
(2) 第1調査区	24
(3) 第2調査区	30
(4) 第3調査区	43
(5) 小 結	43
5 本谷遺跡東側散布地の調査	44
(1) 調査の概略	44
(2) 調査の結果	44
(3) 小 結	45
第4節 昭和61年度の調査（本谷B遺跡・本谷C遺跡）	48
1 調査の経過	48
2 調査の概要	48

3	日記抄	49
4	本谷B遺跡の調査	50
	(1) 本谷B遺跡の概略	50
	(2) 第1調査区	50
	(3) 第2調査区	53
	(4) 第3調査区	56
	(5) 小 結	56
5	本谷C遺跡の調査	57
	(1) 本谷C遺跡の概略	57
	(2) 第1調査区	57
	(3) 第2調査区	69
第3章	考 察	96
第1節	本谷遺跡発掘調査概要	96
第2節	出土遺構について	98
	1 中・近世墓について	98
	2 祭祀状遺構について	100
	3 伊群について	101
第3節	出土遺物について	102
	1 中世土器について	102
	2 出土文房具について	106
	3 近世土器について	107
第4章	付 篇	108
第1節	笠岡市本谷A遺跡出土の近世人骨について	108
第2節	本谷遺跡の ¹⁴ C年代測定について	111

目 次

第1図	笠岡市位置図 (1/1000000)	9
第2図	笠岡市内路線図 (1/120000)	10
第3図	笠岡市内遺跡分布地図 (1/120000)	13
第4図	本谷遺跡周辺図 (1/25000)	16
第5図	本谷遺跡調査場所位置図 (1/4000)	18
第6図	トレンチ出土遺物 (1/4)	19
第7図	本谷A遺跡・本谷東側散布地位置図 (1/4000)	20
第8図	本谷A遺跡全体図 (1/400)	21
第9図	第1調査区遺構 (1/400)	23
第10図	段状遺構1 (1/200)	24
第11図	溝状遺構1 (1/200)	24
第12図	建物1 (1/80)	25
第13図	建物1出土遺物 (1/4)	25
第14図	第1調査区谷部 (1/120)	27
第15図	谷部包含層出土遺物 (1/4)	28
第16図	谷部礫層出土遺物 (1/4)	29
第17図	谷部出土遺物 (1/4)	29
第18図	第2調査区 (1/400)	30
第19図	溝状遺構2 (1/200)	31
第20図	建物2 (1/80)	31
第21図	建物3 (1/80)	32
第22図	建物4 (1/80)	32
第23図	建物付近出土遺物 (1/4)	33
第24図	中・近世墓群 (1/100)	34
第25図	谷部 (1/120)	35
第26図	中世墓1・2 (1/40)	36
第27図	中世墓1 (1/4)	37
第28図	中世墓2 (1/4)	37
第29図	近世墓1 (1/40)	38
第30図	近世墓2 (1/40)	39

本谷遺跡

第31図	近世墓3・4 (1/40)	39
第32図	近世墓3 (1/40)	40
第33図	近世墓4 (1/40)	40
第34図	近世墓出土遺物 (1/4)	41
第35図	遺構に伴わない遺物1 (1/4)	41
第36図	遺構に伴わない遺物2 (1/4)	42
第37図	第3調査区出土遺物 (1/4)	43
第38図	本谷東側散布地出土遺物 (1/4, 147; 1/8)	45
第39図	本谷B遺跡全体図 (1/400)	46
第40図	本谷C遺跡全体図 (1/400)	47
第41図	本谷B遺跡・本谷C遺跡位置図 (1/4000)	48
第42図	建物5 (1/80)	50
第43図	テラス状遺構 (1/80)	51
第44図	テラス状遺構 (1/120)	51
第45図	テラス状遺構出土遺物 (1/4)	51
第46図	溝状遺構3 (1/120)	52
第47図	第2調査区土層 (1/80)	53
第48図	祭祀状遺構 (1/10)	54
第49図	祭祀状遺構出土遺物 (1/4)	55
第50図	包含層出土遺物 (1/4)	56
第51図	建物6 (1/80)	57
第52図	建物7 (1/80)	58
第53図	建物8 (1/80)	58
第54図	包含層遺物出土状況 (1/40)	59
第55図	斜面土層 (1/120)	59
第56図	斜面包含層出土遺物1 (1/4)	60
第57図	斜面包含層出土遺物2 (1/4)	61
第58図	斜面包含層出土遺物3 (1/4)	62
第59図	斜面包含層出土遺物4 (1/4)	63
第60図	斜面包含層出土遺物5 (1/4)	64
第61図	斜面包含層出土遺物6 (1/4)	65
第62図	斜面包含層出土遺物7 (1/4)	66

第63図	斜面包含層出土遺物 8 (1/4)	67
第64図	斜面包含層出土遺物 9 (1/4)	68
第65図	炉 1 (1/40)	69
第66図	炉 1 出土遺物 (1/4)	69
第67図	炉 2 (1/40)	70
第68図	炉 3・4・5・6 (1/40)	71
第69図	炉 5 出土遺物 (1/4)	71
第70図	井戸 1 (1/30)	72
第71図	井戸 2 (1/30)	72
第72図	排水溝 2 (1/80)	73
第73図	排水溝 2 出土遺物 1 (1/4)	74
第74図	排水溝 2 出土遺物 2 (1/4)	75
第75図	排水溝 2 出土遺物 3 (1/4)	76
第76図	排水溝 2 出土遺物 4 (1/4)	77
第77図	排水溝 2 出土遺物 5 (1/4)	78
第78図	排水溝 3 (1/30)	79
第79図	甕棺 1 検出状況 (1/30)	80
第80図	甕棺 2 検出状況 (1/30)	80
第81図	甕棺 1 出土遺物 1 (1/8)	81
第82図	甕棺 1 出土遺物 2 (1/2)	81
第83図	甕棺 2 出土遺物 (1/8)	82
第84図	甕棺 3 検出状況 (1/30)	82
第85図	甕棺 3 出土遺物 1 (1/8)	82
第86図	甕棺 3 出土遺物 2 (1/2)	83
第87図	甕棺 4 検出状況 (1/30)	84
第88図	甕棺 4 出土遺物 1 (1/2)	84
第89図	甕棺 4 出土遺物 2 (1/8)	84
第90図	甕棺 5 検出状況 (1/30)	85
第91図	甕棺 5 出土遺物 (1/8)	85
第92図	甕棺 6 検出状況 (1/30)	86
第93図	甕棺 6 出土遺物 1 (1/4)	86
第94図	甕棺 6 出土遺物 2 (1/8)	86

第95図	甕棺7検出状況 (1/30)	87
第96図	甕棺7出土遺物 (1/8)	87
第97図	甕棺8検出状況 (1/30)	87
第98図	甕棺8出土遺物 (1/8)	87
第99図	貝殻散布地 (1/40)	88
第100図	土墳墓1・2 (1/30)	89
第101図	土墳墓1出土遺物 (1/4)	89
第102図	土墳墓2出土遺物 (1/4・1/2)	89
第103図	土墳墓3 (1/30)	90
第104図	土墳墓3出土遺物 (1/2)	90
第105図	土墳1 (1/30)	91
第106図	土墳2 (1/30)	91
第107図	土墳3 (1/30)	92
第108図	土墳3出土遺物 (1/4)	92
第109図	包含層出土遺物1 (1/4)	93
第110図	包含層出土遺物2 (1/4)	94
第111図	包含層出土遺物3 (1/4)	95

表 目 次

表1	本谷遺跡土器出土編年表
表2	本谷近世人骨計測値と示数
表3	年輪年代— ¹⁴ C年代対照表

図 版 目 次

図版1	1. 本谷A遺跡調査前 (遠景南から)
	2. 本谷A遺跡調査前 (遠景西から)
図版2	1. 本谷A遺跡調査風景
	2. 本谷A遺跡第1調査区谷部横断面 (南から)
図版3	1. 本谷A遺跡第1調査区遺構検出状況 (西から)
	2. 本谷A遺跡第2調査区遺構検出状況 (北から)

- 図版4 1. 本谷A遺跡第2調査区中世墓1検出状況(西から)
2. 本谷A遺跡第2調査区中世墓2検出状況(北から)
- 図版5 1. 本谷A遺跡第2調査区近世墓3.4検出状況(北から)
2. 本谷A遺跡第2調査区近世墓2人骨検出状況(北から)
- 図版6 1. 本谷A遺跡第2調査区近世墓群検出状況(北から)
2. 本谷A遺跡調査後遠景(西から)
- 図版7 1. 本谷B遺跡調査前遠景(西から)
2. 本谷東側散布地第1次調査終了後遠景(北から)
- 図版8 1. 本谷B遺跡第2調査区祭祀遺構検出状況(南から)
2. 本谷B遺跡第2調査区祭祀遺構(内部)検出状況(東から)
- 図版9 1. 本谷B遺跡第1調査区遺構検出状況(南から)
2. 本谷B遺跡調査後遠景(北から)
- 図版10 1. 本谷C遺跡遠景(本谷A遺跡より)
2. 本谷C遺跡第1調査区全景(南から)
- 図版11 1. 本谷C遺跡第2調査区南半全景(西から)
2. 本谷C遺跡第2調査区北半全景(西から)
- 図版12 1. 建物
2. 本谷C遺跡第1調査区斜面土器溜り(西から)
- 図版13 1. 本谷C遺跡第2調査区貝塚検出状況(東から)
2. 本谷C遺跡第2調査区貝塚掘り下げ状況(西から)
- 図版14 1. 井戸1(東から)
2. 井戸2(東から)
- 図版15 1. 排水溝2(北から)
2. 排水溝3(北から)
- 図版16 1. 甕棺1 検出状況(東から)
2. 甕棺4 検出状況(北から)
- 図版17 1. 甕棺3 副葬品出土状況(東から)
2. 甕棺4 水滴出土状況(北から)
- 図版18 1. 甕棺1 掘り上げ状況(東から)
2. 甕棺6(南から)
- 図版19 1. 土壇墓1(東から)
2. 土壇墓3(北から)

本谷遺跡

図版20 1. 炉1.2 検出状況

2. 炉1 遺物出土状況

図版21 1. 土壇1 (北から)

2. 土壇3 (南から)

図版22 1. 調査風景

2. 現地説明会

図版23 1. 調査終了後

2. C調査区横 稲荷神社

図版24 出土遺物

図版25 出土遺物

図版26 出土遺物

図版27 出土遺物

図版28 出土遺物

図版29 出土遺物

図版30 出土遺物

図版31 出土遺物

第1章 序 説

第1節 調査の経緯

山陽高速自動車道は、大阪府吹田市を起点として、山口県山口市に至る延長約470kmの高速自動車道である。この自動車道は、山陽地域の都市間相互の交通の処理と、一般国道2号線の渋滞緩和とにより沿線地域の発展をはかることを目的としており、岡山県内倉敷以西ルートは昭和62年度の完成に向けて現在工事が進んでいる。

この工事に伴う岡山県内の文化財の保護保存などに関しては、まず、昭和47年に路線内の埋蔵文化財の分布調査がおこなわれた。その結果、笠岡市内の路線内に、6ヶ所の遺跡(弥立峠遺跡・中川遺跡・諏訪神社裏遺跡・鍛冶屋遺跡・中駐遺跡・内山遺跡)の存在が判明した。

従来、当該工事に伴う発掘調査は、岡山県教育委員会(昭和59年10月からは、岡山県古代古備文化財センター)が担当している(註1)。本市内におけるこれらの遺跡の第1次調査も昭和59年度に県教委によりおこなわれ、弥立峠遺跡(調査後に本谷遺跡と改称)・諏訪神社裏遺跡

(同じく園井土井遺跡と改称)・鍛冶屋遺跡の計3遺跡の全面調査の必要が確認されたのである(註2)。

ところが、笠岡市内は、用地買収などの遅れから工事着手が目前に迫っており、県のみでの対応では個々の遺跡に対して十分な調査期間が確保できないことから、建設省・岡山県教育庁・笠岡市教育委員会などの協議により、市内の遺跡のうち、最も東に位置する本谷遺跡の発掘調査については、笠岡市が直接建設省からの委託を受けて、実施することとなった。

そこで、昭和60年度は既に範囲の確認されていた部分(本谷A遺



第1図 笠岡市位置図

跡)の全面調査と東側に確認された貝塚周辺の散布地の第1次調査を実施した。そして、続く61年度には、この調査により範囲を確認した部分(本谷B・C遺跡)の第2次(全面)調査を実施したのである。

なお、これまで笠岡市では、大規模かつ長期にわたる発掘調査の経験がなかったため



第2図 笠岡市内路線図 (1/120000)

に、文化振興も担当する文化係配属の1名のみの主事が長期間専属で対応し、一部文化課学芸員などの協力を受けるなど、変則的な対応にならざるを得なかった。山陽高速自動車道開通後にも予想される周辺地域の開発に伴う文化財の保護保存についての体制上の今後の課題と言えよう。

註1. 岡山県教育委員会『山陽自動車道建設に伴う発掘調査1』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告25』1978.3

岡山県教育委員会『山陽自動車道建設に伴う発掘調査2』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告42』1981.3

註2. 岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財報告15』1985.3

第2節 調査の体制

発掘調査は、笠岡市教育委員会が建設省中国地方建設局からの委託をうけ、昭和60・61年度におこなった山陽高速自動車道建設に伴うものである。

調査にあたっては、笠岡市埋蔵文化財専門委員会を設け、笠岡市文化財保護委員会の中から下記の方々を委嘱した。専門委員各位からは、発掘調査中及び報告書作成の際に、数多くの有益な御指導・御教示を賜わった。記して厚く感謝の意を表します。

笠岡市埋蔵文化財専門委員会設置要綱（昭和60年8月12日笠委訓令第1号）

（設置）

第1条 埋蔵文化財に関し遺跡発掘調査による諸問題を適正に処理するため、笠岡市遺跡発掘調査専門委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（組織）

第2条 委員会は、委員5人以内で組織する。

2 委員は、笠岡市文化財保護委員（以下「保護委員」という。）のうちから教育委員会が委嘱する。ただし、教育委員会が特に必要と認めた場合は、保護委員以外のものを委嘱することができる。

3 委員の任期は、当該発掘調査の期間とする。

4 補欠により就任した委員の任期は、前任者の残任期間とする。

（職務）

第3条 委員は、遺跡の発掘調査に関し、教育委員会に助言するため次の職務を行う。

- (1) 市内にある埋蔵文化財を保存し、かつ、その活用をはかるために必要な調査研究を行うこと。
- (2) 定時又は臨時に会議を開き、教育委員会の諮問に応じ、これに対して意見を述べること。

（庶務）

第4条 委員会の庶務は、笠岡市教育委員会事務局文化課において行う。

（その他）

第5条 この要綱に定めるもののほか、必要な事項は、教育委員会が別に定める。

付則

この要綱は、公布の日から施行する。

笠岡市埋蔵文化財専門委員（あいうえお順）

天野 初志（昭和60年度）

小寺 謙助

中野 勇

平井 宏二（昭和61・62年度）

間壁 忠彦

松浦 龍可

昭和60～62年度の笠岡市教育委員会の構成は下記のとおりである。

昭和60年度

教 育 長	藤 井 英 樹
文化課	
文化課長	塩 飽 一 大
課長補佐 (兼庶務施設係長)	守 本 力
同 (兼文化係長)	岡 田 武 志
庶務施設係 主事	大 塚 光 志
同 学芸員	惣 路 紀 通 (調査補助)
文化係 主事	網 本 善 光 (調査担当)

昭和61年度

教 育 長	仁 科 一 夫
文化課	
文化課長 (兼庶務施設係長)	斎 藤 昭 敏
文化係長	石 井 秀 明
庶務施設係 主事	大 塚 光 志
文化係 主事	網 本 善 光 (調査担当)
同 臨時調査員	岩 崎 仁 可 (調査担当)

昭和62年度

教 育 長	仁 科 一 夫
文化課	
文化課長 (兼庶務施設係長)	斎 藤 昭 敏
文化係長	石 井 秀 明
庶務施設係 主事補	岩 崎 仁 可 (報告書担当)
文化係 主事	網 本 善 光 (報告書担当)

炎暑・極寒の下の発掘作業には、下記の方々の御参加をいただいた。

石田 秀夫	井上 弘志	内海誠一郎	馬上 道治	遠藤 極	遠藤 信三
小川 輝正	小野寺 太	大熊 利彦	大友 倫子	岡田 清	岡本 泰典
川崎 栄達	小寺 勲	小寺スミエ	小寺 竹志	小寺 徳次	小寺 巴
小寺 伸恵	小寺 花子	小寺美知子	小寺 光子	小寺百合子	小林ますみ
下鶴瀬勝子	鈴木ツヤ子	瀬戸 聖子	中野正日出	西山 博行	原田 久子
東山喜美子	山 泉 弘昭	山下 泉	山下 竹雄	山下 玲次	
和泉 弘幸 (岡山理科大学)					

報告書作成などにあたっては、

赤田ひとみ 大本 敏江 小川 都 小野寺 太 岸戸 幸子 黒川 京子
 桑田 康忠 小宮山典子 坂本 直美 塩飽 衣子 永川 栄子 原田 幸子
 原田裕美子 古仲嘉奈子の方々に整理・浄書などの援助・協力を得た。記して感謝いた
 します。

第3節 遺跡の分布

遺跡番号	遺跡名
1	梶村氏・居館跡
2	浅香・古墳
3	延福・寺跡
4	延福寺山・古戦場跡
5	平木・古墳
6	走出馬場塚・古墳
7	湯田の坪・条里推定地
8	山廻・古墳
9	弓場山・古墳
10	甲野宮山1号・古墳
10	甲野宮山2号・古墳
10	甲野宮山3号・古墳
10	甲野宮山4号・古墳
10	甲野宮山5号・古墳
10	甲野宮山6号・古墳
11	山手東・古墳
12	阿部天神山・古墳
13	阿部山北山・遺跡1
14	阿部山北山・遺跡2
15	小池1号・古墳
15	小池2号・古墳
15	走出小池塚・古墳
15	走出山田塚・古墳
16	走出の祭祀・遺跡
17	和田山・古墳群
18	おそめ・古墳
18	仙人塚・古墳
18	七つ塚・古墳
18	走出証文谷の塚・古墳
18	走出堂の上塚・古墳
18	東塚・古墳



第3図 笠岡市内遺跡分布地図 (1/120000)

本谷遺跡

遺跡番号	遺跡名	遺跡番号	遺跡名	遺跡番号	遺跡名
18	一つ塚・古墳	63	篠坂・城跡	104	片島汐ヶ鼻5号・墳
18	双つ塚・古墳	64	きょうぐろ	105	片島・遺跡
18	山口竹ノ内・古墳	65	入田・城跡	106	福淵・城跡
19	山椒谷・古墳	66	押撫御塚・古墳	107	神島外浦・遺跡
20	上井立池の平・古墳	67	有田・城跡	108	差出島・遺跡
21	犬神山2号・墳	68	有田・貝塚	109	差出西塚・古墳
22	天神山1号・墳	69	陶山大折・窯跡群	110	差出東塚・古墳
23	萌黄ヶ原・古戦場跡	70	大橋山・城跡	111	明地島・遺跡1地点
24	山口・製鉄跡	71	塚の谷1号・墳	111	明地島・遺跡2地点
25	岩日山・古墳	72	塚の谷2号・墳	111	明地島・遺跡3地点
26	道万・遺跡	73	陶山・城跡	112	汐口辯塚・古墳
27	尾坂・城跡	74	笠岡山・城跡	113	汐口・古墳
28	尾坂庵寺・跡	75	笠岡代官所・跡	114	高島・遺跡6地点
29	諏訪山・城跡	76	笠岡・城跡	115	高島・遺跡2地点
30	致所山・城跡	77	才ノ原・古墳	116	土泊・遺跡
31	中ヶ市・古墳	78	広浜・城跡	117	高島・遺跡5地点
32	大之平・遺跡	79	本村・古墳	118	本高須塚・古墳
33	吉田乳母が懐・古墳	80	森山・城跡	119	黒上・遺跡
34	大之平・古墳	81	明知・城跡	120	小高島・遺跡
35	関戸庵寺・跡	82	白塚・遺跡	121	上浦塚1号・墳
36	八幡山・古墳	83	塚ノ平・古墳	122	上浦塚2号・墳
37	関戸・経塚	84	前嶽山・城跡	123	上浦越塚・古墳
38	髙田・古墳	85	岡繁・遺跡	124	白石島海水浴場・遺跡
39	髙田中塚・古墳	86	坂里・古墳	125	中朱・遺跡
40	尾坂亀居・古墳	87	西ノ谷・遺跡	126	白石島校内・遺跡
41	尾坂・製鉄跡	88	宮山・古墳	127	開龍寺・遺跡
42	吉田大塚2号・墳	89	高丸・城跡	128	田ノ浦・遺跡
43	吉田大塚1号・墳	90	銅戈・川土地点	129	立石・遺跡
44	岡部・古墳	91	鳴ヶ端・城跡	130	島のロそま・古墳
45	小平井・城跡	92	笠岡工業高校・遺跡	131	布越・遺跡
46	入田・古墳	93	名切・遺跡	132	苜峠・遺跡
47	襖塚・古墳	94	津雲・貝塚	133	豊浦中塚・古墳
48	助実・貝塚	95	原・貝塚	134	豊浦上塚・古墳
49	鍛冶屋・遺跡	96	井ノ砂塚・古墳	135	塚浜塚・古墳
50	園井十井・遺跡	97	番剛庵寺・跡	136	真嶽・城跡
51	本谷A・遺跡	98	長浜1号・墳	137	城山・城跡
52	本谷B・遺跡	98	長浜2号・墳	138	天神鼻・遺跡
53	本谷C・遺跡	98	長浜3号・墳	139	沢津・城跡
54	黒井・遺跡	99	烏ノ江峠・遺跡	140	小飛島・遺跡
55	黒井庵寺・跡	100	大殿洲・遺跡	141	大飛島洲の南・遺跡
56	糠塚・古墳	101	東村・貝塚	142	前浦・遺跡
57	広浜庵寺・跡	102	鳥越・城跡	143	小池・遺跡
58	大黒山・遺跡	103	小見山・城跡	144	キスゴダワ・古墳
59	大峠・古墳	104	片島汐ヶ鼻1号・墳	145	庵ノ子・城跡
60	上田頭岩塚・古墳	104	片島汐ヶ鼻2号・墳	146	折敷山・城跡
61	仮名沢・城跡	104	片島汐ヶ鼻3号・墳	147	馬鞍山・城跡
62	篠坂・遺跡	104	片島汐ヶ鼻4号・墳	148	青佐山・城跡

第2章 調査の概要

第1節 地理・歴史的環境

岡山市は、県の南西部に位置し、東を浅口市、北を井原市・小田郡、西を広島県福山市・深安郡に接している。

市域は、国指定の名勝地である高島・白石島をはじめとする笠岡諸島と、海岸部から旧山陽道とはぼ一にして流れる小田川にまで及ぶ陸地部とから形成されている。現在の市街地の大部分は、近世以後の干拓により順次広がったものであり、位置的には旧山陽道から離れており、陸上交通の便には恵まれていなかったが、海に面していることから海上交通の拠点として古くから栄えていた。

市内の遺跡に目を転じると、旧石器時代の遺跡は島部に分布しており、片島・明地島などでササキト製のナイフ型石器などが確認されている(註1)。縄文時代になると、陸地部の大島地区で縄文前期の原貝塚(註2)をはじめ、後・晩期の津雲貝塚(註3)など、限られた範囲内に数ヶ所の遺跡の分布が知られている。また、高島には縄文晩期の中部瀬戸内地域における土器の標識名となっている黒土遺跡(註4)も存在している。これらの縄文集落は、ほぼ3km半径の円内におさまるものである。

弥生時代になると、島部・海岸部付近では、近年、笠岡湾干拓地内から中細型銅戈の発見があった(註5)程度であり、遺跡の分布は、井原市・小田郡矢掛町を含めた小田川流域に顕著なことが注目される。さらに、古墳時代には、島部こそ小規模の後期古墳のみとなるが、陸地部においては、小田川流域を中心に古墳の営造が見られる。市内新山地区と北川地区の境界の線路上に位置する長福寺裏山古墳群(註6)はその代表であり、これらのうちの双つ塚古墳は全長62mの前方後門墳であり、小田川流域では最大級のものである。こうした古墳の隆盛には、弥生時代から継続する当該地域周辺の遺跡の動向と相まって、興味深いものがある。

その後、同じく新山地区には白鳳～奈良時代に関戸廃寺(註7)が建立され、古代の旧小田郡の中核をなす地域でもあったことが推測される。いっぽう、島部では、律令国家の成立と軌を同じくして現われる大飛鳥遺跡(註8)が海上交通に伴う国家的な祭祀遺跡として注目される。

中世以後には、真鍋氏・陶山氏といった名前が残っているが、このうち、特に陶山氏は、鎌倉末～室町時代にかけて笠岡地方を広く支配し、現在の市街地西方に笠岡山城を築き、木堀としたと言われている。陶山氏の名は、「御弓日記」に多く登場し、特に応安2年(1369)から康正2年(1456)にかけてはほぼ毎年射者として記載されているが、武芸のみでなく、陶山氏は笠

岡の中心部に建つ遍照寺（現在は都市計画により多宝塔を除いて移転）を市内北部の吉田から笠岡の街づくりの一環として移したともいわれている。この遍照寺は、後に末寺24ヶ寺を支配する中本寺として栄え、笠岡の礎をなしている。

しかし、この陶山氏の繁栄も、足利將軍家の衰退と共に歴史から消えてゆき、戦国時代には村上氏や小田氏などの勢力が入ってくるが、これも毛利氏の備中平定により、その支配下にはいる。

江戸時代以後は、備後福山藩水野氏の所領に一時なるものの17世紀末からは代官所が市街地の中心部に設けられ、天領としての歴史を残し、明治に至る。

ここで、本谷遺跡のある今井地区に目を転じてみる。この地区は、市街地中心部からは応神山という山一つ隔てて北東に位置しており、近世頃までは西側の応神山・東側の虚空蔵山の麓付近まで深く海が入りこんでおり、現在の多くの耕地は下拓によるものであって、むしろ本谷付近は遼浅の海を真近にした海浜地区であったといえる。従って、東方の浅口郡鴨方町方面に抜ける道すじも旧海岸付近や現在の丘陵裾部を通過していたと推測できる。

この地域での遺跡の分布は決して濃厚ではなく、弥生時代の土器が採土中に出土したといわれている（註9）ほかは、小規模の古墳が数基存在する（註10）にとどまる。

しかしながら、中世に入ると今回の調査に係る本谷遺跡群を始め、北側約500mには同じく山陽自動車道建設により調査された園井十井遺跡などが現れており、在地的な氏族の活躍のあったことが推測される。

その後近世には、村上・毛利氏などの支配を経て、今立地区については、貞享3年（1686）以後天領となっている。



主要遺跡

1. 鍛冶屋遺跡
2. 園井土井遺跡
3. 本谷A遺跡
4. 本谷B遺跡
5. 本谷C遺跡
6. 黒井遺跡
7. 大黒山遺跡

第4図 本谷遺跡周辺図 (1/25000)

註1. 鎌木義昌「日本先土器時代主要遺跡地名表」『日本の考古学1』1965

註2. 清野謙次「備中国浅口郡西大嶋村字原貝塚」『日本貝塚の研究』1969

昭和60年3月に、原貝塚北側の市道の拡幅工事が実施され、立会調査の結果縄文前期の土器及び貝層の一部を確認した。

註3. 島田貞彦・清野謙次・梅原末治「備中国浅口郡大嶋村津雲貝塚発掘報告」『京都帝国大学考古学研究報告5』1920

註4. 坪井清足『岡山県笠岡市高島遺蹟調査報告』1956

註5. 網本善光「岡山県笠岡市笠岡湾干拓地出土の銅戈について」『古文化談叢17』1987

註6. 鎌木義昌・間壁忠彦・間壁政子『長福寺裏山古墳群一付閘「魔寺跡」』1965

註7. 註6に同じ

註8. 鎌木義昌・間壁忠彦「大飛鳥遺跡—古代の祭祀—」『倉敷考古館研究小報1』1964

註9. 昭和37年に本谷遺跡南方約500mの今立大黒山から採土中に弥生土器と思われる甕棺が出土したといわれているが、出土遺物については残っておらず不明である。なお、ここからは、中世の五輪塔・宝篋印塔がばらばらの状態で出土しており、現在笠岡市立郷土館で保管している。

註10. 間壁忠彦「笠岡市広浜箱式石棺」『倉敷考古館研究集報第4号』1968 ほか

その他参考文献： 『小田郡史』1941

笠岡市史編さん委員会『笠岡市史』1983

地理・歴史的環境の記述については、笠岡市史編さん会の委員の方々から多くの御教示をいただいた。記して感謝します。

第2節 昭和59年度の調査（本谷遺跡散布地）

1 調査の概略

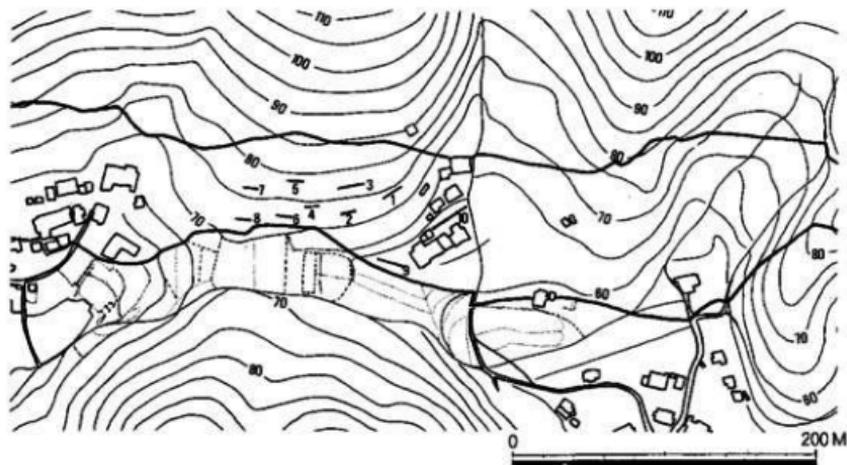
調査の経緯 山陽高速自動車道建設に伴う笠岡市内の埋蔵文化財の発掘調査については、先に分布調査で確認されていた市内の6遺跡に対し、昭和59年度に岡山県教育委員会文化課が実施した。これらのうち、笠岡市今立^{いまだて}字本谷所在の本谷遺跡については、分布調査の段階で、弥^{やま}宜^{のり}峠^{のぼり}遺跡と呼ばれていたものを、第1次調査の段階で名称を変更したものである。

調査の概略 調査は、昭和59年8月下旬から10月上旬までおこなわれた。延長約160mの範囲にトレンチを設定し、遺構・遺物の確認に努めた結果、数個の柱穴を検出し、中世の土器片が出土した。このことから、本谷遺跡には、中世の集落跡の存在することが判明した。

また、調査地点から約200m東へ離れたところで、ハイガイを中心とする小貝塚を発見した。周辺には中世の土器片も散布しているのを合わせて確認した。

2 調査の結果

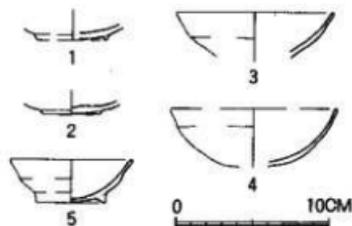
概要 分布調査の段階で土器の散布の見られた場所を中心に、10ヶ所のトレンチを設定した。これらトレンチの設定された場所は、今立地区字本谷と園井地区字弥宜峠との間の峠付近



第5図 本谷遺跡調査場所位置図 (1/4000)

の本谷側にあたり、南北からの山すじにはさまれた谷地形を示している。

遺跡はこの谷地形の北側の緩斜面上に位置し、調査の着手前は、周囲に畑・竹林などが広がっていた。調査は、遺跡の広がりと内容の把握を目的とし、また、谷の底に近い平里部には民家が並んでおり同所付近への遺跡の広がりも調べた。その結果、トレンチ2、3、4からは、多量の土器の片出しがあり、さらには、トレンチ4において柱穴を確認することができた。



第6図 トレンチ出土遺物 (1/4)

遺物の説明 出土遺物は細片が多いが、図示できるものについて以下に説明する。

1・2はトレンチ2から出土したもので、いずれも十師質碗の高台部である。高台径は、1が4.4cm、2が3.6cmを測る。どちらの高台も低く、特に2は細い粘土紐を簡単に貼り付けたものである。

3・4・5はトレンチ4から出土したもので、3は口径10.6cm、4は11.0cmである。5は断面三角形

の高台をもつ小型の碗で、口径7.9cm、器高2.9cmである。

これらの土器は、中世に属するもので、細かい砂粒を含み、4が器壁の薄い淡茶褐色であるほかは、淡黄褐色を呈している。

3 小 結

以上のことから、本谷遺跡には、遺構密集地1ヶ所と遺物包含層1ヶ所のあることが判明した。また、当該地点が傾斜面上であることから遺物包含層はさらに下方にまで広がっている可能性が強いと考えられる。そこで、全体として1,500㎡の範囲を第2次調査の対象地区とした。

加えて、遺跡東方約200mの稲荷神社付近で、ハイガイの散布と中世の土器の散布とを確認した。これらの場所は、第1次調査の地点から谷一つ隔てた舌状尾根の先端部付近であり、周囲に平坦な部分も見られるため、その周辺域を含めた約8,000㎡部分も調査の対象とした(註1)。

註1. 59年度の調査結果については、既に『岡山県埋蔵文化財報告15』岡山県教育委員会1985.3にその概要が報告されている。本節の記載はその報告に多くを基づいていると共に、調査・報告を担当された福田正継氏(現岡山県古代吉備文化財センター)からは、有益な御指導・御教示を賜わった。氏の御好意に厚く感謝します。

第3節 昭和60年度の調査（本谷A遺跡・本谷遺跡東側散布地）

1 調査の経過

山陽高速自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査については、前年度において、岡山県教育委員会（59.10～岡山県古代吉備文化財センター）が担当し、市内3遺跡（本谷遺跡・園井土井遺跡・鍛冶屋遺跡）の全面調査が予定されていた。

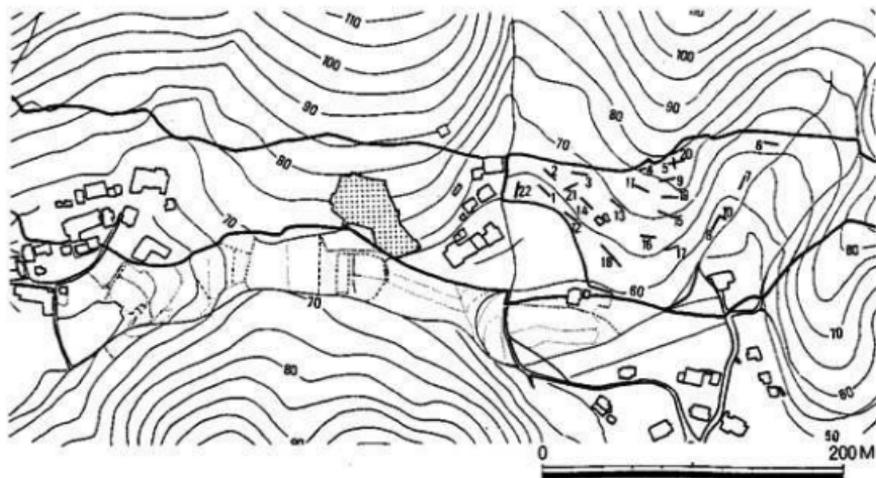
ところが、工程とのかねあいで、建設省・岡山県教育委員会・笠岡市教育委員会などの協議により、本谷遺跡の調査については、笠岡市教育委員会が直接建設省からの委託を受けて実施することとなったものである。

従って、前年度に確認されていた1,500㎡の第2次調査と貝塚周辺の8,000㎡の第1次調査（これにより判明した部分の調査も含む）は、笠岡市教育委員会文化課が担当した。

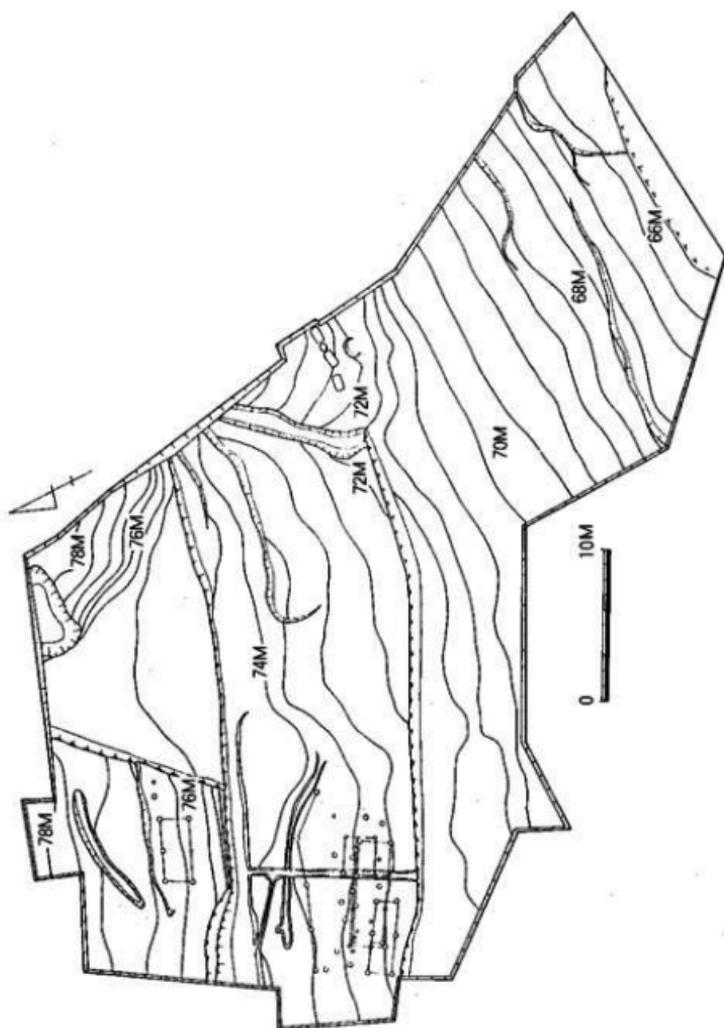
なお、60年度の調査により貝塚周辺の2ヶ所に遺跡を確認したため、これまで本谷遺跡とのみ呼んでいたものを本谷A遺跡、貝塚周辺のものそれぞれ本谷B遺跡、本谷C遺跡と呼ぶこととした。これにより、旧来の本谷遺跡は、3つの遺跡から構成される遺跡群として把握できることになった。

これらの遺跡は、いずれも相前後して営まれており、地形的・距離的にも相互の関連が強いことが調査により判明した。

従って、本来は「本谷遺跡群」として呼称すべきであるが、記述が煩瑣となることからこれまでどおり全体を呼ぶ時は「本谷遺跡」としたい。



第7図 本谷A遺跡・本谷東側散布地位置図（1/4000）



第8図 本谷A遺跡全体図 (1/400)

2. 調査の概略

前年度の調査で遺構の確認されていたトレンチ2,3,4を中心に約1,500㎡の範囲（本谷A遺跡）を調査対象とし、昭和60年7月から61年3月末まで全面発掘をおこなった。

調査の結果、小規模の谷地形を臨む3段の段丘面が確認され、上からそれぞれ第1・2・3調査区と名付けた。第1・2調査区からは掘立柱の建物・溝などを、さらに第2調査区東端では、中・近世墓を検出した。また、谷部内で土師質土器・古銭・石硯などの出土もあった。

このほか、本谷A遺跡東方約200mの稻荷神社周辺の約8,000㎡について、第1次のトレンチ調査をおこない、前年度確認した貝塚のほかに神社西方で中世の上器の出土を確認した。

3 日記抄

60年

- 7月17日 発掘現場事務所へ資材搬入。付近の民家へのあいさつ。調査前の写真撮影。
- 18日 現場用作業テント設置。資材搬入。本谷A遺跡表土剥ぎ開始。
- 30日 本谷A遺跡第1調査区西側、掘り下げ開始。
- 8月5日 第1調査区西側集落部分、遺構検出作業開始。溝・建物などを検出する。
- 9日 第1調査区東側谷部、掘り下げ開始。土師質土器など多数出土。
- 9月19日 昭和60年度第1回笠岡市埋蔵文化財専門委員会を開催。
- 25日 第2調査区東側谷部、掘り下げ開始。
- 10月2日 第2調査区東側造成土部分、掘り下げ開始。
- 16日 第2調査区東端から、人骨が出土。破壊された土葬墓のあることが判明。
- 17日 人骨出土地点付近精査の結果、4基の近世墓のあることが判明。
- 11月11日 第1次調査（貝塚周辺部分）範囲の視察、および、トレンチ設定場所の確認。
- 20日 第2調査区西側集落部分掘り下げ開始。
- 22日 山陽自動車道埋蔵文化財保護対策委員の方々の視察があった。
- 27日 本谷東側散布地第1次調査を開始。
- 29日 トレンチ2から中世土器出土。
- 12月16日 トレンチ5から近世大甕検出。
- 19日 トレンチ18から浅い柱穴状の窪みを検出。
- 28日～61年1月5日 年末年始休み。
- 1月10日 トレンチ21により、中世の包含層を確認。

- 1月20日 本谷東側散布地第1次調査終了。
 23日 第3調査区西側、掘り下げ開始。
 29日 第3調査区東側、掘り下げ開始。
 2月5日 近世墓内の人骨検出に係る指導（岡山理科大学理学部川中教授）を受ける。
 6日 第2調査区東側、近世墓群検出作業開始。
 19日 第2調査区東側、中世墓検出作業開始。同西側、遺構検出作業開始。
 22日 中世墓の直下にもう1基の中世墓を確認。
 27日 昭和60年度第2回笠岡市埋蔵文化財専門委員会開催。
 3月6日 第2調査区西側、近世暗渠検出作業開始。
 21日 本谷遺跡群東方の今立字黒井地区内の山陽自動車道建設工事現場から工事中に五輪塔が発見されたという連絡を受けたため、現場調査に赴く。
 27日 本谷A遺跡に隣接する基地の移転に立会。
 29日 資材搬出。
 31日 調査後写真撮影。

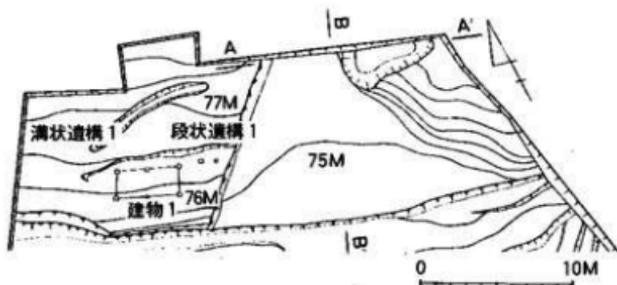
4 本谷A遺跡の調査

(1) 本谷A遺跡の概略

本谷A遺跡は、笠岡市今立193・194・199の2・214番地に位置する。遺跡の周辺は、南北から尾根が張り出しており、ちょうど峠を挟んで西側の園井地区と接している。遺跡は北側の緩斜面上にあるが、この位置は園井地区から峠を越えてさらに東に向かう道を見下ろす場所になる。

海拔は、峠付近で約70mを測り、遺跡付近では65～80m程度である。

土壌は淡黄褐色から明赤褐色の花崗岩質のものである。畑の開墾によって、遺跡付近の地形



第9図 第1調査区遺構 (1/400)

は改変が加えられており、調査着手前は3段に及ぶ段丘面を残していたが、調査により、その2段目は後世の盛り土により旧来の段丘から大幅に張り出されたものであることが判明した。

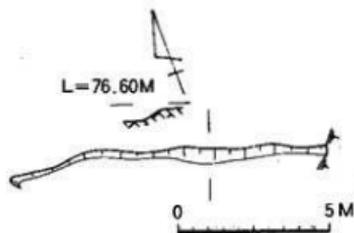
調査面積は、1,575㎡である。

(2) 第1調査区

第1調査区は本谷A遺跡を構成する3段の段丘面のうち一番上に位置するもので、59年度の第1次調査の際に設けたトレンチ2により、遺物包含層が確認されていた。

調査の結果、調査区の東半は小さな谷地形を示し、その西側には、地山を削って平坦面を作りだしている。この平面上で、段状遺構・建物・溝状遺構を検出した。調査区の北側は急斜面に絞っており、一部調査区を拡張したが、遺構は北側へは広がらないことを確認した。

谷部分には、その西半に流れ込みの状態でも遺物が出土した。また、後世の閉壘により、段丘面の南端は一部削られ、谷部にはこぶし人の礎が大量に埋められており、それらに混じって中世～近世の遺物が出土した。



第10図 段状遺構1 (1/200)

なお、この段の直下から碗(7)と小皿(17)とが出土している。

段状遺構1 (第10図)

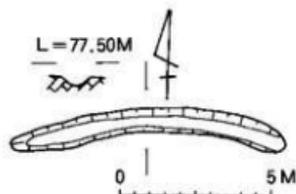
第1調査区の西側で、東西に走る等高線にほぼ平行して検出された。長さ約10.5m、最大幅50cm、最大高30cmを測る。北から南に下がった緩斜面を削って、その前面に平坦面を作ったものであるが、土砂の流失・後世の閉壘などにより、残っている平坦面は比較的狭い。

平坦面上からは建物1が検出されており、この段自身建物に伴うものと考えられる。

溝状遺構1 (第11図)

段状遺構1の北側に、段に平行しながらもゆるやかにカーブを描いた状態で検出された。延長約9m、最大幅1.0m、深さ20cmを測る。溝内は黒褐色土が埋まっていた。後世の削平により底部付近のみが残っていると考えられ、本来は南西方向にさらに延びていた可能性が強い。

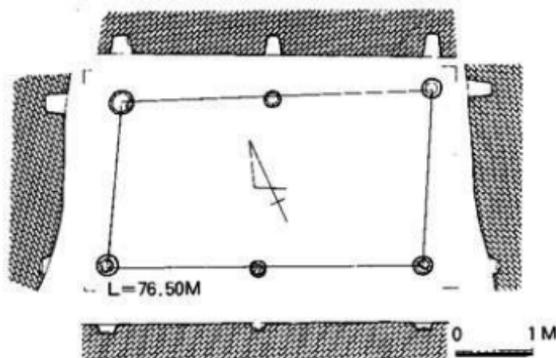
溝内からの出土遺物はないが、その位置関係から、段・建物1に伴うものと考えられる。



第11図 溝状遺構1 (1/200)

建物1 (第12図)

平坦面上に、段上遺構1から約50cm離れて建つ1間×1間の掘立柱の建物である。規模は、桁行405~405cm、梁間223~234cmを測る。全体的に若下東に広く、西に狭い平面形を示す。各柱穴は直径20~32cmを測り、茶褐色土が詰っていた。建物の主軸はN68°Eである。

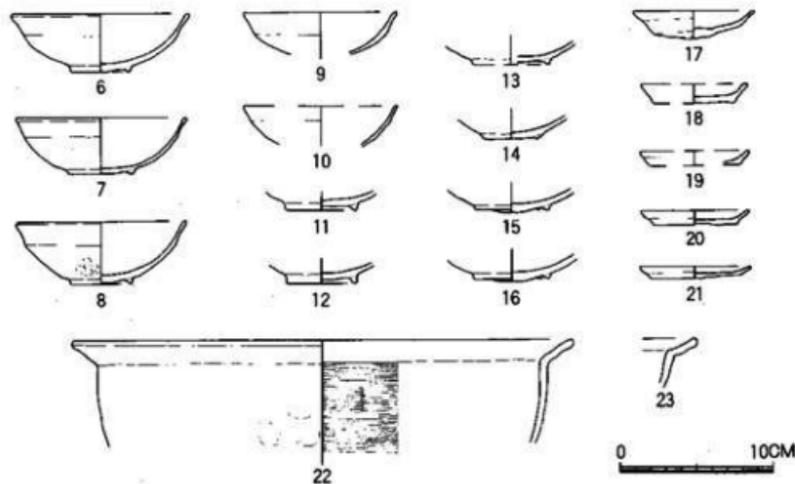


第12図 建物1 (1/80)

遺物は、建物と段状遺構との間から地山直上で出土した(7,17)や建物の束わきで段状遺構の下側の同じく地山直上から出土したものの(22)を含め、建物付近から淡黄褐色土に混じって出土したもののばかりである。

椀(6~16)は、いずれも細かい砂粒を含む胎土で、淡黄褐色を呈する。断面

面三角形の高台がつくものから、むしろ碗部の底の方が高台の最下部よりも下にくるものまである。口縁部付近にはヨコナデが施され、僅かに稜が残っている。口縁部径は11.2~11.6cm



第13図 建物1出土遺物 (1/4)

木谷遺跡

を、高台径は3.5~4.8cmを測る。

小皿(17~21)も、碗と同様の胎土・色調を示し、口縁部はヨコナデ、底部は回転ヘラ起しである。

鍋(22・23)は、口縁端部を「く」の字状に折り曲げて、僅かに内湾させるものが出土している。内面には細かいヨコハケが、外面には指頭圧痕が残る、煤もよく受けている。

これらの土器については、いずれも建物1に伴うものと判断され、13世紀後半代のものである。

谷部(第14図)

第1調査区平坦面の東側は、調査前こそ畑となっていたが、調査の結果、小規模の谷を後世に埋めたものであることが判明した。

谷の最大幅は12m、最大深は3.5mを測る。黄褐色系の表土に続いて礫を含んだ層があり、第8層は粘土質の明赤褐色土が堆積している。その下の第10層は黒褐色土であり、この層では西側の平坦部から流れ込んだ状態で、中世の遺物が多数出土した。第11層以下は、粘土質の無遺物層であった。

さらに、谷の縦断面によると、第5層及び6層のところで平坦面が形つくられ、とりわけ先端部分にはこぶし大から人頭大にも達する礫が埋められているなど、谷地形を埋めての開墾の跡がうかがえる。この礫に混じっては、中世~近世の遺物が出土していることなどから、この谷地形は、中世段階では深さ約3mの小規模なものを近世以後に埋めて畑としたものと考えられる。第2調査区を中心に石組の排水溝がつくられており、これらは一体のものと思われる。

出土土器については、以下のとおりであるが、第15図のものは谷部内の包含層から出土したものであり、第16図は、段丘面の先端に礫と混じって出土したものである。

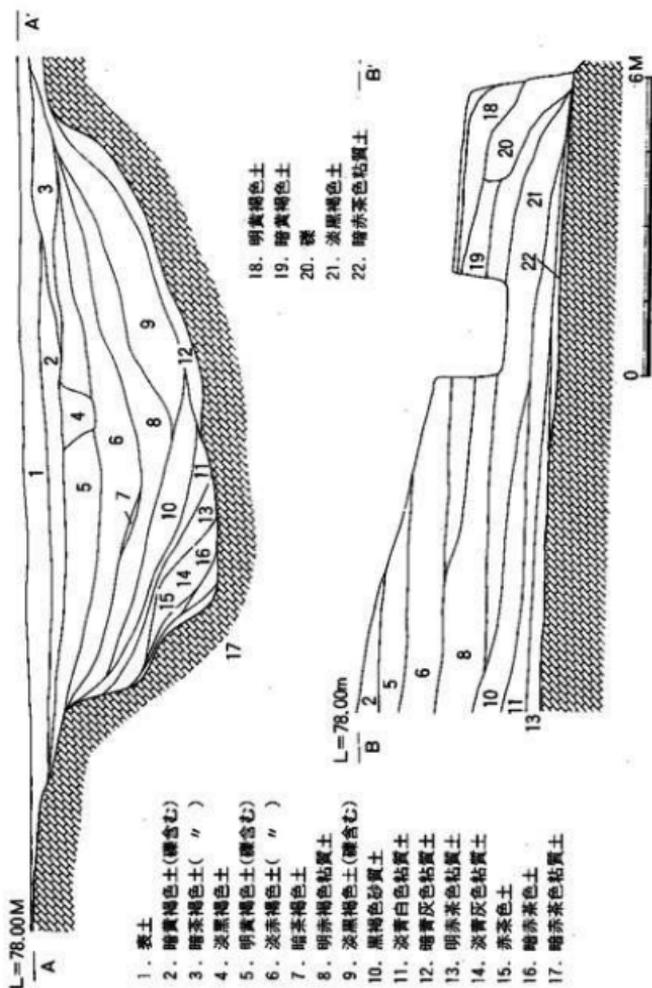
碗(24~45)には、高台のしっかりしたもの(24~27)・単純化したもの(28~41)・さらに単純化したもの(42~45)が見られるが、量的には単純化して細い粘土紐を貼り付けただけのものが多数を占める。胎土・色調・調整などは、建物1のものと同じである。完形を留めるものが少ないために単純に比較はできないが、底径は4cmを中心にして順に小型化の傾向は認められる。

小皿(46~54)には、非常に浅いものも含まれているが、胎土・調整などはそれ以外のものと同じである。口径は6.8~7.8cmの範囲内だが、7.0cm前後に集中している。

鍋(55~60)は、「く」の字状の口縁部を底するものばかりであり、しかも僅かに内湾するものが多い。口縁端部が大きくなるものも見られる。よく火を受けており、煤の付着が顕著である。内面には細かいヨコハケが残っている。このほか、土製支脚も1点出土している。

摺り鉢(61~62)は少量であるが、須恵質のものが出土している。

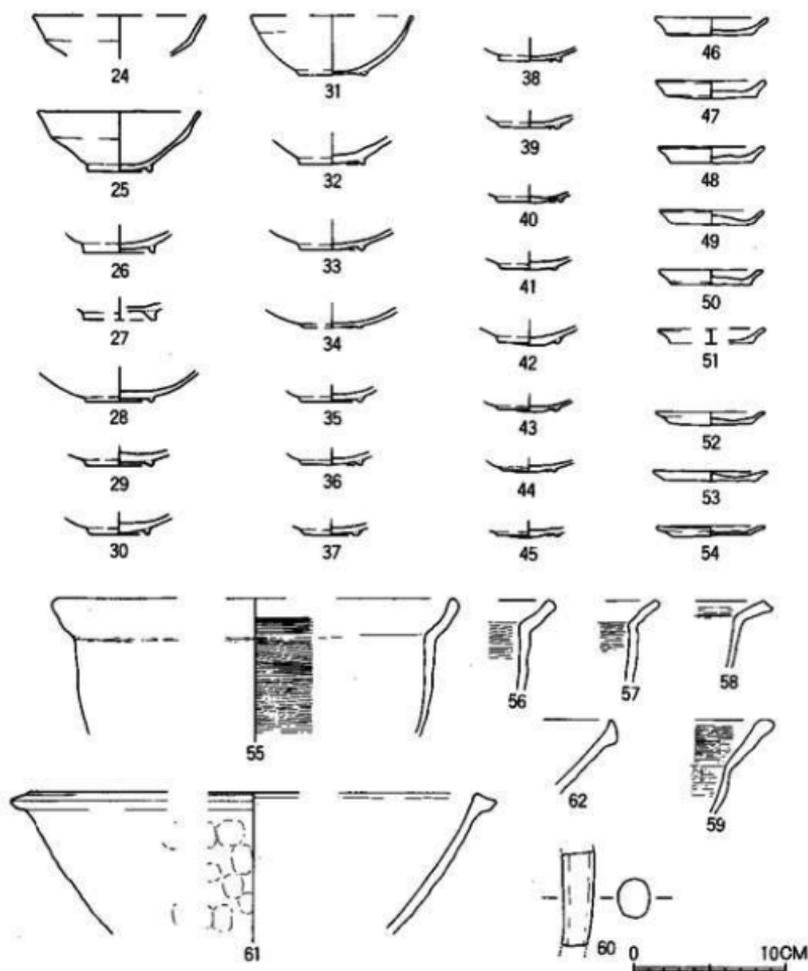
これらは、西側の平土部分から流れ込んできたものと思われ、建物1に伴う遺物と同じ時期のものであると考える。器種の構成をみると、圧倒的に碗の出土量が多いが、そのいずれもが



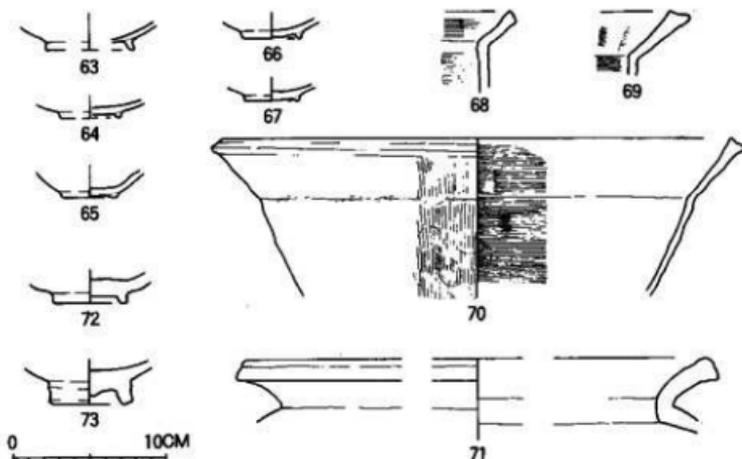
第14図 第1調査区谷部 (1/120)

本谷遺跡

高台を有するものであり、いわゆるへソ碗は出土していない。また、鍋についても、「く」の字状のものが大半であり、支脚もあることなどから、これらの遺物は、本谷遺跡群の中でも最も古い時期のものと言える。



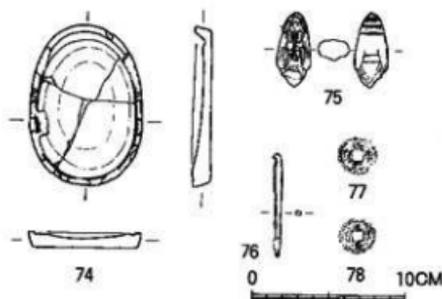
第15図 谷部包含層出土遺物 (1/4)



第16図 谷部確層出土遺物 (1/4)

第16図に示したものは、礫に混じって出土したものでいずれも小破片であるが、70の鍋については、約3分の1を残していた。土師質碗(63~67)をはじめ、鍋(68~70)・甕(71)があるほかに、陶磁器(72・73)も出土しているが後世のものである。

第17図は、谷部から出土したその他の遺物である。74は、第10層から出土したもので、粘板岩製の石鏡である。出土時に一部欠損したところもあるが、全長10.8cm、幅7.3cm、高1.1cmを測る楕円形で、ほぼ完形のものである。底部からは外に向かって立ち上がり、断面は逆台形を示す。海部は縁辺部及び上方に設けられており、陸部は使用によってかなり磨滅している。



第17図 谷部出土遺物 (1/4)

75は土製人形で、前半分と後半分とを型でつくり、合わせたものである。軸葉がかけられており、虚無僧を模したものである。礫中から出土しており、江戸期のものである。

76も同じく礫に混じって出土したものであり、断面長方形の鉄釘である。

77・78はいずれも第10層から出土した古銭である。77は熙寧元宝(1068)、78は元豊通宝(1078)である。

(3) 第2調査区

第2調査区は、本谷A遺跡の2段目の段丘面であり、59年度の調査では遺物包含層と柱穴が確認されていた。

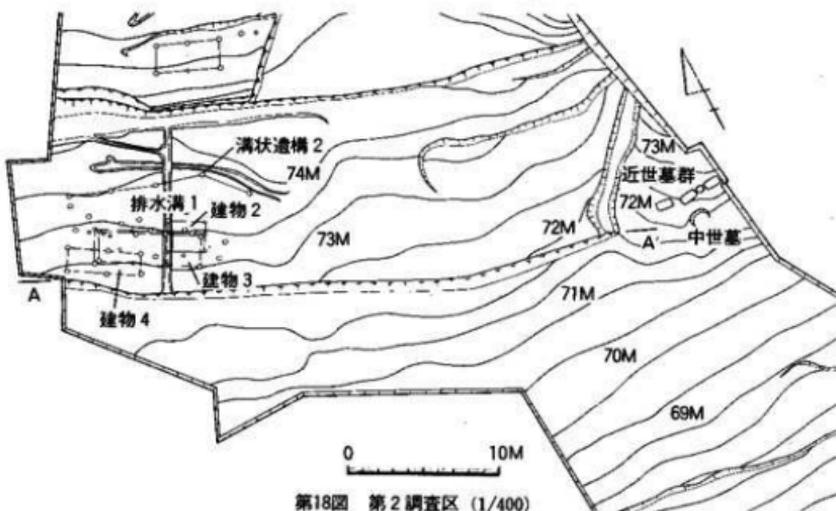
調査の結果、調査区の東半で近世の排水溝に削平されていたが、平坦面を検出し、そこから溝状遺構・建物を検出した。建物群の広がりについて一部調査区を西に拡張したが、柱穴を検出することができず、これ以上は広がっていないものと判断した。西半は、第1調査区西から続く浅い谷地形を埋めたもので、その前側に厚く造成土が堆積していた。この造成土中には中世の土器が混じっており、後述する中・近世墓に伴うか、若しくは造成により破壊された墓に供献されていたものではないかと推定できる。

また、調査区の東端では谷の反対側斜面を利用して、斜面上に中世墓2基と近世墓4基を検出した。これらのうち近世墓については、調査区に隣接して墓地があることからそれらと一体のものと考えられる。

溝状遺構2 (第19図)

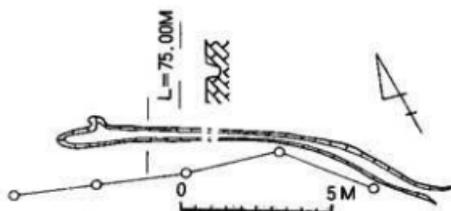
第2調査区東側の平坦部北側で検出されたもので、東側は谷部へ開口している。

長さは約13m、幅は30~45cmを測る。深さは削平により一定しないが、30cm程度である。中央付近を近世以後の開墾による排水溝1に壊されているが、全体的にはほぼ北西方向から南東方向へ掘られていたことが窺える。



第18図 第2調査区 (1/400)

遺溝内からの遺物の出土はないが、この溝と平行するように、直径30cm程のピットが並んでおり、これらが、建物群の乗る平坦面の北側に建物の長軸と平行するような形で走ることから集落の北側を区画する溝及び、柵的なものではないかと考える。



第19図 溝状遺構 2 (1/200)

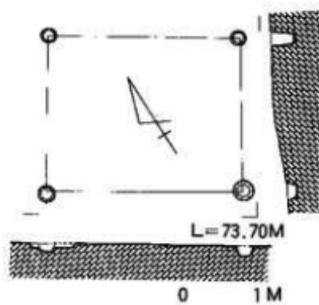
建物 2 (第20図)

第2調査区平坦面からは多くのピットが検出された。これらは、溝状遺溝から約2mばかり離れたところに始まり、段丘面の先端部にまで及んでいる。但し、先端部については後世の削平を大規模に受けていることから、さらに南側にまで広がっていた可能性も否定できない。

また、この平坦部は比較的傾斜を有しているが、両側のピットの残存高が浅いことから、本半は緩やかなものではなかったかと推測される。

この平坦面からは都合3棟の掘立柱の建物跡を検出した。

建物2は、それらのうち最も東側に位置する1間×1間のものである。規模は、桁行256~262cm、梁間206~208cmを測り、東西方向にやや長い長方形を呈する。西側の柱穴は、排水溝により大部分削平されており、その基底部のみ検出できた。また、南半分も削平を受けていた。



第20図 建物 2 (1/80)

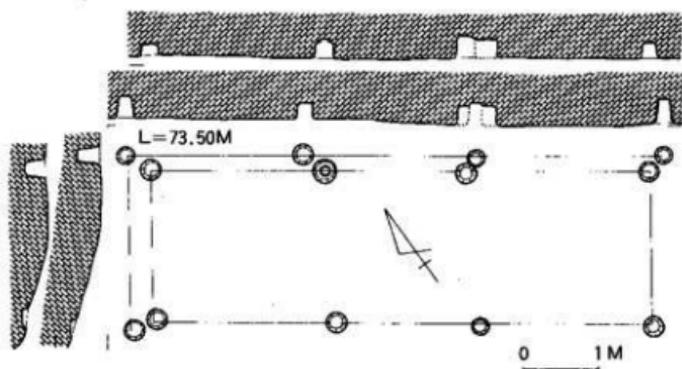
建物内からは89の縄がほぼ完形で、82の縄の高台が破片の状態出土した。主軸はN32°Eである。

建物 3 (第21図)

平坦部のほぼ中央部において、建物2・3と切り合った状態で検出された1間×3間の建物である。規模は、桁行が660~662cm、梁間204cmを測り、東西方向に長い長方形を呈する。この周囲には、庇状に柱穴が北側と西側とに並んでいるが、東側については確認できなかった。

建物の南半分は、大きく削平されていることから、梁間は2間以上あった可能性もある。また、東から2番目の柱穴は排水溝1によりその基底部しか検出することができなかった。

建物の主軸は、N35°Eである。

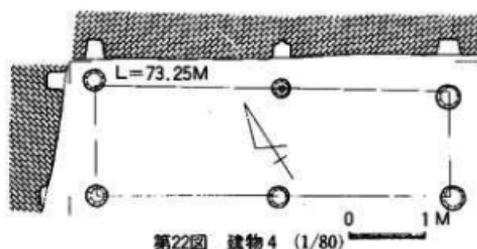


第21図 建物3 (1/80)

建物4 (第22図)

建物群の最も西側のものである、1間×2間の建物で、桁行466cm、梁間142~148cmを測る。全体にやや西側に歪んだ平面形を示している。

この建物も建物3と同様に南半分の削平がひどく、梁間の増える可能性もある。主軸は、 $N32^{\circ}E$ である。

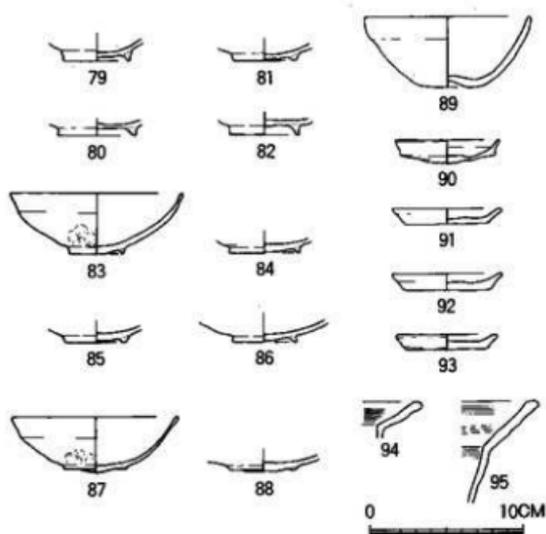


第22図 建物4 (1/80)

これら第2調査区にて検出された建物からは、その付近も含めて土師質土器の出上が多く見られた。それぞれの遺物と建物との関係は、必ずしも明確ではないため、建物群に伴う遺物として取り扱う。

椀(79~89)には、第1調査区出土のものと同様の胎土・焼成・調整技法の、高台のしっかりしたものから椀部の底の方が高台のそれよりも低くなるものまでであるが、量的には、高台のしっかりしたものは少ない。

むしろ、89のように、やや厚手で、密な粘土を用いながら、底部を上方にくぼませた形のものが出土していることに注目される。口縁部径の変化は、破片のものが多いために概括的なものとなるが、高台の退化に伴って縮小しており、89は口径10.8cmを測る。



第23図 建物付近出土遺物 (1/4)

小皿(90~93)は、いずれも底部を回転ヘラ切りにしており、口縁径は7.1~6.6cmの範囲内におさまる。

鍋(94・95)は、「く」の字状で、短く外反するものとさらに大きく広がるものが出土している。内面にはいずれにもヨコナデが施されている。

これらの十器は第1調査区出土のものとはほぼ同じ様相を示しているが、碗の中で、底部をへこませたものが出土している点などは、やや後出のものを含んでい

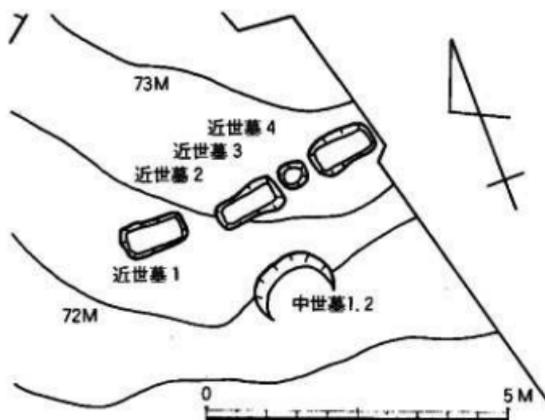
るといえる。これらのことから、建物群に伴うこれらの土器は、13世紀後半でも比較的新しいものと考えられる。

ここで、第2調査区検出の建物群の相互の関係について考えてみる。

基本的にこれらの建物は、建物3が他の2つの建物と切り合っていることから、少なくとも2時期以上の建て替えが想定できる。しかしながら、これらの周辺から出土している土器の様相に大きな時期差が認められないことから、数十年単位の中に十分収まる建て替えと考えるべきであろう。但し、その中でも建物3は、規模が大きく、また、回りに庇状のものを持つ点で他の2棟とは異なっており、本谷A遺跡の中で見ても、中核的な建物であったと思われる。

相互の細かい切り合い関係も明確でない上に各々の建物の上軸方向もほぼ同一であることから、建て替えの順序について細かく言及することは困難だが、第1調査区の建物が確実に1棟であることを考慮に入れると、建物1と3・建物2と4というグループ分けが可能である。

もちろん2棟が集落の単位であると単純に考えるわけではないが、集落の北・西への広がりが認められないことからして上・下の2段に1棟ずつあった建物が、次の時期に下の段にまともしたものと考えられることもできよう。このことは、谷部包含層出土の土器が古い様相を示し、建物2内ピット出土の土器に高台を有しないものがある上に、そのピットへの混入土の中に高台のしっかりした碗の破片がはいっていたことは、一つの手がかりになるものと考えられる。



第24図 中・近世墓群 (1/100)

谷部 (第25図)

第2調査区の東半分は第1調査区から続く谷地形を示しているが、その谷の深さは浅く、1m足らずである。地表面以下は第1調査区と同様の礫混じりの黄褐色土がはいるが、その下に暗黄褐色土が谷の東側を中心に見られる。この層は、谷の西側斜面を一部削るようなかたちではいって

おり、さらに段丘面の前方に張り出す造成土の中心をなすものである。この造成土の中から土器の出上があったことから、この時期の造成が大規模であったことが推測される。

なお、谷部西側で淡茶褐色土層が見られたが遺物の出土はなかった。また、溝状遺構2の流れ込むところはこの層である。

中世墓1 (第27図)

第2調査区の谷部西斜面において、中・近世墓を確認した。出土状況については、まず、斜面の南側において造成土下の淡茶褐色土を除去中に、ほぼ完形に近い壺型土器の出土を確認した。そのため、回りの土を取り除いたところこぶし人の礫に囲まれた壺が検出できた。

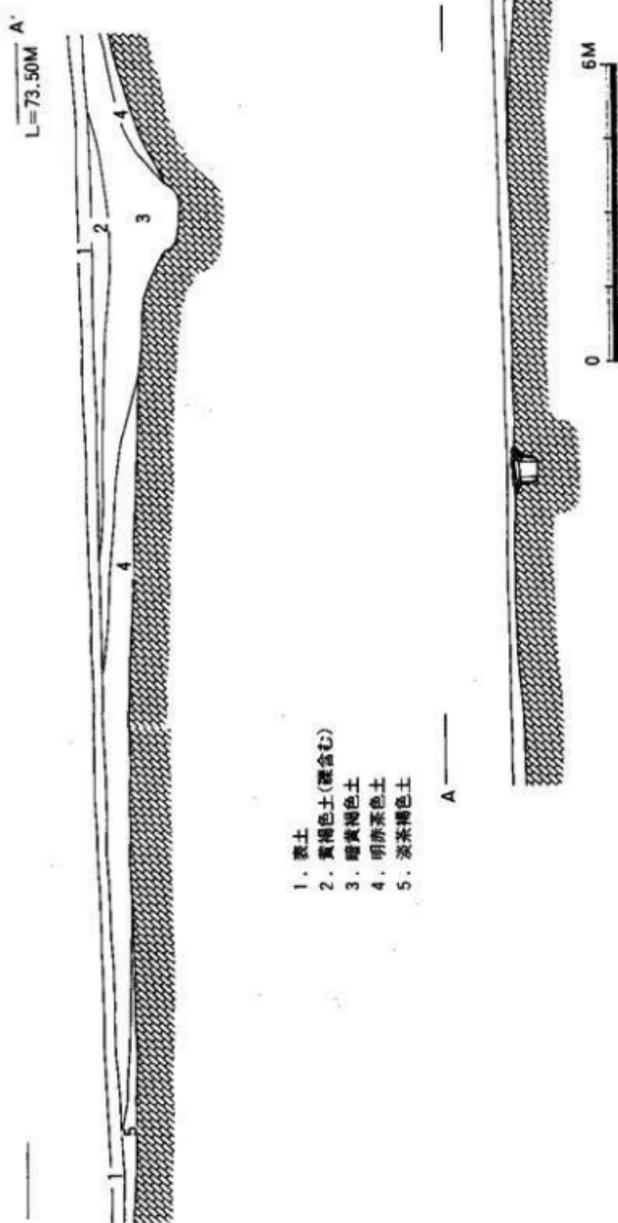
この南側には、さらに大型の石が据えられており、ちょうど斜面上で土留的な役割を果し、壺を据えるための平坦面を作るためのものと考えられる。そして、そのわきから、土師質の椀の完形品の出土があった。これらの状況から、壺棺を用いた中世墓であると判断した。

壺棺は、やや北側に傾き、その口縁部は半分近くが割れて中に落ち込んでいた。壺の周囲には、底部から約3分の1位のところまで小礫で固定されており、その南側を大きな礫で囲むような状態であった。壺を取り除いた下は、さらにこぶし大程の礫がちょうど蓮の花状に並べられており、同じく、壺棺の固定の役割を果していた。

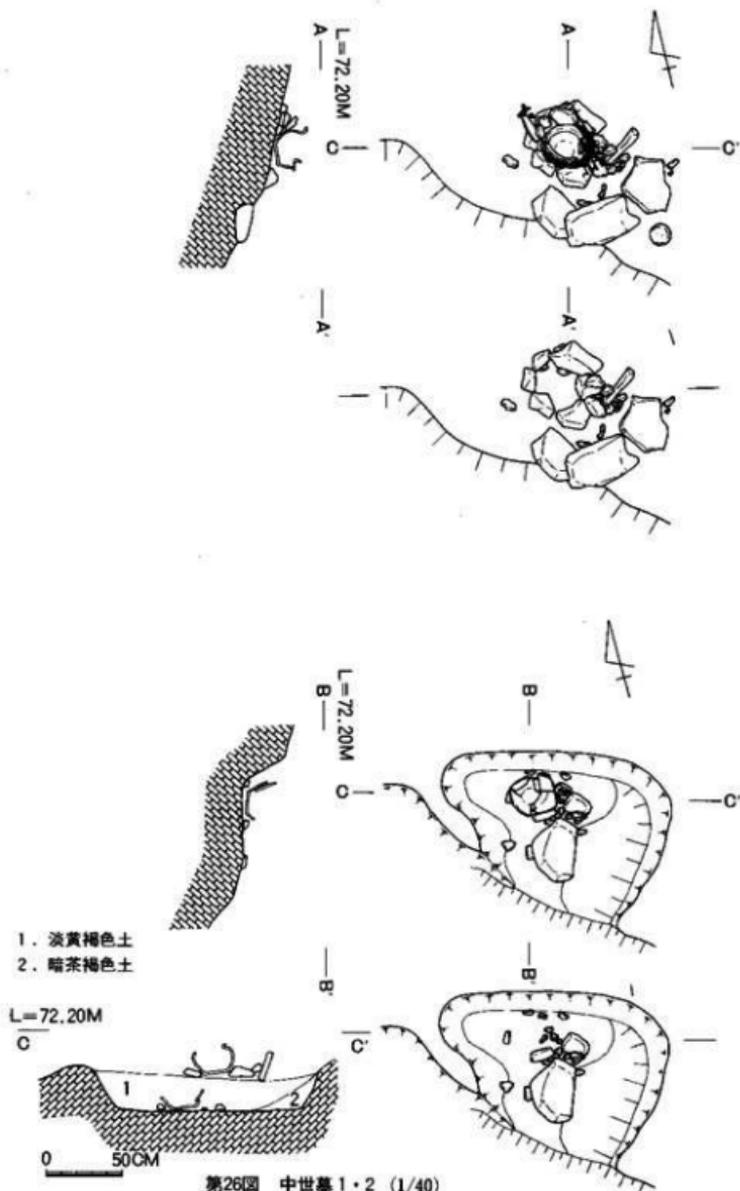
壺の中は淡茶褐色土が詰っており、火葬骨は検出できなかった。

なお、この中世墓に伴う墓域は、確認できなかった。

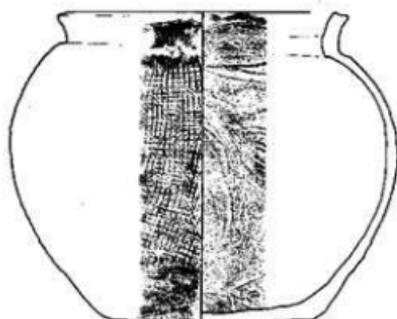
出土した壺は、高さ21cm、口径17.4cm、最大径25.5cmを測る。口縁部は「く」の字状に折れ曲り、その端部はヨコナデにより面を有する。



第25図 谷部 (1/120)



第26図 中世墓1・2 (1/40)



96



97

第27図 中世墓1 (1/4)

び、使われている胎土が水滲の緻密なものであることから、中世墓1に伴う遺物と判断した。口径10.4cm、器高2.9cmを測り、底部はへこんでいる。全体にナデ調整が施されており、口縁端部は上方に僅かにつまみあげられている。

中世墓2 (第28図)

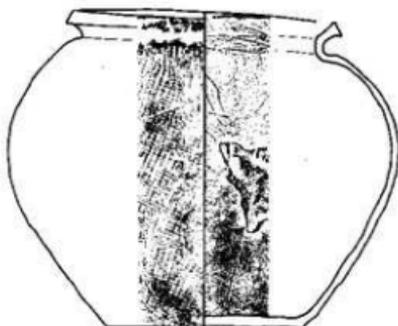
中世墓1を取り除いたのち淡黄褐色土を清掃していたところ、その下やや西側に上半を破壊された壺を1個体検出した。さらに調査を進めた結果、中世墓1で土留的に使用されていた石の一つを共有するかたち

全体に、比較的厚手の割部を持ち、その外面には一辺約2~3cmの細かい格子状の印き日が残されたとおり、胴部下半にはヘラ削りが施されている。胴部内面は、同心円印きをナデ調整により消してあった。

底部外面には、胴部下半のヘラ削りが行われた後に、胴部外面に残されているものと同じ大きさの格子印きが施されている。むしろ、この印き調整のために底部は僅かに丸みを帯びてしまい、壺自体の安定は必ずしも良くない。

97は、中世墓1の南側に配された石のわきから出土した完形の皿である、皿は、中世墓を埋め込んだ淡黄褐色土の中から石のレベルとはほぼ同一のところに上を向いた正置の状態出土しており、その出土状況及

0 5CM



98



0 5CM

第28図 中世墓2 (1/4)

で、小礫により固定されていた壺の胴部下半を確認したため、これを中世墓2とした。この壺はほぼ水平に置かれていたと推定されるが、上方からの圧力によりつぶされたような状況で出土した。しかしながら、口縁部及び胴部上半は、胴部内・周辺に落ち込んだ状態のもののみではなく、斜面下方に流れ落ちていたものに接合できるものもあった。

壺棺は既に壊されていたために、火葬骨は確認できなかった。なお、中世墓の周囲に東西1.5m、南北1.0m、深さ30cm程度で地山の掘り込みが検出でき、暗茶褐色土で埋められていた。

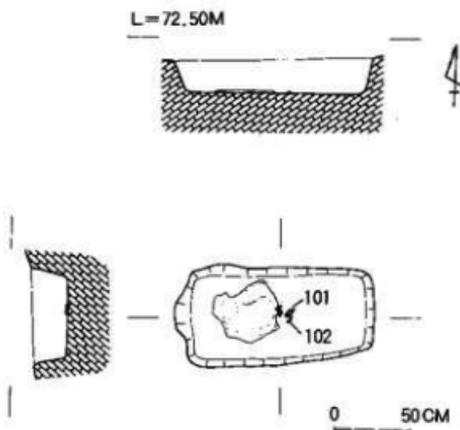
壺は高さ21.1cm、口径はやや歪みがあるが17.1cm、胴部の最大径25.6cmを測る。口縁部は「く」の字状に胴部は全体的に薄手に作られており、外面には2～3mm角の格子状叩きが残っている。胴部内面は丁寧なナデが施されている。

底部は、ゲタ印が明瞭に残り、平らになっている。

この壺については、亀山焼であると判断され、14世紀末から15世紀初め頃のものと考えられる。従って、中世墓1に使われている壺については、それよりも後出の15世紀前半代のものと考えられるが、底部の技法に亀山焼とは異なる部分があり、亀山焼とは現時点では断定できない(註1)。

近世墓1 (第29図)

中世墓群の上方、谷に落ち込む西側斜面で人骨の破片を少量確認した。このため斜面を精査したところさらに人骨片・土師質小皿(99)・寛永通宝(106～108)が散乱した状態で出土し



第29図 近世墓1 (1/40)

た。さらにこの東側に、地山を掘り込んで上層墓を4基検出した。

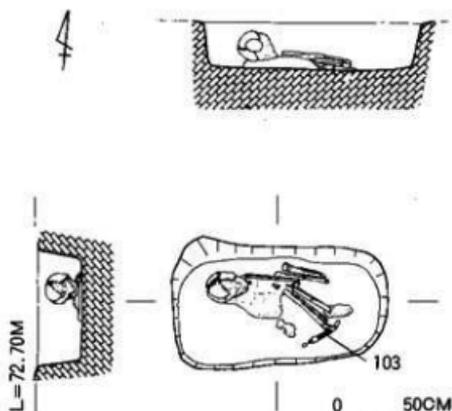
近世墓1は、そのうち最も西側に位置するもので、上方はかなり擾乱を受けており、墓内の骨が墓墳の外でも採集していたことが人骨の鑑定により判明した。

墓域は、長径1.3m、短径0.6m程度の隅丸長方形を呈し、淡茶褐色土で埋まっていた。墓内の人骨はほとんど土化しており、頭位の方角などは不明である。副葬品としては、底部中央付近から出土し

た鉄鈇(101)・刀子状鉄器(102)がある。

僅かに残されていた人骨は鑑定の結果、2～3歳の幼児のものであることがわかった。

近世墓2(第30回)



第30回 近世墓2 (1/40)

近世墓1の東側約60cmのところから検出されたもので、ほぼ全身の人骨が残っていた。

墓坑は、長径1.4m、短径0.7m程度の隅丸長方形を示し、頭部が東を向いた状態で膝を折り曲げた人骨が黒褐色土とともに埋められていた。膝はやや北に傾き、胸の骨を足の上で確認したことから、膝を抱えたような姿勢で坐った状態で葬られたものと推測できる。

棺については、確認できなかった。

副葬品としては、腰骨の右側から鉄鈇(103)が1点出土している。熟年前半の女性人骨であるとの鑑定であっ

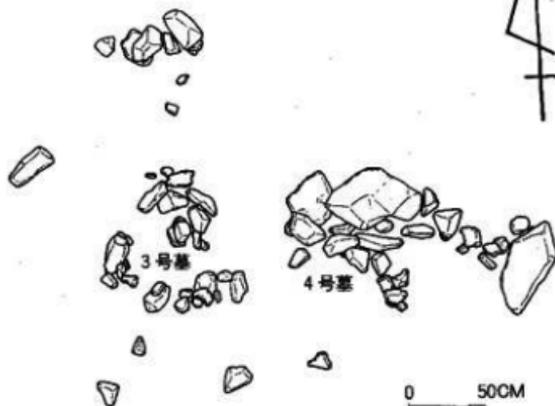
た。

近世墓3(第32回)

近世墓2のさらに東側で検出した2基の墓は、墓坑上にこぶし大から人頭大の花崗岩の礫が配されていた。

近世墓3は、直径75cm程度の円形に近い平面形である。

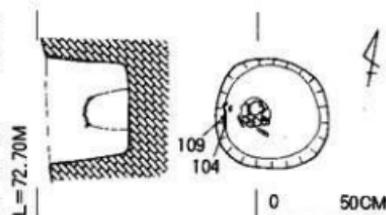
墓坑内には同じく人骨が残っており、頭骸骨の破片



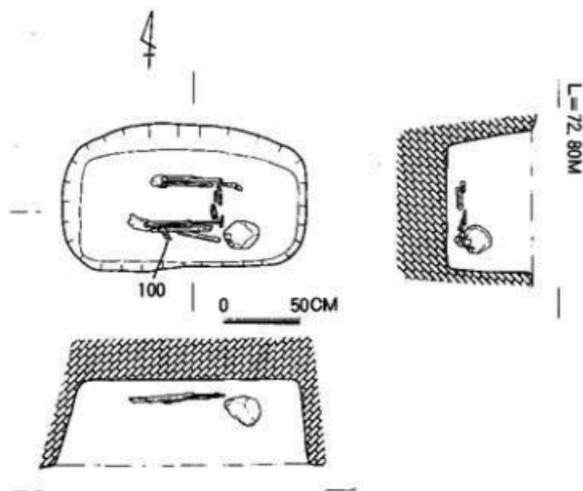
第31回 近世墓3・4 (1/40)

が上側に確認できたが、全体に破損が著しいため、土と一緒に取りあげた。このため、埋葬状況の詳細は不明である。

副葬品としては、頭骸骨とほぼ同レベルで墓壇壁面に近いところから鉄製刀子(104)、寛永通宝(109)が出上した。2歳前後の幼児の骨であるとの鑑定であった。



第32図 近世墓3 (1/40)



第33図 近世墓4 (1/40)

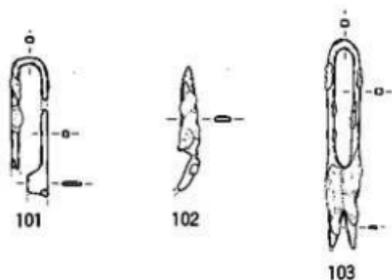
近世墓4 (第33図)

近世墓3の東側にはほぼ接するようなかたちで検出されたものである。長径1.6m、短径0.9m程度の隅丸長方形を早する土壇墓で、ほぼ1体分の人骨が黒褐色土の中に埋められていた。

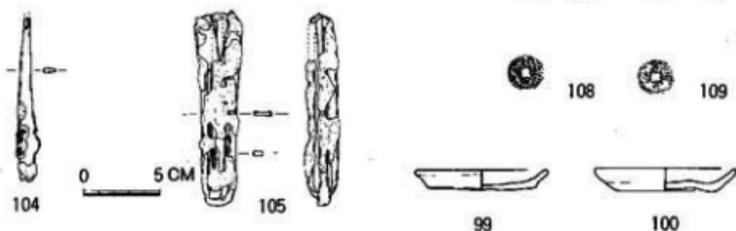
頭位は東側で、ちょうど西側を見据える状態で出土した。足は重ねられていることなどにより、正坐して、西を面した状態で葬られたものと考えられる。棺材などについては、確認できなかった。

副葬品としては、左足付近で、十師質小皿(100)、鉄鉢と毛抜きを互いに組合せたもの(105)が出土した。熟年の男性の人骨であるとの鑑定である。

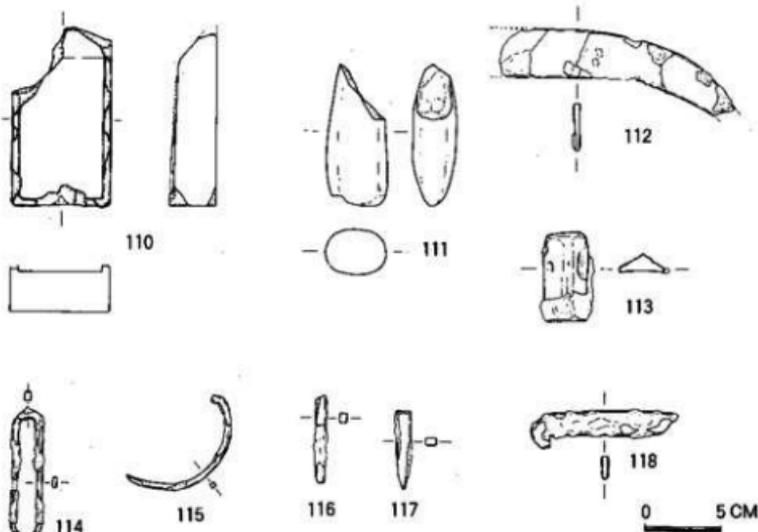
このほかに、近世墓群確認の経緯となった、近世墓1の南西で検出した人骨は、斜面下方でさらに小片の状態で散乱していた。鑑定では、4～5歳の幼児のものであった。



これらの土壙墓は出土した土師質土器・古銭などから江戸時代の前半に営まれたものとする。人骨から見ると熟年の男女と3人の幼児という構成であり、互いの切り合いもないことから順次葬られたものといえるとともに、密接な血縁関係も想定できる(註2)。



第34図 近世墓出土遺物 (1/4)



第35図 遺構に伴わない遺物1 (1/4)

第35図及び第36図は、第2調査区から遺構に伴わずに出土した遺物である。

110は、排水溝の石として転用されていた石硯である。砥石状の非常にもろい石材を使用したもので海部の大半は欠損しているが、平面形は長方形である。残存長は11.9cm、幅6.5cm、厚さ3.1cmを測り、断面は縁を除いて長方形を示す。近世期のものである。

111は、段丘面に張り出された造土中から出土したもので、砂岩製の磨製石斧である。基部は欠損しているが、残存長は9.4cm、最大幅4.1cm、厚さ2.9cmを測る。

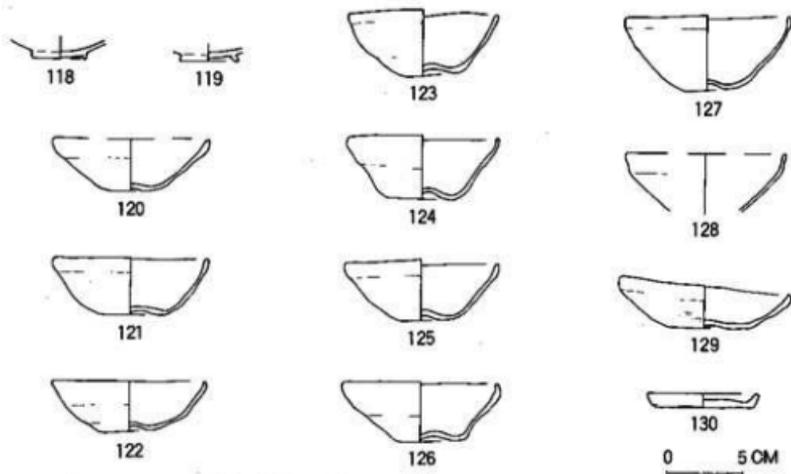
112～117は、排水溝から礫に混じって出土したもので、鉄釘(115)・くさび(116・117)などがある。

118～130も谷部の黄褐色土から出土したものである。118・119は谷部の西側から出土した碗である。

120以下は近世墓下方の南側斜面上から出土したものであるが、大半は小破片での出土である。碗には高台のつかないものが多く、器高が4cm以下のもの(120～122)とそうでないものに分け、さらに後者は、碗部が屈曲しているもの(123～126)と緩やかに立ち上がるもの(127)とに分れる。3者の割合としては、屈曲するものが最も多く、復元径ではあるけれども口縁径を比較してみると、それぞれ10.0cm、9.7～9.8cm、10.6cmとなる。碗部の屈曲するものは、本谷B遺跡出土の祭祀状遺構に伴うものと同じ大きさ・胎土である。

このほか皿(129)・小皿(130)などが出土している。

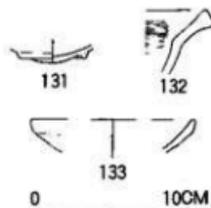
これらの土器は、中世の範疇におさまるものであり、上方の中世墓との関連性が想像できる



第36図 遺構に伴わない遺物2 (1/4)

が、直接に伴う遺構などは確認することができなかった。

(4) 第3調査区



第37図 第3調査区出土
遺物 (1/4)

第3調査区は、本谷A遺跡の3段の段丘面のうち最も下に位置するもので、遺物包含層の広がる可能性があったために調査対象範囲とした。

調査の結果、2段目との本谷の段丘面の境は上側からの造成土のために埋められており、この造成土から出土した遺物を除くと、当該調査区出土の遺物は土師質土器の細片ばかりであった。

層序的にも、表土を除去すると10cm程で地山に到達した。

(5) 小 結

本谷A遺跡は、本谷遺跡群の中でも最も西側に位置するもので、峠を越えれば隣接する園井地区に通じる道すじを見降ろすところになる。ここでは、南向きの緩斜面上に2段の平坦面を作りだし、それぞれに建物が建てられており、小規模の集落を形成していた。周囲からは、表採資料を含めてこの遺跡へと結びつく前代の集落が確認されていないことから、この本谷の地区に始めて集落が形成されたのはこのA遺跡の地点であったと考えられる。

この集落遺跡には、計4棟の建物を想定できるが、その中でも上下に1棟づつの建物を残す段階が遺跡の初現と思われる。次の段階には、下側の平坦面に建物は移っているが、集落の規模自身に大きな変化は認められない。これらの時期については、13世紀後半の鎌倉時代末の範囲に収まると考える。

この集落遺跡から、谷を隔てた反対側の斜面の南側に、亀山焼及び亀山焼系の壺を用いた火葬墓が営まれていた。この墓は、ちょうど下側に先に葬られていたものを壊すかたちで、重なり合っていた。時期的にはA遺跡の時期よりも後世のものであり、直接にA遺跡と結びつくものではないが、遺跡群の中で巨視的にとらえる必要がある。

このほか、江戸時代の土葬墓を確認したが、墓域はこの後も東に移りつつも使われていることから、中世から近世に及ぶこの地区の墓制の変化を知る上で興味深い。

註1. 亀山焼については、岡山県古代吉備文化財センターの岡田博氏から多くのご教示を得るとともに、亀山遺跡出土の資料についても実見する機会をいただいた。

註2. 調査区に隣接して、同じく道路用地内に江戸期以後の墓地が残されていた。移転に際して、地元の方の了解をいただき立会調査を実施したところ、陶磁器・キセル・人骨などの出土を確認した。

5 本谷遺跡東側散布地の調査

(1) 調査の概略

本谷東側散布地は、今立本谷地区を見降ろす谷部の奥まったところに位置し、南側に開口する小支谷を両側に有する。本谷A遺跡とは、その西側の支谷一つを隔てており、舌状に延びた尾根の先端部分には、ハイガイを中心とする貝の散布が確認されている。

現状では、尾根の西側斜面に稻荷神社がまつられているほかは、ほぼ全域に及んで閉塞を受けており、小テラスの多い地形となっている。

この全域約8,000㎡の範囲内にトレンチを設定し、遺構・遺物の検出に努めた。その結果、稻荷神社西方で中世の土器及び、須恵器が出土したほかに、貝塚西側でピットを検出した。

このことから、尾根の西側と先端部とに集落遺跡のあることが判明した。

なお、この散布地の調査にはいる直前に、本谷A遺跡の調査を担当していた調査員が負傷・入院したために、当該調査が実施できたのは文化課学芸員の協力の賜物であった。

(2) 調査の結果

概要 調査対象範囲全域に長短22本のトレンチを設定した。その結果、トレンチ2・21から多量の上節質土器と須恵器の出土があった。この包含層は、上側に設定したトレンチ3で平坦面が確認できたことから、この付近にまで延びているものと判断された。

また、最高地点付近に設定したトレンチ5からは、陶質の大甕の出土があった。このため、一部トレンチを増やして周囲を調査したが、その他の遺構・遺物は確認できず、甕自身も単独の出土である上に場所が畑の隅であることから、肥料甕であると判断した。

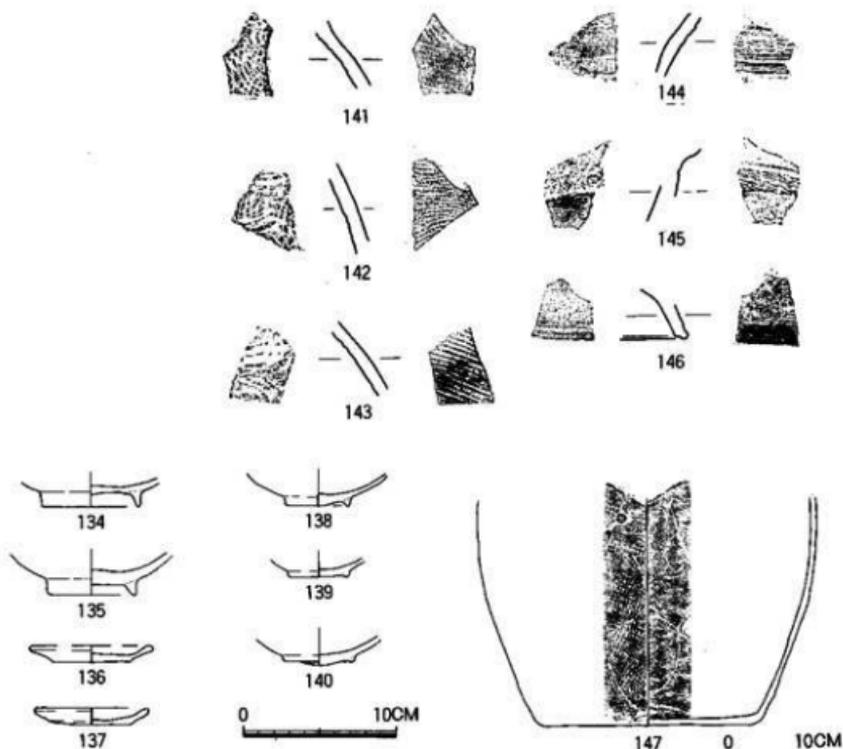
さらに、尾根の先端部で、貝塚の西側の畑に設定したトレンチ18から不整形のピットを検出した。

遺物の説明 134～137はトレンチ2から出土したものである。甕は高くしっかりとした高台をもち、高台径は、134が6.4cm、135が5.4cmを測る。胎土はどちらも細かい砂粒を含むもので、淡黄褐色を呈す。小皿は底部を回転ヘラ切りしており、口縁径は、136が7.4cm、137が7.0cmを測る。

138～140はトレンチ21から出土したもので、細かい砂粒を含む淡黄褐色の、高台の単純な甕である。

141～146はトレンチ2から出土した須恵器片である。甕の胴部片が大甕で、外面には叩き調整が内面には、同心門叩きが残っている。

147はトレンチ5から単独で出土した大甕である。砂粒を多く含む胎土で、焼成は余り良く

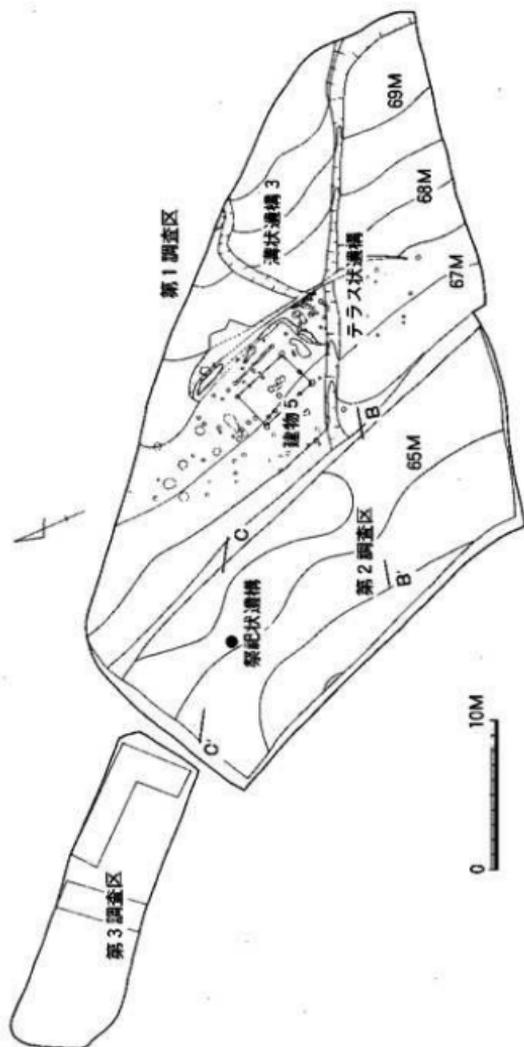


第38図 本谷東側散布地出土遺物 (1/4, 147:1/8)

なく淡灰色を呈し、最大径は43.6cmを測る。外面には1cm角程の格子叩きが施されており、内面には荒いヨコハケがおこなわれている。

(3) 小 結

以上のことから、本谷東散布地にはトレンチ2・21を中心とした部分に遺物包含層のあることと貝塚付近にも遺跡の広がることが判明し、2,000㎡を第2次調査の対象範囲とした。



第39図 本谷B遺跡全体図 (1/400)

第4節 昭和61年度の調査（本谷B遺跡・本谷C遺跡）

1 調査の経過

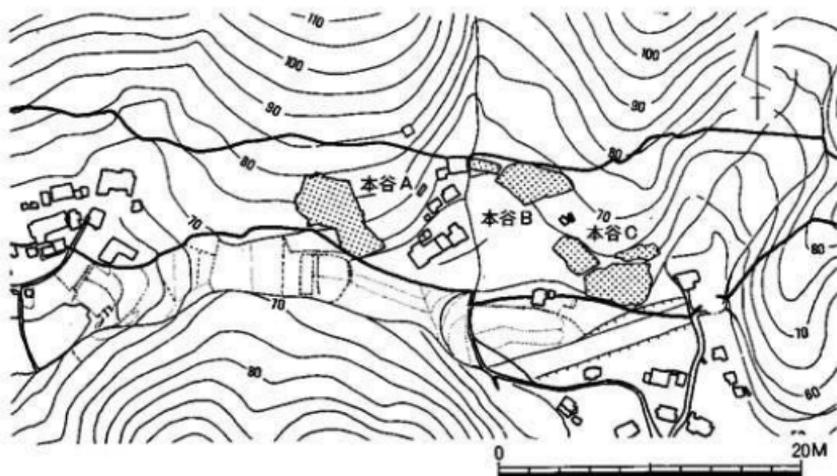
本谷遺跡群の発掘調査は、60年度の本谷A遺跡の全面調査に続いて、61年度は本谷遺跡東側散布地で確認された2ヶ所の遺跡に対しての全面調査を実施した。

今年度の調査から、臨時調査員を1名増やし調査の充実を図った。対象としたのは前年度の第1次調査で稲荷神社西方に確認された本谷B遺跡と尾根先端部に確認されていた貝塚周辺の本谷C遺跡である。

調査は4月に本谷B遺跡から着手し、10月に終了し、その後は現場事務所にて整理・保存作業をおこなった。

2 調査の概要

第1次調査で遺物包含層の確認されていたトレンチ2・21からトレンチ3を中心に（本谷B遺跡）、また、貝塚と遺構の確認されていたトレンチ18から17付近を中心として（本谷C遺跡）調査範囲を設定した。



第41図 本谷B遺跡・本谷C遺跡位置図 (1/4000)

調査の結果、本谷B遺跡では、上下2段のテラス面と谷部へ造成地形を確認し、順に第1・2・3調査区と名づけた。第1調査区からは建物・溝を検出し、第2調査区からは谷へ流れ込む斜面上で土師質の椀・皿・鍋を用いた祭祀状遺構を確認した。

本谷C遺跡は、調査着手前の畑の状態から西より順に第1・2・3調査区を設定した。第1調査区からは、掘立柱の建物3棟を確認し、さらに中世土器を多量に包含する層を検出した。第2調査区からは、江戸時代後半の屋敷跡に伴う溝・井戸・土塙を確認し、合わせて多くの陶磁器の出土もあった。このほか、本谷C遺跡全域から人糞を用いたものを含め、近世墓を多数確認した。

3 日記抄

61年

- 4月1日 調査準備開始。
- 7日 調査対象範囲の表土剥ぎ開始。
- 11日 本谷B遺跡掘り下げ・遺構検出作業開始。溝・建物などを確認する。
- 5月23日 第2調査区西端から土師質土器を用いた祭祀状遺構を確認する。
- 26日 検出遺構の実測開始。
- 6月11日 本谷B遺跡の大半の調査が終了したため、一部本谷C遺跡の掘り下げ作業を併行して開始する。
- 7月2日 本谷C遺跡遺構検出作業開始。第1調査区から中世の建物などを第2調査区から近世の溝・井戸などを確認する。
- 25日 昭和61年度第1回笠岡市埋蔵文化財専門委員会開催。
- 28日 本谷B遺跡全景写真撮影。発掘作業終了。
- 8月5日 本谷C遺跡各所から確認された大甕の検出作業開始。副葬品を有するものもあり、墓と見られるものが含まれている。
- 12日 山陽高速自動車道埋蔵文化財保護対策委員の方々の視察。
- 19日 本谷C遺跡第2調査区貝塚部分検出作業開始。
- 9月6日 本谷遺跡現地説明会を実施する。地域住民を始め、50名余りが参加。
- 30日 本谷C遺跡第2調査区近世炉群検出作業開始。
- 10月4日 本谷C遺跡全景写真撮影。発掘作業終了。

62年

- 3月13日 昭和61年度第2回笠岡市埋蔵文化財専門委員会開催。

4 本谷B遺跡の調査

(1) 本谷B遺跡の概略

本谷B遺跡は、今立259、272、277、278番地に位置する。遺跡は、本谷A遺跡から谷一つ隔てて500mばかり東側の尾根の西側緩斜面上であり、その東30m程のところには稲荷神社が祭られており、付近の住民からの信奉を得ている。また、この遺跡の面する谷すじには、山頂付近の天水溜めの池から小川が一本流れ降りていて、周辺の田畑を潤すものとなっている。

海拔は65～70m程度であり、地山は明赤褐色の花崗岩質のものである。

調査面積は、995㎡である。

(2) 第1調査区

本谷B遺跡調査着手前に残されていた東側の畑を中心とするもので、60年度の第1次調査により平坦面の一部が確認されていた。

調査の結果、平坦面上に建物・テラス状遺構が検出され、中世の上部質土器が出上した。

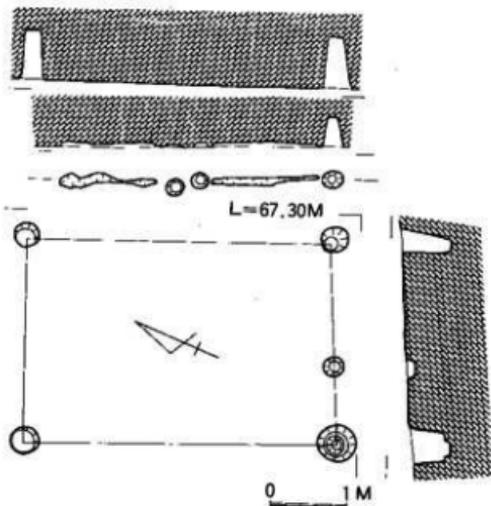
建物5 (第42図)

第1調査区のはほぼ中心部で平坦面を削り出した段状遺構から1.5mばかり離れて検出されたものである。1間×1間の建物で、桁行400～414cm、梁間268～272cmを測る。全体にやや北側が狭く歪んでいるが、それぞれの柱穴は直径30～45cmで、深くしっかりしたものである。

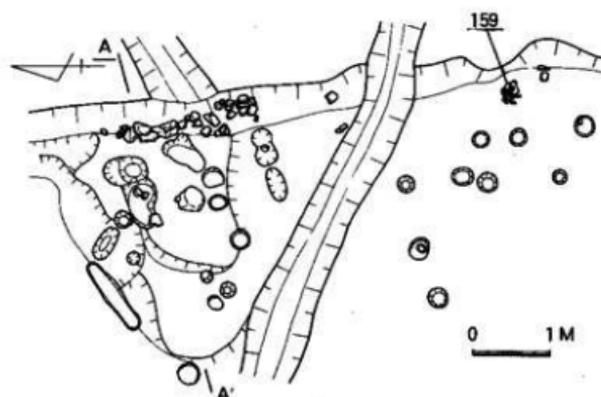
この建物の北側には、雨落ちの溝が一本検出され、底の柱穴も一部確認できた。

建物の主軸はN67°Eである。

この建物からは遺物の出土がないが、東側に隣接するテラス状遺構出土の土器から14世紀前半代のものと考えられる。



第42図 建物5 (1/80)

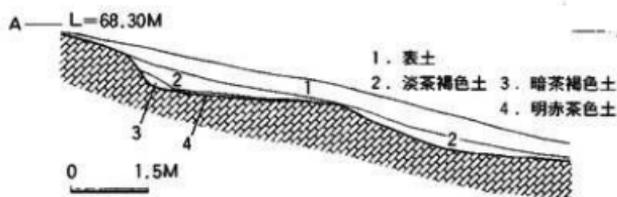


第43図 テラス状遺構 (1/80)

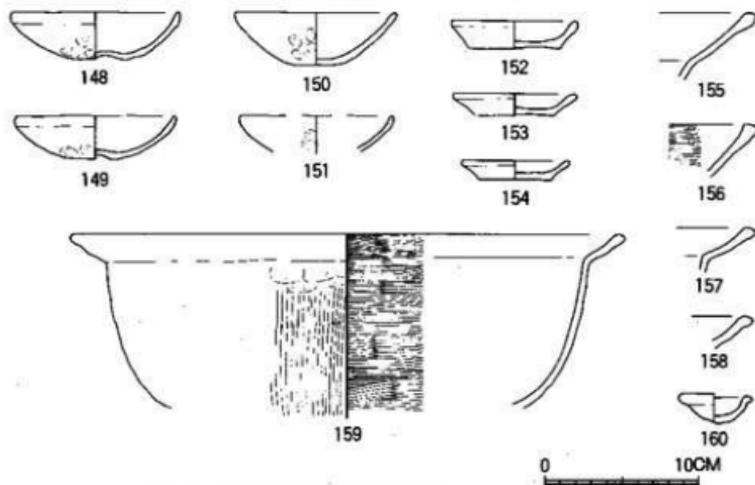
テラス状遺構（第43図）

平地面南半から検出されたもので地山を削り出して1.5×2m程度のテラス面を作り出しているが、その西南は後世の畑の境界の溝により削平されている。

テラスでは地山上に少量の焼土及び木炭が残っており、不正円・楕円形のピットが数多く検出できたが規則性が認められず、建物は確認できなかった。



第44図 テラス状遺構 (1/120)



第45図 テラス状遺構出土遺物 (1/4)

このほか、さらに南側からは、ほぼ完形に近い土師質鍋が木炭とともに出土しており、これらことから、このテラスの上では炊事が行われたものと判断した。

第47図はこのテラスから地山直上で出土した土師質土器である。

皿 (148~149) 148~149は比較的厚手で、砂粒を多く含む明黄褐色の皿である。口径は、148が10.7cm、149が10.3cmを測り、底部は僅かにへこんでいる。外面には指頭圧痕が残っているが、内面には丁寧なナデが施されていた。

碗 (150~151) 緻密な胎土で焼きの良い淡黄褐色の皿である。口径は10.2cm、器高は3.5cmであり、底部は押圧により平らになっている。調整は、皿と同様である。

小皿 (152~154) 小皿は底部を回転ヘラ切りし、ヨコナデにより丁寧に作られている。

鍋 (155~159) 鍋は、口縁部を「く」の字状に折り曲げて僅かに内湾するものと口縁端部が折り曲げられたのちさらに大きく延びるものがある。

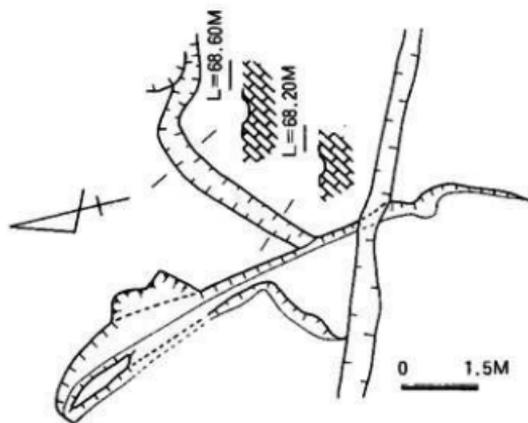
159は段のすぐ下から木炭を伴って出土した鍋である。口縁部は「く」の字状に小さく折り曲げられており、僅かに内湾するものである。口縁部下外面には指頭圧痕が残るが、その下にはタテ方向の荒いハケ調整が施されている。内面は、細かいヨコ方向のハケ調整が全体におこなわれていた。煤をよく受けており、底部については復元できなかった。

なお、この鍋に伴う木炭のC¹⁴年代測定法により、AD1320から50の年代を得ている。

小型土器 (160) 160は砂粒を多く含む手つくねの小型土器であり、灰沢褐色を呈する。

これらの土器は、高台を有する碗が消滅しており、器高の低い皿が主になっていることなどが特徴であり、本谷A遺跡の建物群に伴うものよりも後出のものといえ、14世紀前半代のもの

と考える。



第46図 溝状遺構 3 (1/120)

溝状遺構 3 (第46図)

テラス状遺構に向って、尾根の上側から蛇行気味に掘られているものである。残存深は20cm程であり、暗茶褐色土で埋まっていた。この溝と段との交差するところには小石が並べられていたが、むしろ、この溝がちょうどテラス状遺構の真上を通り、畑の境界溝に向

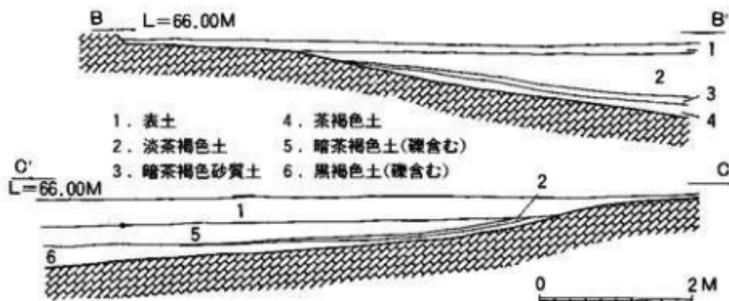
かうかたちとなることから、後世のものだと判断した。従って、小石についても溝に伴うものではなく、テラスでの炊事に伴うものではないかと推測する。

(3) 第2調査区

第2調査区は、第1調査区の卜側の畑を中心とするもので、前年度の調査の際にトレンチ2・21から遺物の包含層が確認されていた。調査の結果、調査区の北半は谷部へ深く落ちこんでおり、層序的には表土下に淡茶褐色の堆積が見られ、遺物の出土はあったものの、遺構を確認することはできなかった。

北半では表土下に、暗茶褐色で礫を多く含む層があり、さらに谷部へ礫層が続いている。

この暗茶褐色土中より土師質の碗と小皿を重ねた上に鍋をかぶせた遺構が検出できた。出土状況から水利に関係する何らかの遺構と考える。



第47図 第2調査区土層 (1/80)

祭祀状遺構 (第48図)

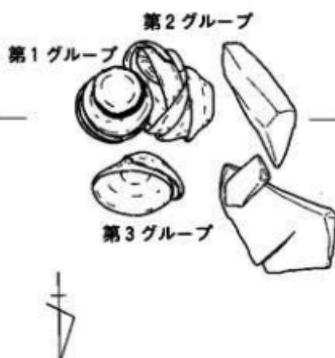
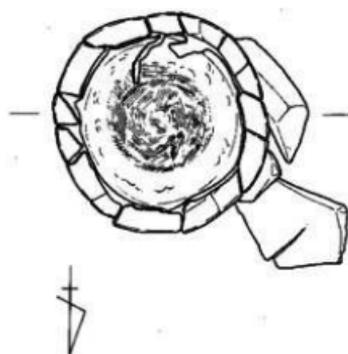
第2調査区の北半で検出されたもので、当初下向きの鍋がほぼ完形で出土した。そこで、割れ目から中の様子をうかがったところ碗・皿のはいつているのが確認されたものである。出土十層は暗茶褐色の礫混じりのものであり、周囲でその他の遺構・遺物は確認できなかった。

鍋はほぼ水平になっており、西側の縁の下にこぶし大の石が3個あったけれども直後に鍋と接しているものではないため、この遺構との係わりは少ないと思われる。

鍋を取り除くとその内側から碗が10点・小皿が5点出土している。これらの土器は、その出土状況から161~167・168~173・174~175の3グループに分けることができる。

第1のグループは碗を3点重ねた中に小皿を4点入れていた。第2のグループは碗を5点重ねた中に小皿が1点下向きに入れられていたが、東側に倒れていて第1のグループ下に一部も

L=65.50M



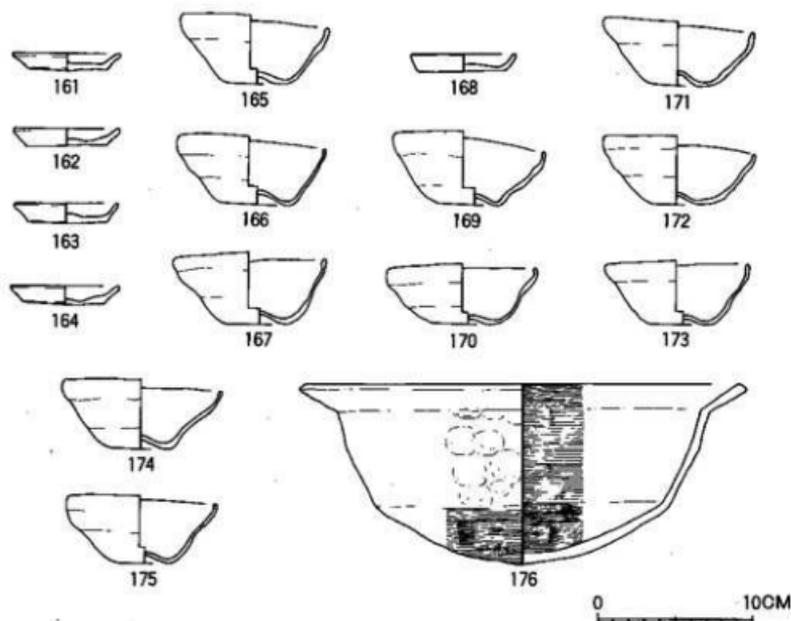
第48図 祭祀状遺構 (1/10)

ぐりこむようなかたちであった。第3のグループは碗のみが2点重ねられており、北側に倒れていた。

第49図は、出土した土器である。碗は、いずれも砂粒を含むものの比較的緻密な胎土で、焼成も非常に良好である。全体として明黄褐色を呈し、薄手に作られている。底部は上方にくぼめられているが、必ずしも底部中央がくぼんでいるわけではなく、やや中心からはずれたところである。かなり歪んでいるために口縁部は9.1~10.1cm、器高は4.2~5.0cmとばらつきはあるけれども、ほぼ同じ大きさといつてよい。

小皿は細かい砂粒を含む胎土で、淡茶褐色から淡黄褐色を呈する。底部はいずれも回転ヘラ切りの跡を残しており、その他は「草なデがおこなわれている。口径は、6.7~6.9cm、器高は1.1~1.3cmである。

鍋は、小皿よりも少し砂粒の多い胎土で、焼成も良好である。外面には、煤の付着が全く見られず、鍋として2次的に使用された痕跡は認められない。口縁部は「く」の字状に折れるもので、その端部は面を有する。胴部は底部付近に緩やかな段を作っている。外面調整は、口縁部ともにヨコナデがおこなわれており、胴部は指頭片痕が明瞭に残っている。底部には、ヨコ



第49図 祭祀状遺構出土遺物 (1/4)

方向を主体にハケ目が残されていた。内面調整については、全面にヨコ方向のハケ調整がおこなわれている。

これらの土器について、その整然とした碗・小皿の重ね方、及び検出時の破損を除いてほとんどが完形品であることから、使用済のものを廃棄したものではないと判断される。このことは、伏せられていた鍋にも全く煤の付着がなく、使用の跡が見られないことから認められよう。とくに、出土した碗は、緻密な胎土で薄手・硬質な焼きになっており、日常生活以外の使用を推測させるものである。

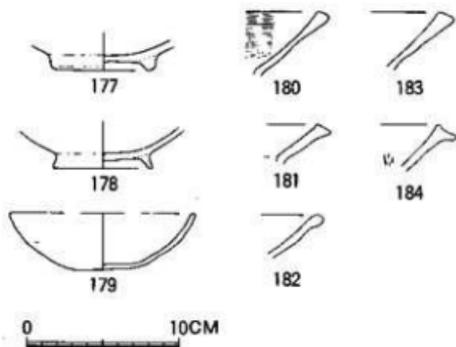
次に、出土状況であるが、出土地点が集落の縁辺部であること・谷に流れ込む位置であること、そして、この谷を走る小川が地形的にこの近辺で利用できる数少ない用水路となることから、これらの土器は、水利に伴う祭祀に関連する遺構ではないかと考える(註1)。

第50図は、第2調査区の包含層から出土した遺物であるが、いずれも小破片である。このうち高台を有する碗は、その高台の大きさ・高さなどから古いタイプのもつと見られるが、これらに伴う遺構は確認されていない。

なお、第1次調査の際に、トレンチ2から破片ではあるが、須恵器の出土があり、それらと関連する遺物・遺構の検出に努めたが、出土土層自体礫泥じりの層であり、確認はできなかった(註2)。

(4) 第3調査区

第3調査区は、本谷B遺跡の東への広がりを調べるために設けていたが、谷を埋めたものであることがわかった。表土以下は、小石から人頭大の礫を混じえた黒褐色土であり、遺物の出土は小破片を除いて確認できなかった。



第50図 包含層出土遺物 (1/4)

(5) 小 結

本谷B遺跡は、本谷遺跡群の中でも中央に位置するものであるが、地形的にはA遺跡と尾根を一つ隔てており、海拔的にもより下側になっている。園井地区から峠を越えて、本谷A遺跡の前方を通る道も地形的にさらに下側へ降りていることが推測され、基本的には、むしろ、小規模の扇状地形を見降ろすところに立地していると考えられる。

この集落遺跡からは、平坦面上に建物が1棟確認されただけであるが、出土した土器の様相は、14世紀前半のものであり、本谷A遺跡に後続する遺跡であると言える。

この遺跡からは、水利に伴うと見られる祭祀状遺構が検出されているが、碗の形態から、やや後出のものと判断されるので、集落の継続期間は15世紀にまで及ぶものかもしれない。

註1. 同様の遺構については、岡山市足守南坂遺跡にて単独出土したものがある。それらは、やや丸底に近い鍋が伏せた状態で出土しており、その中から皿が4点出土したという。この遺構については、墓の可能性を担当者は指摘されており、考察篇でさらに検討したい。

註2. 出土した須恵器については、工事用地の北側から流れ込んできたものと考えられたため、天水溜めの池に向って谷の両側を踏査したが、遺構・遺物は発見できなかった。

5 本谷C遺跡の調査

(1) 本谷C遺跡の概略

本谷C遺跡は、今立264、267、268、269の1、269の2番地に位置する。遺跡は、本谷B遺跡の載る尾根の先端部を中心とするところであり、現在の本谷地区の集落中心部をちょうど見降ろすようなかたちになる。遺跡のすぐ北側には稲荷神社が祭られており、北東には、墓地が形成されていた。

調査前は、一面に畑となっており、西側のテラスから順に1から3の調査区を設定した。海拔は60m程度であり、地山は、A・Bと同じく明赤褐色の花崗岩質のものであった。調査面積は、1,489㎡である。

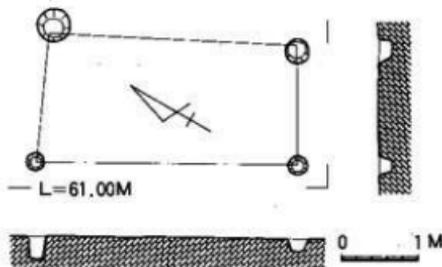
(2) 第1調査区

本谷C遺跡の最も西側に位置する平坦面であり、稲荷神社のすぐ下にあたる。前年度の第1次調査でピットが確認されていたところで、調査の結果、竪立柱の建物と中世土器の包含層を確認し、中世の集落が存在したことがわかった。

このほか、調査区各所から、近世墓（土壌墓・妻棺墓）が検出された。

建物6（第51図）

第1調査区の東端から検出されたもので、平坦部の端から6m程度離れて建っている。1間×1間のもので、桁行328~344cm、梁間158~170cmのややいびつな平面形を呈するが、柱穴として深くはっきり掘られていること・柱穴内に埋まっていた茶褐色土が同様であることなどから建物として取り扱った。



第51図 建物6 (1/80)

建物の主軸はN61°Eである。周囲からの遺物の出土はないが、主軸方向が他の建物とはほぼ同じであることより、同時期のものと考えられる。

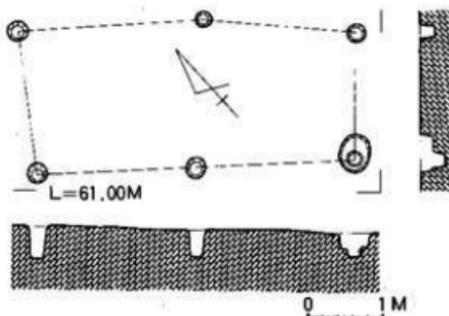
建物7（第52図）

第1調査区の西端で検出されたものであり、建物6の西約5mに位置する。この建物のさらに西側は1.5m程で斜面になる。

本谷遺跡

建物は、1間×2間のもので、桁行420～448cm、梁間168～190cmを測り、北西隅の柱穴の位置がやや歪んだところにある。

建物の主軸はN40°Eである。建物内及び、建物付近から遺物の出上はなかったが、西側の斜面に落ち込んだ状態で大量の中世の土器が出上しており、これらの建物に伴う遺物であると考えられる。



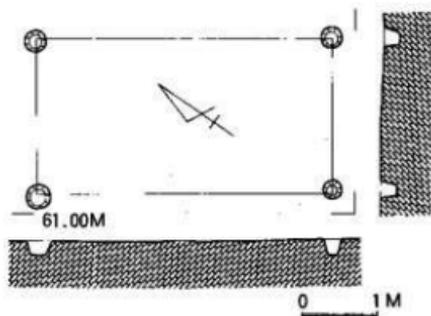
第52図 建物7 (1/80)

建物8 (第53図)

第1調査区の北側で、建物7の北約5mのところ検出した。建物7と同様に、この建物の西側は1m程で斜面に続いている。

建物は、1間×1間のもので、規模は桁行400～414cm、梁間204cmを測る。

建物の主軸はN55°Eであり、建物内及び建物周辺から遺物の出土はなかった。



第53図 建物8 (1/80)

これら3棟の建物は、規模・方向

的に共通する部分があり、このテラス上で一単位の集落を構成するものであると判断した。時期については、斜面出上の土器から、15世紀後半から16世紀前半にかけてのものであると考える。

斜面包含層 (第54～55図)

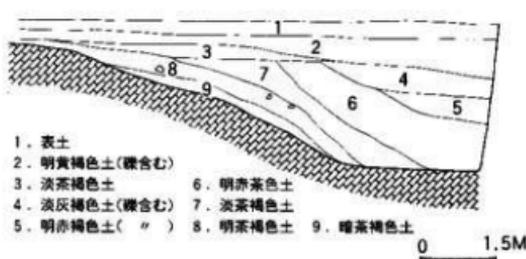
第1調査区西側は、建物の建つテラス面から急に落ち込んでおり、さらに、後世の畑による造成のために良好な状態で、遺物の包含層が残されていた。

上層は表上下にまず明黄褐色で礫混じりの地山造成土があり、この下に淡茶褐色土が続いているが、これらはその下の土層を削平するかたちではいっており、出土する陶磁器などから、江戸時代前半の造成と考える。



第54図 包含層遺物出土状況 (1/40)

A-----L=61.00M



- | | |
|---------------|----------|
| 1. 表土 | 6. 明赤茶色土 |
| 2. 明黄褐色土(礫含む) | 7. 淡茶褐色土 |
| 3. 淡茶褐色土 | 8. 明茶褐色土 |
| 4. 淡灰褐色土(礫含む) | 9. 暗茶褐色土 |
| 5. 明赤褐色土(〃) | |

第55図 斜面土層 (1/120)

この削平面の下には、さらに硬凝じりの地山の堆積があり、これらが明茶褐色土の遺物包含層を良好な状態で埋めていたものである。但し、この包含層も平坦面との境界付近では近世の層と接するかたちになり、擾乱も受けているようであった。

包含層内での遺物の出土状況は、あたかも日常これまで使用していた土器を一括して斜面に捨てたようであり、比較的大きな破片が目につき、復元可能なものも多かった。破片による復元も含めると、量的には、碗が7点、皿が28点、鍋が11点、摺り鉢が5点、甕が4点程度となる。

これらの土器の捨てられたと見られる

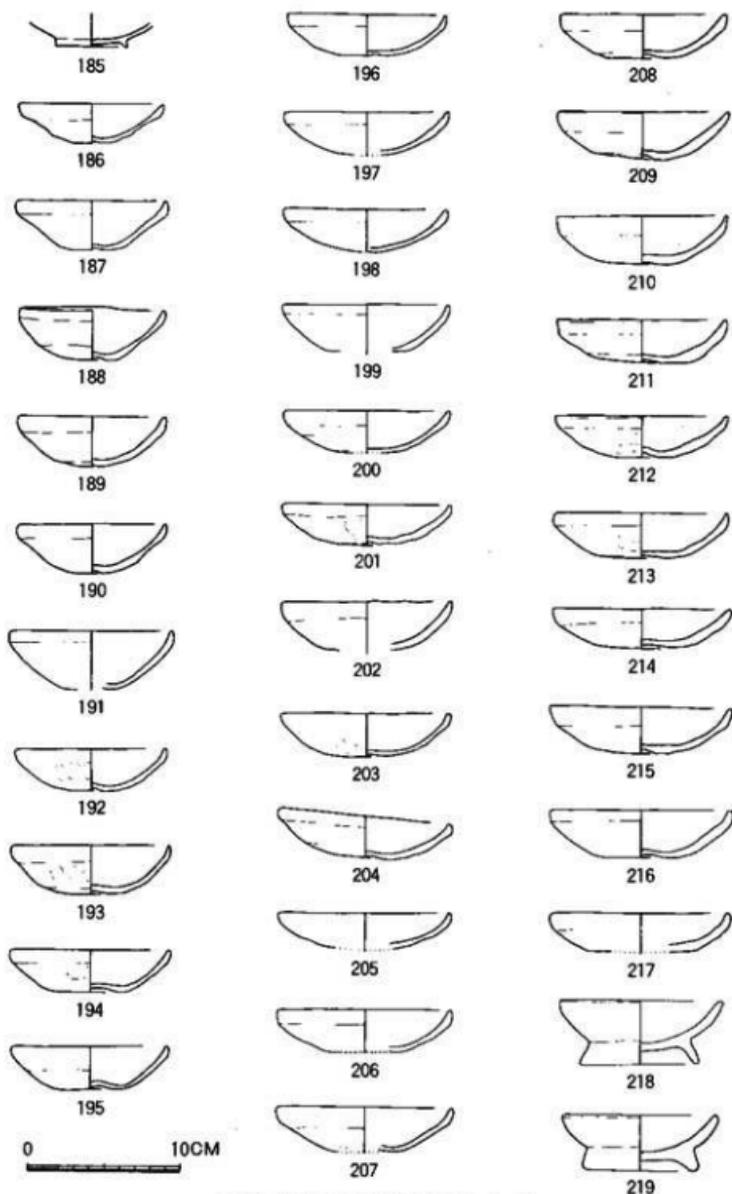
方向を平坦面上に伸ばしてみるとと建物7に当たる。

従って、これらの土器は、建物7の廃絶に伴い捨てられたものである可能性が高い。

碗(185~191) 碗については、高台のつくものもあるが小破片1点のみであった。その他につ

いても、器高・形態から碗に分類したが、器壁に厚みが出、口径も9.2~9.4cm程度のものが多く、器高も低くなっている、皿と区別は微妙である。その中で胎土については、皿と比べて砂粒の少ないものを使用しているようである。

皿(192~219) 最も出土量の多い器種である。やや砂粒の多い胎土を用い、焼成は良好で、全体に淡黄褐色から明黄褐色を呈する。底部は押圧により平らにされたところに、ヘラ状の工具で僅かにくぼめられている。口縁端部と内面にはヨコナデが丁寧に施されているが、外

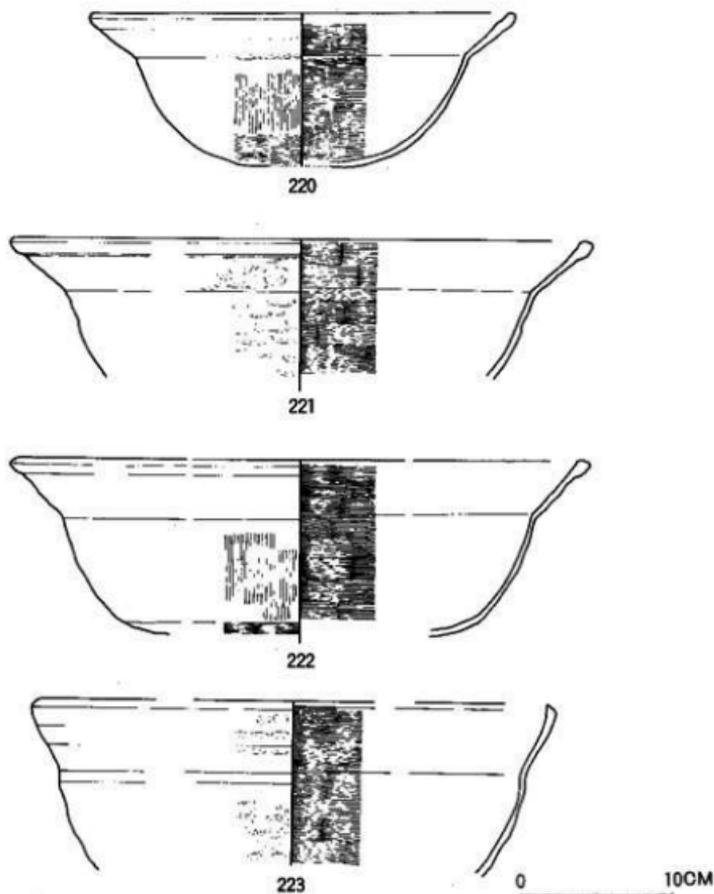


第56図 斜面包含層出土遺物 I (1/4)

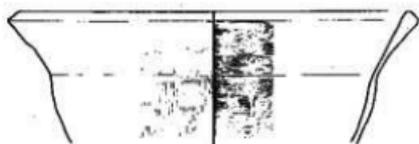
面には、指頭汗痕の残るものが大半である。口縁端部は9.7～11.6cmの範囲に分布し、器高も2.8～3.3cmの範囲内におさまる。

このほかに、高台を張り付けたものも2点出土しているが、胎土・焼成・色調ともに同様のものである。

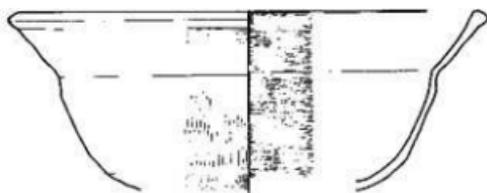
鍋 (220～228) 鍋は、口縁部が「く」の字状に大きく折り曲げられ外側に拡張されたものばかりである。これらは口縁端部のおさめ方で、2種類に分類できる。



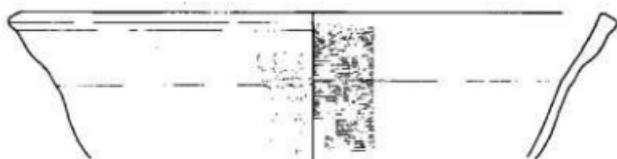
第57図 斜面包含層出土遺物 2 (1/4)



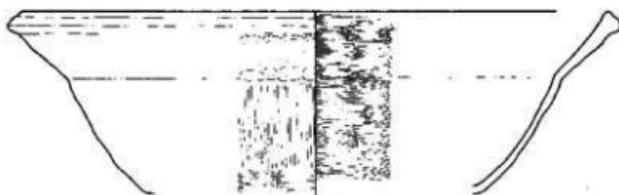
224



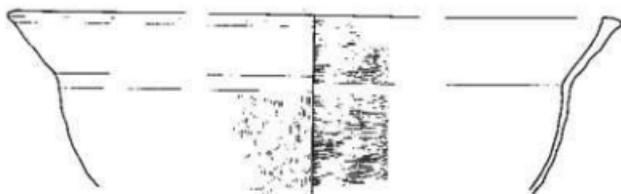
225



226



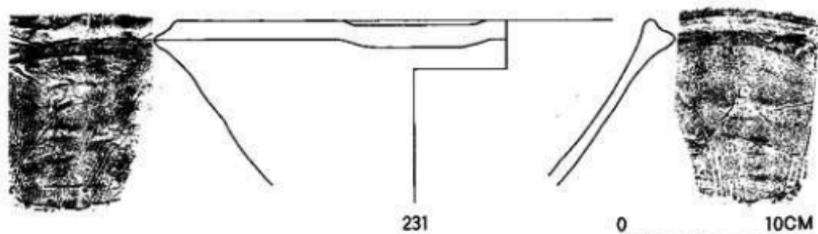
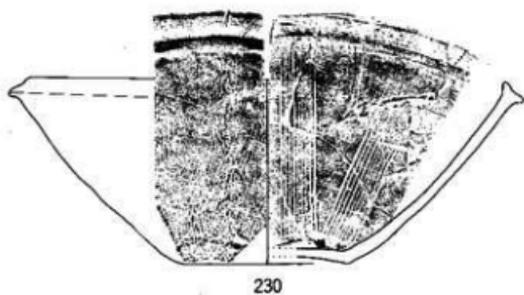
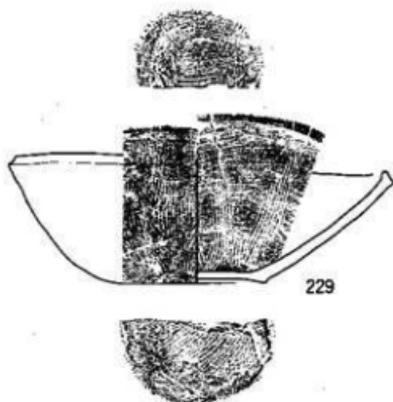
227



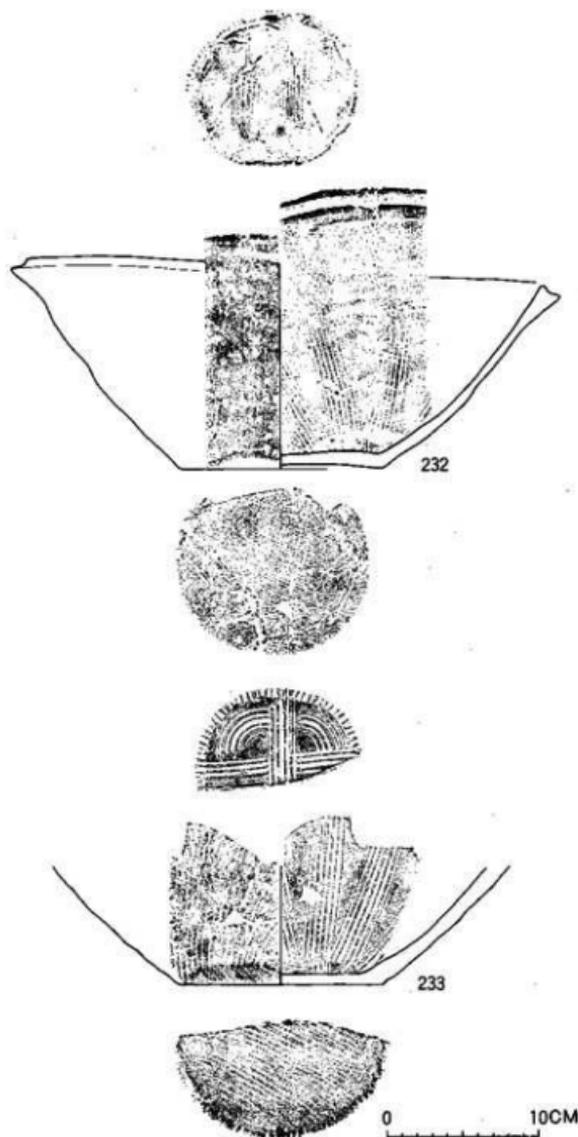
228

0 10CM

第58図 斜面包含層出土遺物 3 (1/4)



第59図 斜面包含層出土遺物 4 (1/4)

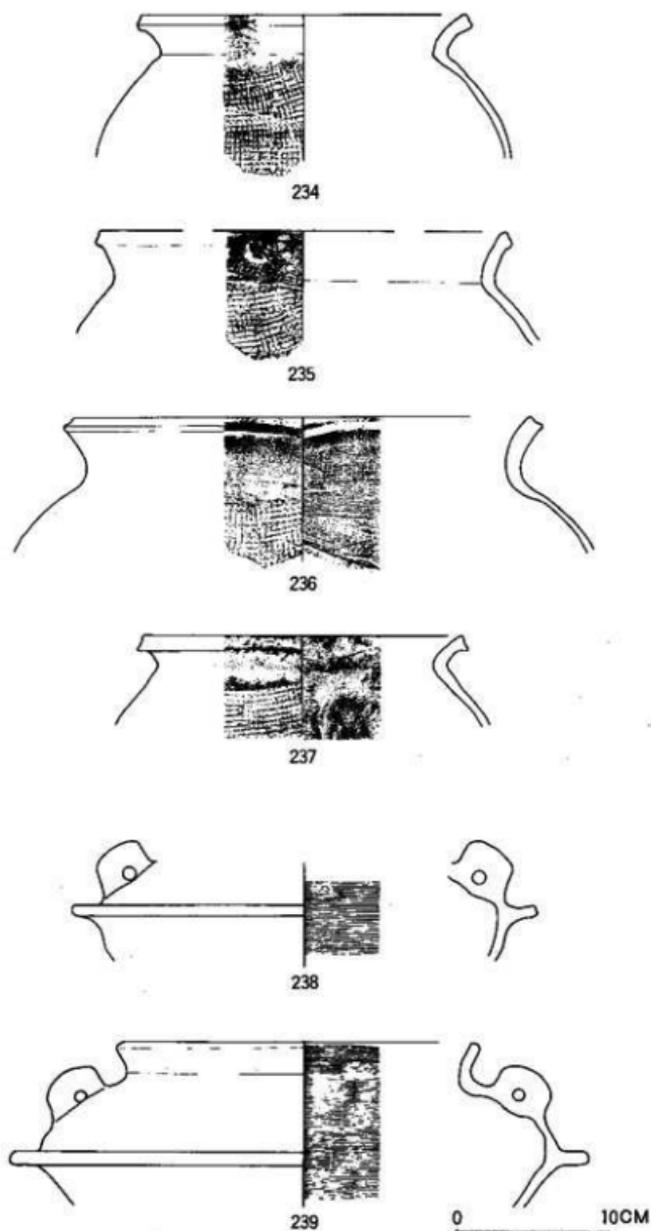


第60図 斜面包含層出土遺物 5 (1/4)

一つは、口縁端部を丸くおさめるか若しくは僅かに面を有するもの(220～223)であり、もう一つは、口縁端部が肥厚して面を持つもの(224～228)である。前者のものは、細かい砂粒を多く含む胎土を用いており、淡茶褐色から暗茶褐色を呈する。後者もほぼ同様であるが、一部瓦質のものが見られる(226・227)。外面は煤をよく受けており、破片は多いものの底部まで復元できるものはきわめて少ない。

調整は、どちらも外面の口縁部には指頭圧が残り、胴部は荒いタテ方向のハケ調整が施されている。内面は、全面に細かいヨコ方向のハケ目が残っている。大きさからみると、口径が30cm以下の小型のものと、37～38cmにも及ぶ大型のものに分れる。大型のものは口径に比して器高が低く、全体のかたちからみると非常に浅い印象を受けるものである。

摺り鉢(229～233) 摺り鉢は、土師質のもの



第61図 斜面包含層出土遺物6 (1/4)

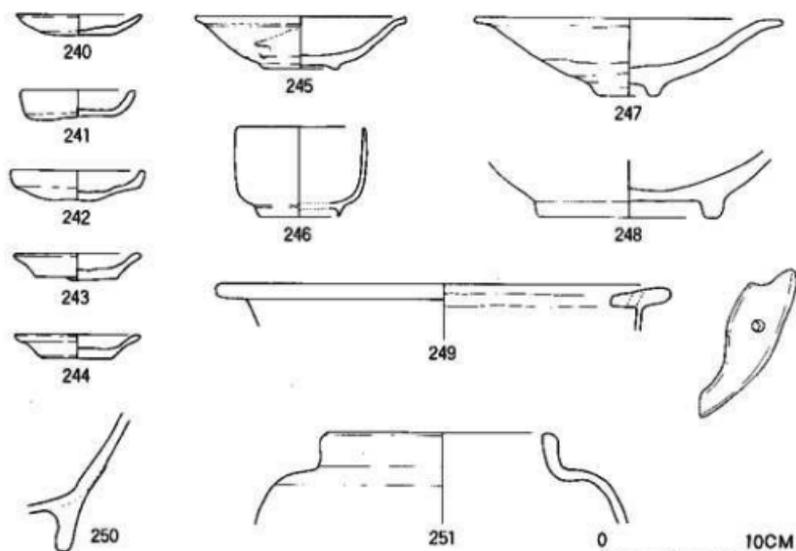
(229~231)と陶質のもの(232・233)とがある。口縁端部は上下に肥厚されており、片口の残っているものもあった。外面には、荒いタテ方向のハケ目が残リ、内面はナデで調整した後に、底部のところまでカキ目が施されている。

底部の調整は、外面こそ荒いハケ調整であるが、内面はハケのみのものが多いけれども、そのハケもモチーフ的に2条のみ(232)であったり、十字に描いたその間を丸く埋めるようなもの(233)などのバリエティが見られた。

甕(234~237) いずれも口縁部を「く」の字に曲げ、端部を上方に僅かに肥厚させたものである。口縁部は、内外面ともにヨコナデを受けているが、肩部外面には3mm角程度の格子叩きが明瞭に残されている。肩部内面は、未調整のものが多いが、細かいヨコ方向のハケ目を残すもの(236)も見られた。口径は、21.0~29.0cmとばらつきがある。これらは亀山焼と総称されるものだが、当該期の「亀山焼」の実態が明らかでないことから、ここでは保留したい。

このほかに、陶質の外耳鍋(238~239)が2点出土している。いずれも破片であり、内面にはヨコ方向の細かいハケが残リ、外面には格子叩きが見られる。

以上の土器は、一部炊雑物もあるが、建物の廃棄に伴うほぼ一括の土器群と考えられ、中世土器の変遷・当時の器種構成を知るうえで、興味深い資料といえる。時期については、碗がほぼ消滅し、皿が圧倒的多数を占めていること・鍋の底部に段が消えて球形に近づいているこ



第62図 斜面包含層出土遺物7 (1/4)

と・浅い鍋が現れて近世の焙炉に近づいていることなどから、およそ、15世紀の後半から16世紀代のものと考え、主としては、15世紀末の遺物であると考えられる。

なお、第62図は、造成土下の淡茶褐色土から出土した遺物である。底部を回転系切りした後丁寧にナデで整形している小皿（240）や胴部に対してほぼ垂直に付けられた内耳を持つ鍋・高台の底をヘラ切りした比較的古いタイプの陶磁器などを有し、江戸時代前半の17世紀代のものと思われる。

この調査区を始めとして、本谷C遺跡では、江戸時代前半代に営まれたと見られる塋墓・土城墓が検出されている。これらの墓はその多くが、さらに江戸時代後半の建物・開墾などにより削平されていることから、第62図の遺物が墓に関連する可能性は強いと考える。

なお、第1調査区の斜而下南側隅からも遺物の出土があった。これらは、造成土下の淡黒褐色土からの出土であるが、南隅付近は造成の際の擾乱が著しく、いずれも完形に近い状態ながら、一括性には乏しい。

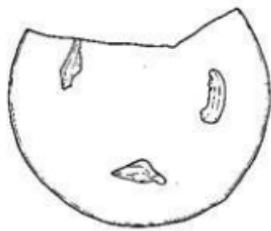
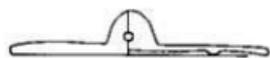
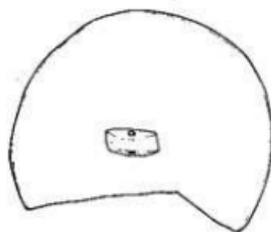
252は瓦質の蓋であり、中心をやや外れてつまみがついている。裏側には、3方向に台状の突起が貼り付けられている。

253は土師質の小皿で完形品である。口径7.2cm、器高1.2cmを測る。

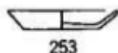
254～255は内耳を有する鍋である。254は約2分の1が残り、土師質ながら焼きは悪く瓦質に近い。「く」の字状に短く折れる口縁部から鈍角に内耳が付き、2個の穴が開けられている。胴部はほぼまっすぐに延び、底部との境界には鈍い段がつけられている。胴部外面には押圧ののち荒いハケが施され、底部にはヨコ方向のハケ目が残る。胴部内面は細かいヨコ方向のハケ目が残っていた。口径は39.3cmを測る。

255も内耳を持つ鍋であるが、瓦質で、破片の出土である。口縁部は254に比べ外への傾きが強く、ために、胴部と垂直に近くなっている。外面には荒いハケ目が、内面には細かいヨコ方向のハケ目が残っている。

これらの遺物は、先程の包含層出土の一括遺物よりも鍋の形態から後出のものといえ、16世紀前半のものと考えられる。



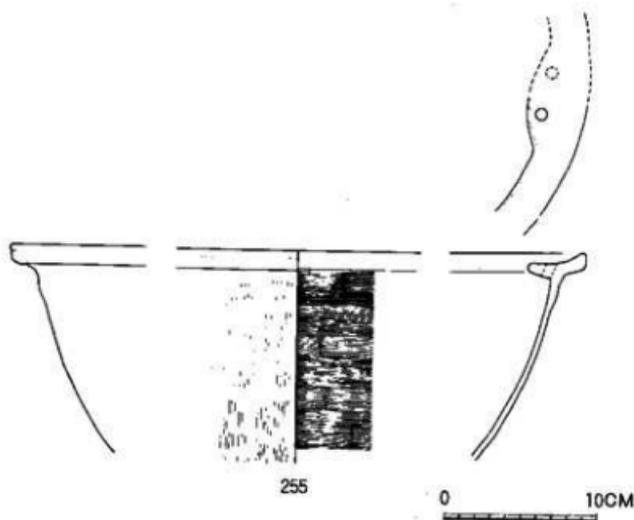
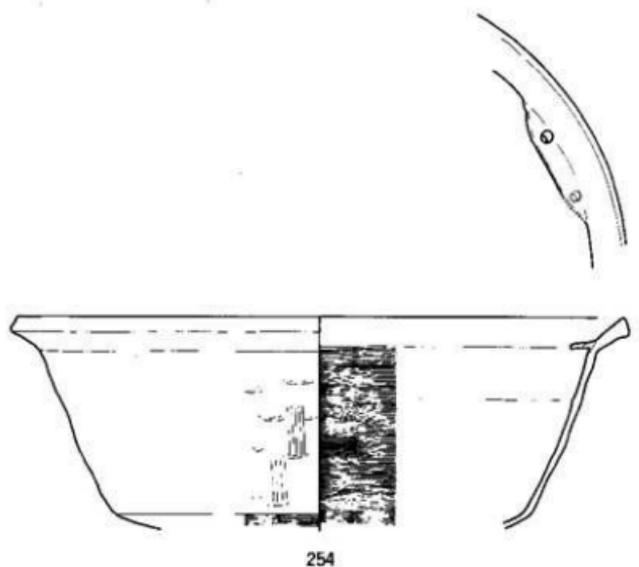
252



253

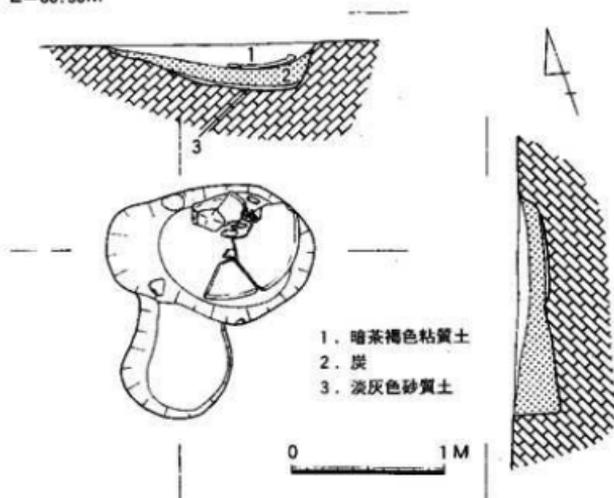
0 10CM

第63図 斜面包含層出土遺物8
(1/4)

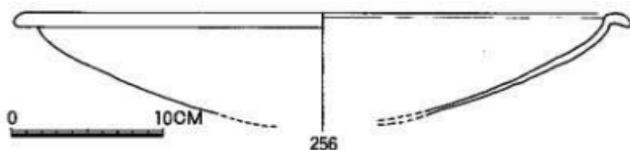


第64図 斜面包含層出土遺物9 (1/4)

L=60.30M



第65図 炉1 (1/40)



第66図 炉1出土遺物 (1/4)

(3) 第2調査区

本谷C遺跡の南側に位置する最も広い平坦面を有する調査区である。

調査の結果、調査区北側の傾斜下で排水溝と大量の近世陶磁器を確認したほかに、井戸・炉・貝塚などを検出した。これらのことから、この調査区に江戸期の屋敷があったと判断した。

このほかに、各所から近世墓（土塚墓・甕棺墓）を第1調査区と同様に検出することができたので、一括して報告する。

炉1（第65図）

第2調査区北側で、右組排水溝の東側で検出されたものである。地山を掘り込んで作っており、大量の木炭と粘土とが詰っていた。さらに、土師質の焙炉が3分の2を残した状態で木炭上から出土しており、江戸時代の屋敷に伴う炉であると判断した。

炉は、長径1.3m、短径0.9mの片側の大きいやや不規則な楕円形を呈する部分と、長径0.8m、短径0.7mの楕円形の部分が組み合ったかたちをしている。

焙炉の残っていたのは、前者の方にてあり、炉の壁面周囲と焙炉の西側に明瞭に残る焼土とから、土体的な炉の部分はこちら側であったと考えられる。これに組みあう側には、ほぼ全部に木炭が詰っており、炭の掻き出し側ではないかと考える。

炉の中に残っていた焙炉(256)は、口径70cm、器高8cmを測り、口径部は内側に肥厚されているものである。内外面ともに丁寧なナデ調整がおこなわれ、さらに外面はよく煤を受けていた。時期については、江戸時代の後半のものと考えられる。

炉2 (第67図)

炉1の北約2mのところで検出されたものである。地山を掘り込んで、同じく大量の木炭と焼土が詰っていた。

炉の規模は、長径2m、短径0.9mの楕円形であるが、南側が幅広くふくれた格好になっている。炉の壁面には、焼土が入り、炉の大半は木炭が詰っているが、一部木炭の層の中に焼土も見られた。焼土の状況から焼成口は北側と見られる。

なお、炉内及び周辺部から遺物の出土はなかった。

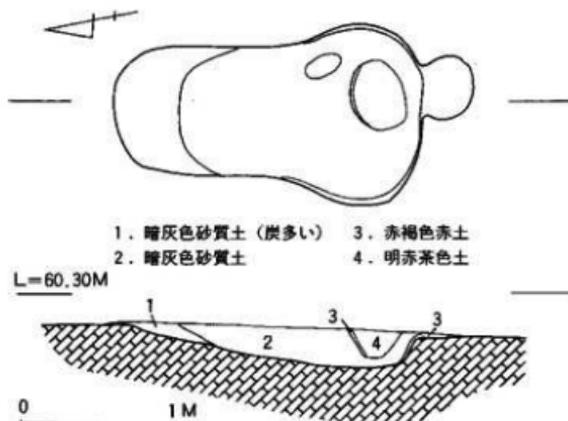
炉3・4・5・6 (第68図)

第2調査区の北側から検出したもので、地山を掘り込んだ、残存高の非常に浅い窪み状の遺構である。その中に焼土のはいったものがあることから、一括して炉群として取り扱った。

炉群は、西から順に炉3から6としたが、このうち炉4にのみ壁面に焼土が巡っていた。

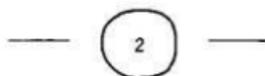
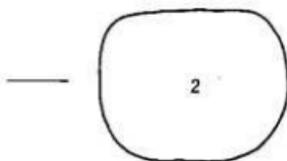
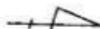
炉3は100×124cmの隅丸長方形を呈し、淡灰色土で埋まっていた。

炉4は、長径114cm、短径80cmを測り、南側にすばまったかたちの不整形な楕円形である。壁面には、焼土が巡り、さらに南側のすばまったところには集中して焼土が見られた。



第67図 炉2 (1/40)

L=60.30M (以下同じ)



0 5 CM

257

1. 赤茶色焼土
2. 淡灰色土
3. 淡灰色土 (やや炭含む)

0 1 M

第68図 炉3・4・5・6 (1/40)

第69図 炉5出土遺物 (1/4)

炉5は、炉4の東側に接しているものであり、50×75cmの隅丸から楕円に近い平面形を示している。炉の中には、淡灰色土がはいり、その土の中から完形の小瓶(257)が出土した。

この瓶は、器高6.4cm、最大径4.1cmの小さなものである。高台を除いて白色の薬がかけられており、さらに青色の花びらのモチーフの絵が描かれている。

炉6は、炉群の最も東に位置し、長径49cm、短径46cmの円に近い楕円形を呈する。中には、淡灰色土がはいっていた。

これらの炉は、その中心となる炉4とそれに伴う灰の捨て場の遺構が、後世の削平により、底部のみ残されていたものと判断される。時期については、炉5出土の小瓶しかないため、限定はできないが、周囲の状況から、江戸時代後半のものとする。

以上が本谷C遺跡で検出された炉群であるが、厳密に炉としての機能を確認できるのは、炉1・2・4の焼土が残っていたものについてである。

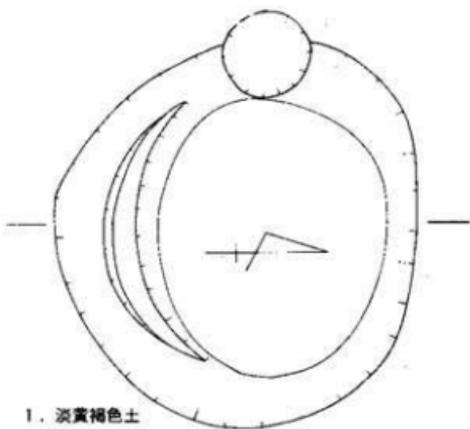
これらの炉は、炉1に残る焙炉により、日常の炊事に使われたことが十分に考えられ、従って、この建物の北東端を中心として厨房など火を使う施設が営まれていたと考える。

井戸 1

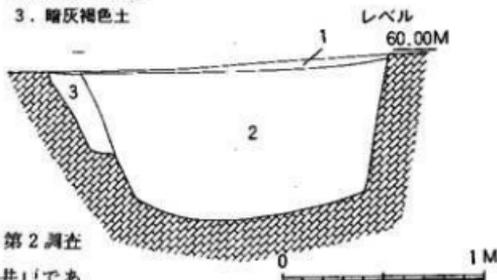
第2調査区のはぼ中央、塼棺3を切った形で検出した土城である。検出面は径約180cm不整円形で底部は120×115cmのやや歪んだ卵形を呈し、深さ80cmを測る。南側に最大幅15cmの三ヶ月状の段をもつ。

この地点の地山は風化しかかった岩盤であるが、丁寧に掘られていた。埋土は南側の段が異なるが、土壌内は地山土でいっきに埋められていた。

形状から溜め井戸に使用したと考えられるが、出土遺物はなく、時代は決めたいが他の遺構等との関連から、江戸時代末と考える。



1. 淡黄褐色土
2. 明赤黄褐色土
3. 暗灰褐色土

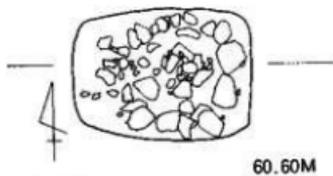


井戸 2

第2調査区の西端部、第1調査区と第2調査区を隔てる畦の横で検出した石組の井戸である。この井戸は地表に石の一部が露呈しており、地区の古老も井戸として記憶していたものである。調査時にも御幣が数本立てられており、井戸破壊後の「水神の祭」の一片をのぞかせている。

井戸の掘り方の検出平面形は70×90cmの長方形を呈し深さ45cmを測る。この掘り形の中に平石を一段ひきつめ基底部を構成しその上に石を積み上げている。最下段は胴張の方形であるが上にいくほど円形を呈す。積み石に規則性はなく、掘り形の壁を使い裏込め石を用いず積み上げていた。出土遺物は、平瓦片が一点出土しているが、近代のものである。

第70図 井戸 1 (1/30)

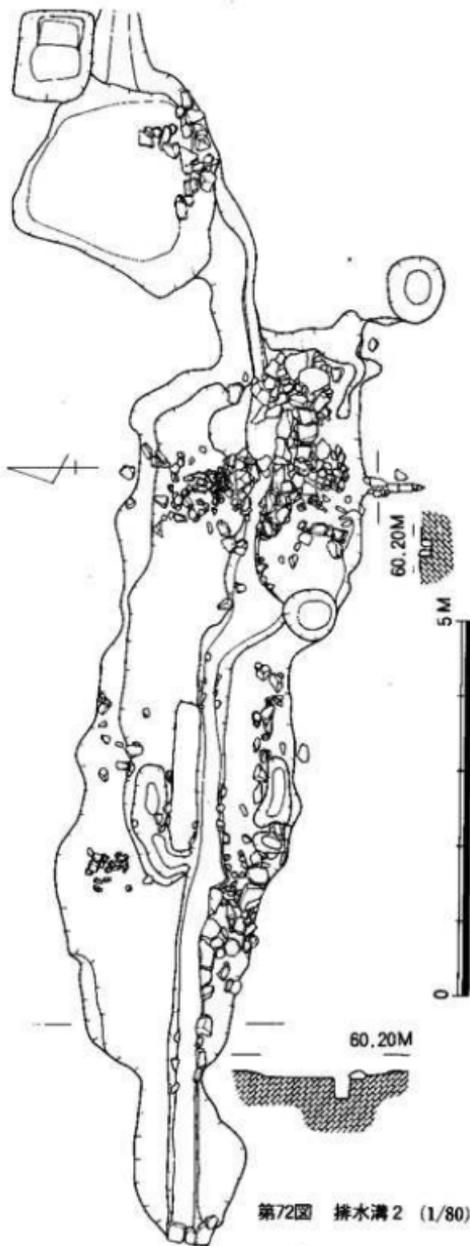


第71図 井戸 2 (1/30)

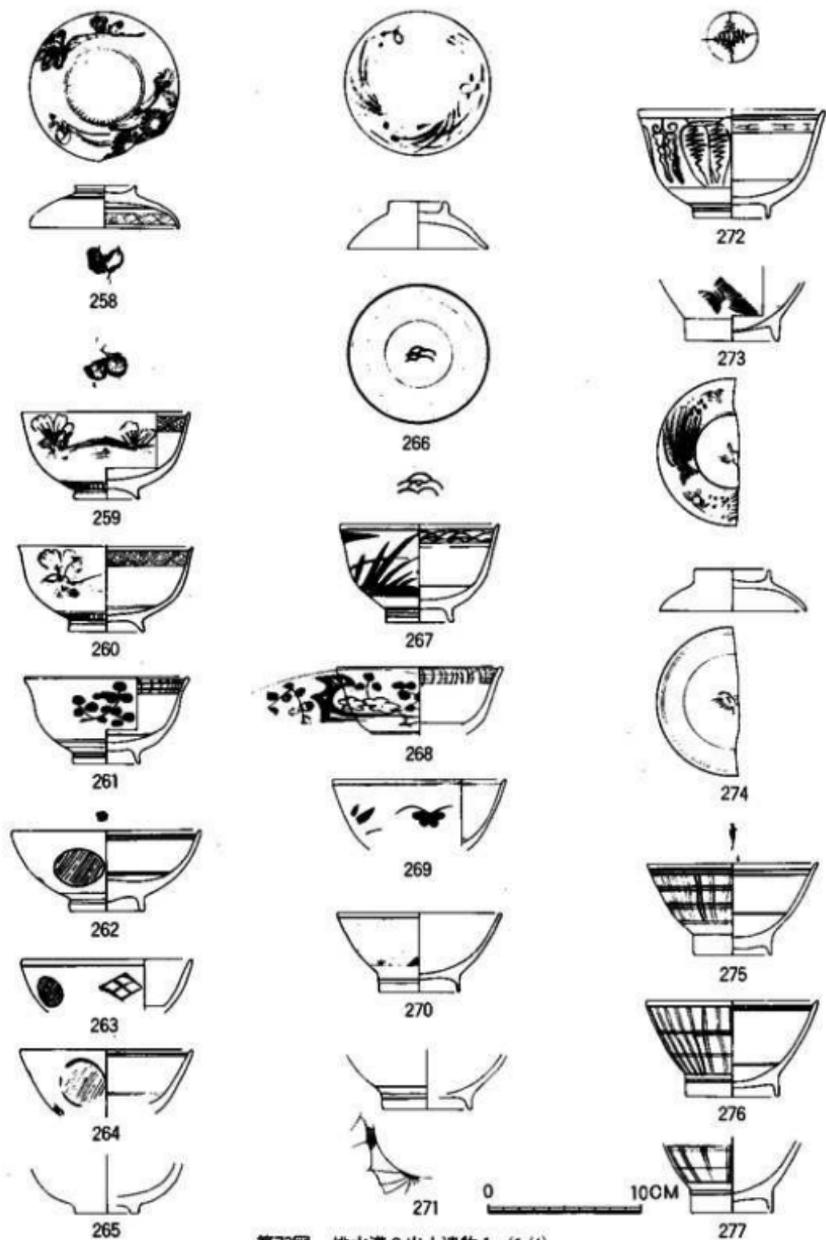
排水溝 2

第2調査区北西隅で検出した排水溝状の遺物である。基本的には北東側(図中で左上)の上墳、部分中央やや東側(同方位記号の横)の石敷き部分及びそれを結ぶ石囲いの溝から構成されており、土墳及び南から石敷部分へ北流する丸瓦を裏返した溝の2方向から流入する水が西へ一本の溝となって流れると考えられる。東へは、上墳から50cm付近で溝がとぎれているが、崖下によって排水溝3へと流れていた可能性もある。

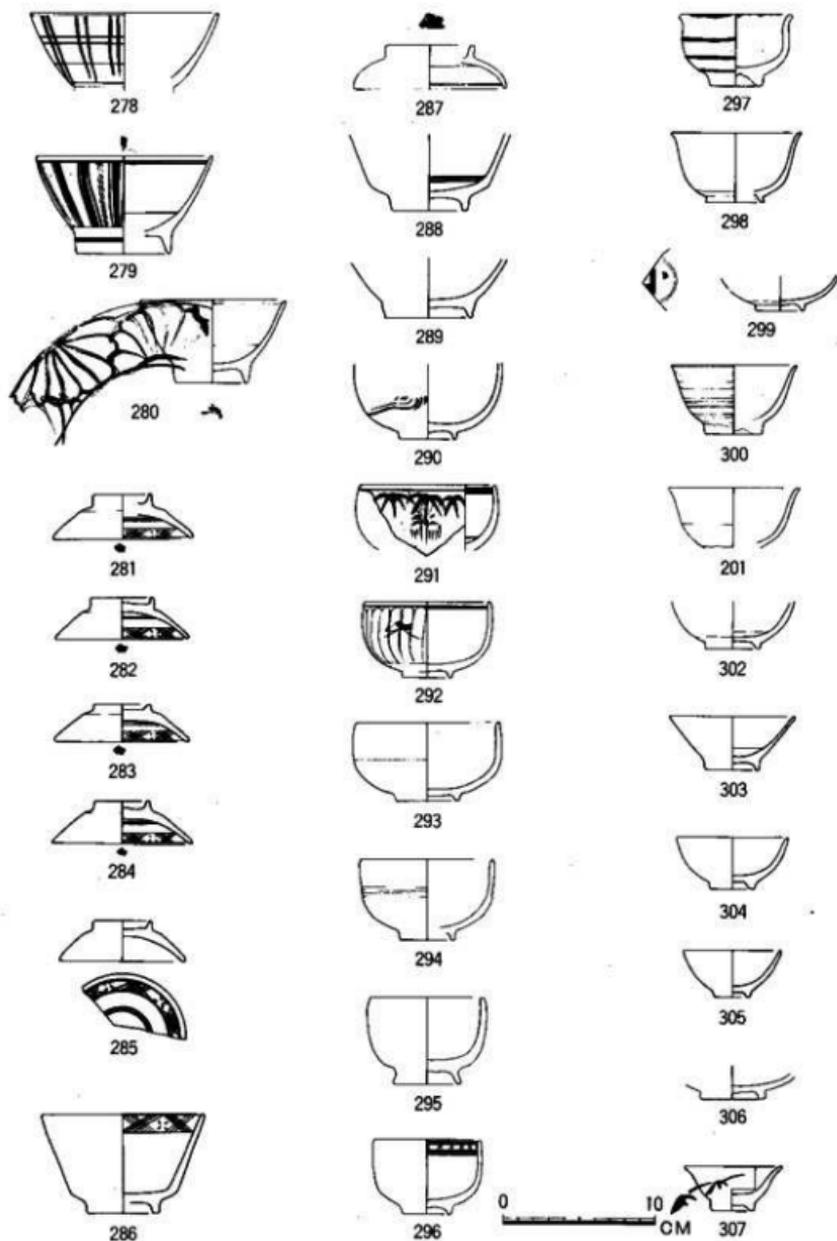
まず上墳部分は、一辺約80cmの歪んだ方形を呈し、深さ50cmを測る。土墳内は炭灰で埋まっており、この炭灰の中から多数の遺物の出土を見た。出土遺物は上層出土と下層出土で接合関係にあるものも多く、一気に炭灰といっしょに土墳内に投棄されたと考えられる。また一部の土器は周辺の溝及び石敷出土の土器と接合関係にあり、この土墳がこの排水施設の破棄に伴って埋設されたと考えられる。次に石敷部分だが、ある程度一面に敷き詰められていたと考えられるが、特に第73図中央やや上、東西に流れる溝と南からの丸瓦による溝との合流地点は保存状態も良く、30cm四方程度の平石を敷き詰め、どの石も上面が磨滅してつるつるの状態であった。南からの丸瓦による溝は瓦3枚分を残すのみで南側は検



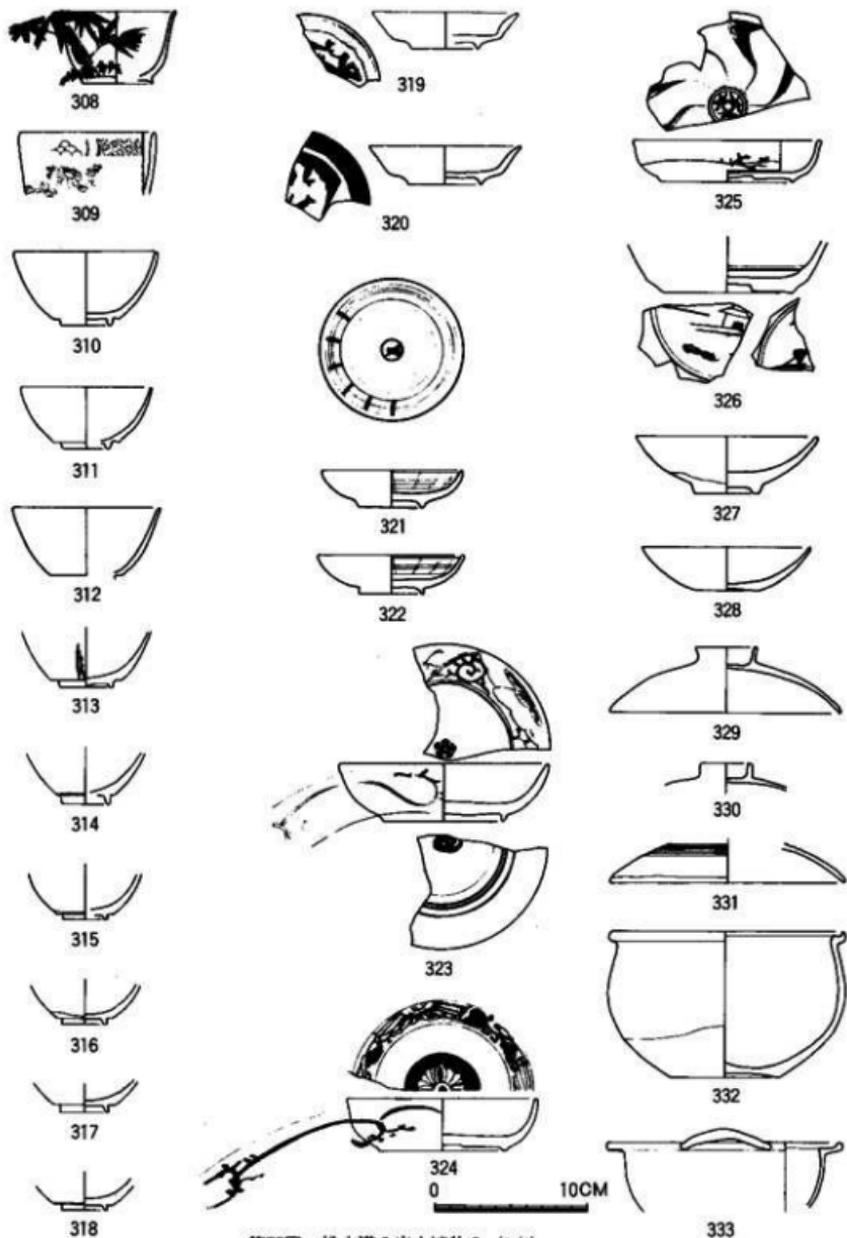
第72図 排水溝 2 (1/80)



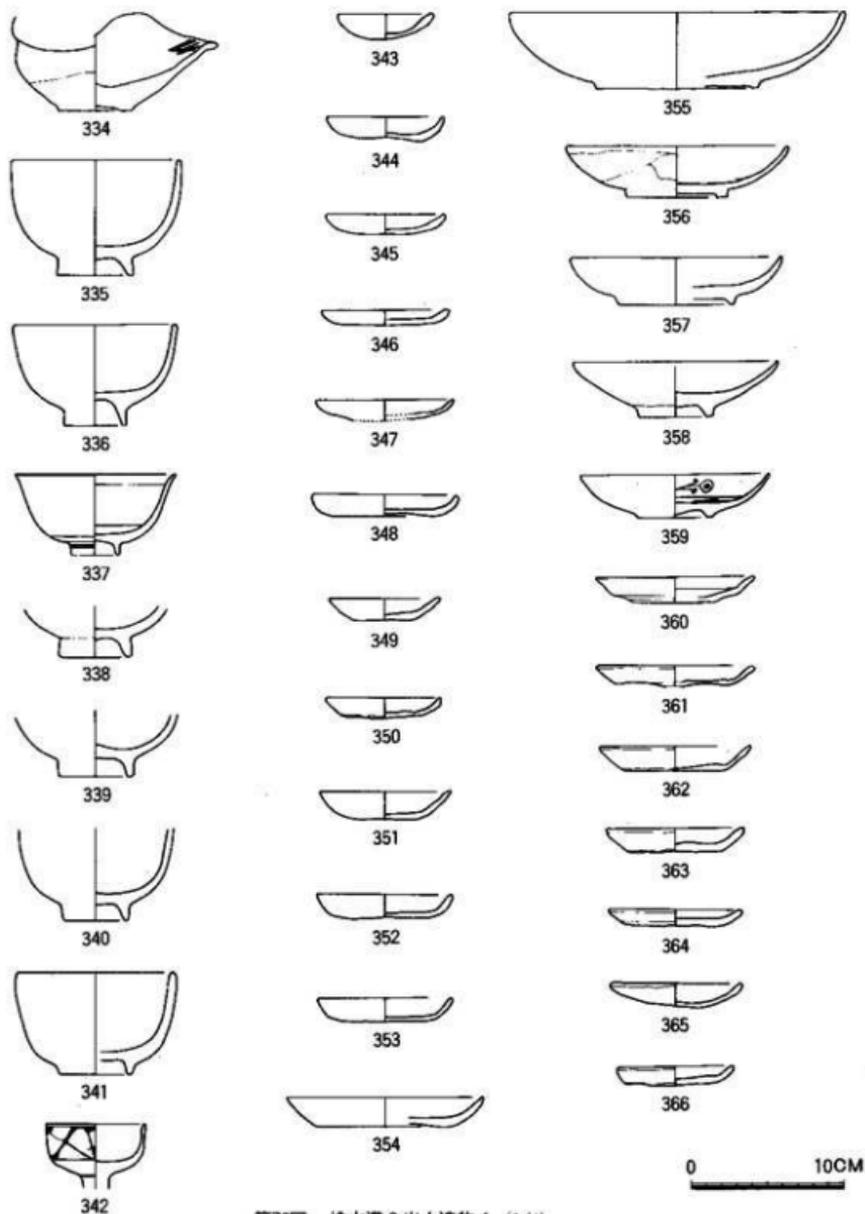
第73圖 排水溝2出土遺物1 (1/4)



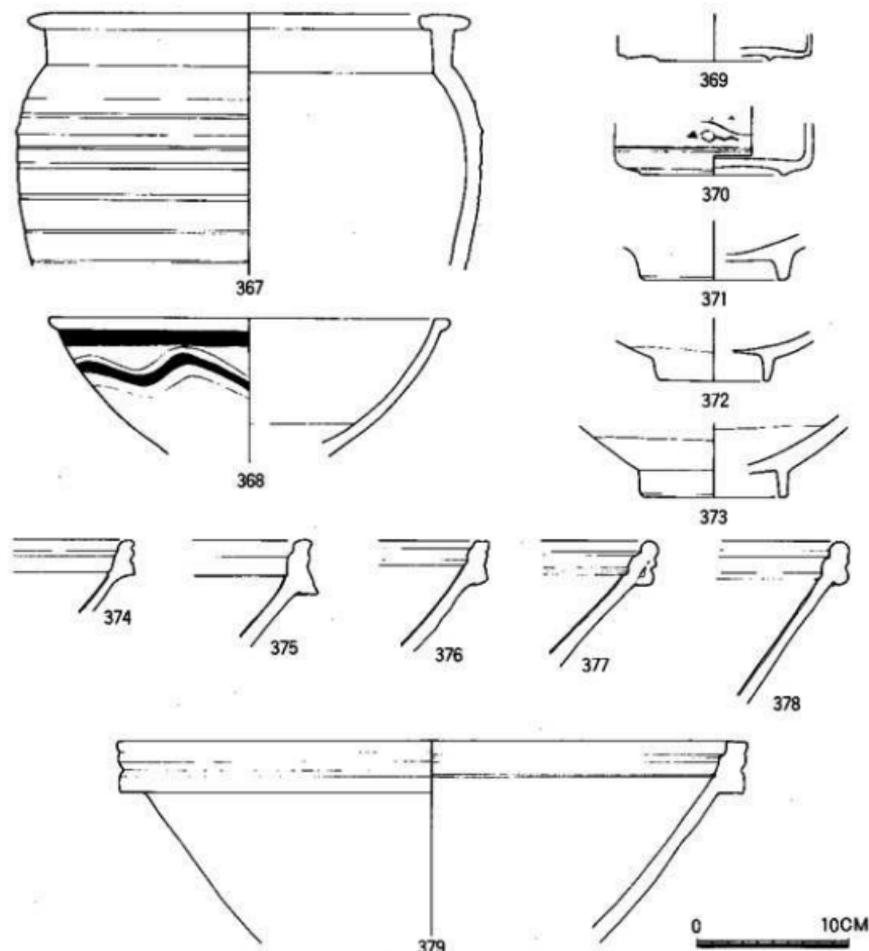
第74図 排水溝2出土遺物2 (1/4)



第75図 排水溝2出土遺物3 (1/4)



第76図 排水溝2 出土遺物4 (1/4)



第77図 排水溝2出土遺物5 (1/4)

出できなかったが玉縁の丸瓦を裏返して溝としていた。

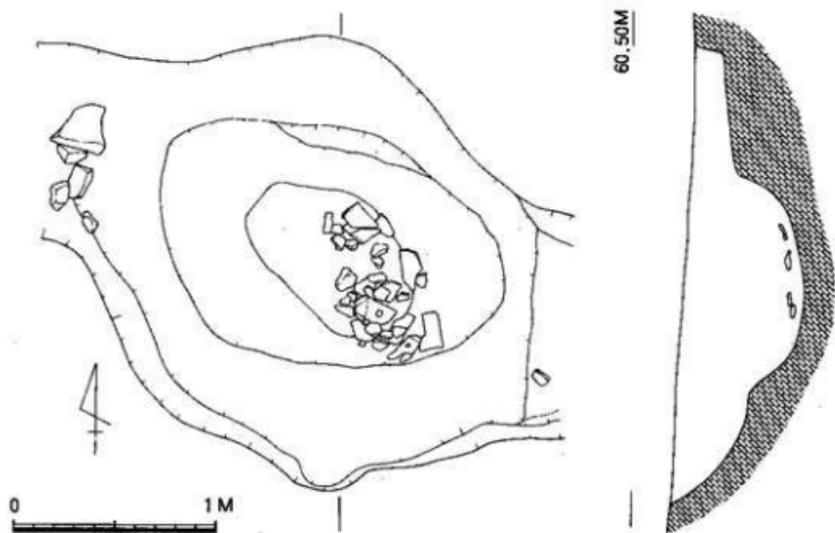
主要排水溝については石の残りがあまり良くないが、基本的には幅約20cmの溝の両側に厚さ5cm程度の平石を立てた状態と考えられる。前述した様に流路は東から西へ流れていたと考えられる。

出土遺物は多量の陶磁器及び土師質土器である。多量の炭灰といっしょに投棄されていたが、二次的な火を受けた土器は一点もなく、火事等に伴って投棄されたとは考えにくい。

排水溝 3

第2調査区北東側に崖に沿った形で検出した長さ13mにわたる排水溝である。深さ10cmと浅く、幅も30~80cmと広い所もあれば狭い所もある。ただ浅く掘りくぼめただけという感じのする溝であり、雨水やすぐ北側の崖から染み出した水の排水のためと考えられる。第79図はこの排水溝2の東端部分の土壌状の留りである。第2調査区の東端部分に位置し、すぐ東側には昔の山道があり地表面は谷へ向けて急傾斜面をなしている。検出平面形は一辺約200cmの歪んだ方形を呈し、約35cmの深さで段をもち、長径170cm短径120cmの楕円形にさらに一段深く、底部は検出面から65cmの深さを測る。西側の水の流入部分には5ヶの石がおかれ、西側からの水の流れも一度この石で塞ぎ止め、この土壌状部分でたまって東側へ水がこして出る構造になっている。

出土遺物は埋土中からはまったく検出しておらず、土壌中央部分の底部ではほぼ完形に近い丸瓦4点、平瓦3点、および陶磁器の小片が少量出土した。陶磁器はいずれも小破片であり肥前系の陶器（染付の碗、皿等）や備前焼の摺り鉢などであるが、井戸1同様に地山土で埋められていた。

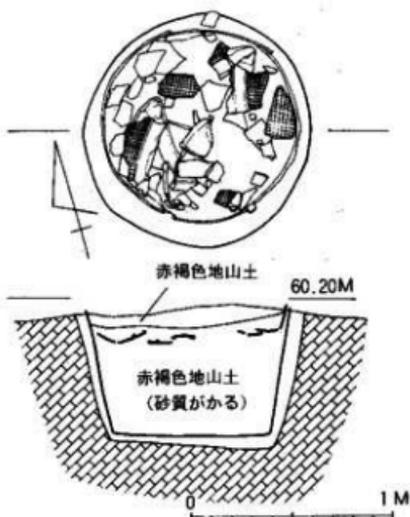


第78図 排水溝 3 (1/30)

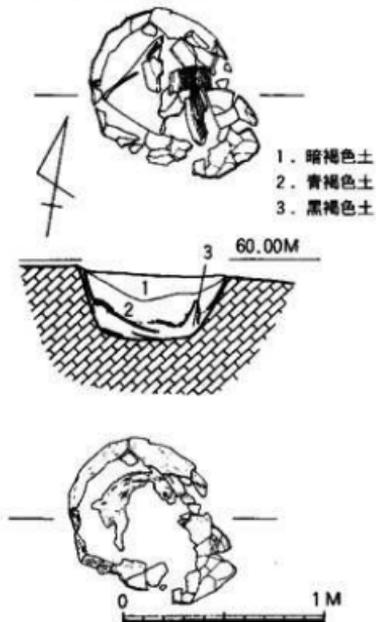
壘棺 1

第2調査区南東部分、土坑1の北側で検出した。径約110cm、深さ68cmの円形の掘り形の中央部分に、壘が底部をやや浮かした状態で埋設されていた。壘内はやや砂質の地山土が約45cm埋まっており、その上に壘上部がほぼ一時期に落ち込み、そして地山土で埋まっていた。その後、削平を受けている。壘は前述した様に胴部中央部分は削平のため欠損するので高さは推定であるが、90cmを測り、口縁部径63cm、最大径66cm、底部径39cmを8基の壘の中でも最大級であり、少し人がらな大人でもゆっくりと中で座ることができる。直径38cmの円形の粘土板を基準にして製作したと思われ、明瞭に痕跡を残す。底部から約20cmは逆八の字形に少し広がりそこからほぼ垂直に立ち上がり、口縁下約15cmぐらいから少し細くなる。口縁、底径、最大径があまりかわらない形態をなす。口縁部は肥厚ぎみに「く」の字型に外返し口縁の下5cmに断面台形の張付凸帯を一条めぐらす。外面は叩き、内面及び底部外面は荒いハケ目で仕上げている。底部外面外周部分には38ヶ所に太さ7～8mmで長さ24～30mmにわたって右捻りの縄の痕跡がついている。焼成はあまり良くなく茶褐色を呈す。底部中央よりやや外側に一辺5cmの方形の穿孔が行なわれていた。

出土遺物は落ち込んだ口縁部にまじって瓦質の大壘の胴部片を削って丸めた投弾が一点出土している。この投弾は、直径約30mmのはほぼ円形で、厚さ8mmと小形である。



第79図 壘棺1検出状況 (1/30)



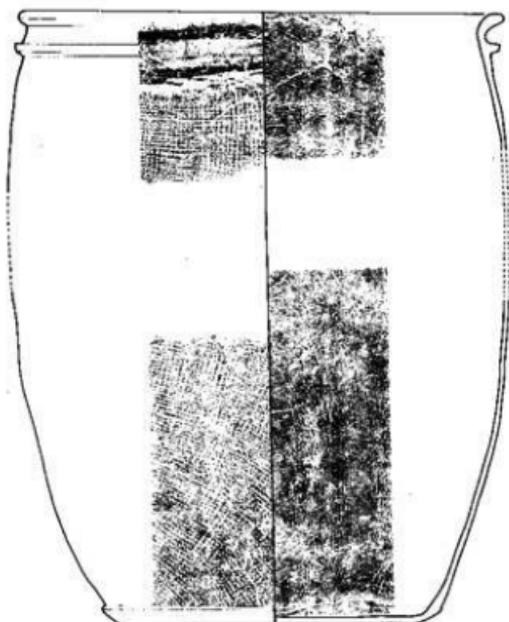
第80図 壘棺2検出状況 (1/30)

甕棺 2

第2調査区北東端、排水溝3の土壌状部分の南側で検出した。検出面で直径70cmの円形を呈する掘り形で甕の大きさと掘り形がほぼ同じである。

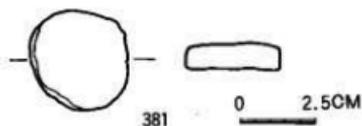
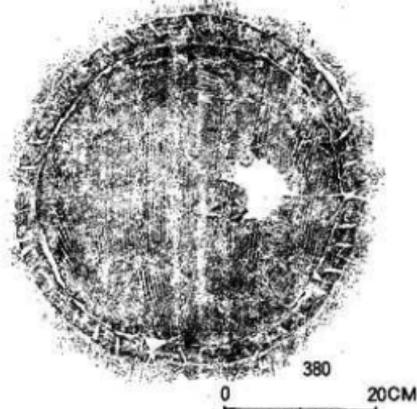
甕棺1と同様に口縁部が甕内部に落ち込んでいたが、早い時期に落ち込んだと思われ、底部に近い位置で検出した。甕棺内の上部は地山土で、口縁部分が検出された面より下部は黒褐色土で埋まっていた。底部は焼成が悪いのか、危弱で取り上げられない状態であったが、口縁部は瓦質に良く焼けていた。外面は叩き調整、内面は荒い縦方向のハケ目で仕上げている。口縁部は肥厚し、外反した形で丸くおさめ口縁直下に断面三角形の凸帯が巡る。

副葬品等遺物は出土しなかった。



甕棺 3

第2調査区中央部井戸1の南側で井戸1と切り合って検出した。検出面で直径90cmの円形の掘り形の中に北側に寄せて埋められていた。上部片は甕内部に底部より約15~30cmぐらい浮いた位置に落ち込んでいた。口縁部は外側に約7cm折り返して玉縁をなしている。外面は口縁



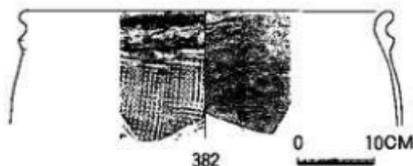
第82図 甕棺1出土遺物2 (1/2)

第81図 甕棺1出土遺物 (1/8)

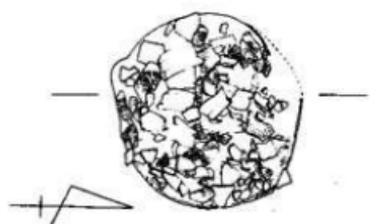
部直下まで叩き調整を、内面は荒いハケ調整を行っている。底部は直径約36cmの不整形円形の粘土板をもとに形作っており、甕棺1と同様に底部外周部に太さ8mm長さ3～5cmで46ヶ所に右捻りの縄の痕跡が残る。

甕内からは、硯片1点、キセル3点、投

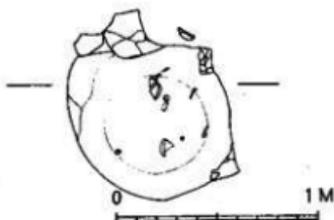
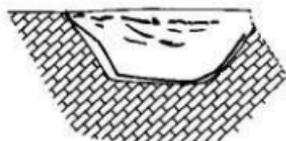
弾5点、小皿4点のほか寛永通宝3点が出上している。硯は黒色の粘板岩質の石材で現在の硯と同じである。出上片は硯の右上隅の部分のみであるが海から陸の部分にかけて墨が付着していた。キセルはいずれも潰れて原形をとどめていないが雁首と思われる。投弾は瓦製3点、石製2点である。瓦製の投弾はいずれも丁寧に丸く形作っており368・372の2点は周りを磨いている。石製の2点は自然の平石の周辺を削って丸く形作っている。寛永通宝3点は底部より僅かに浮いた状態で検出したが、いずれもやっとな文字が判読できる状態である。



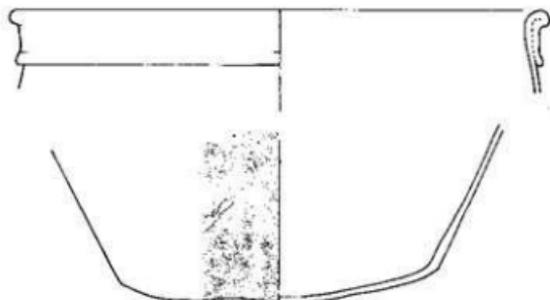
第83図 甕棺2出土遺物 (1/8)



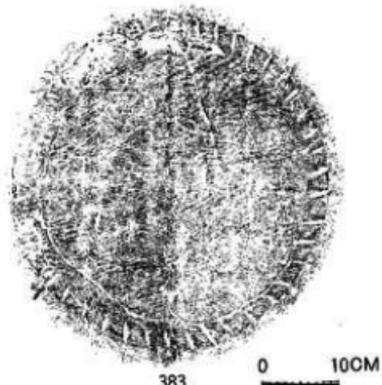
60.00M



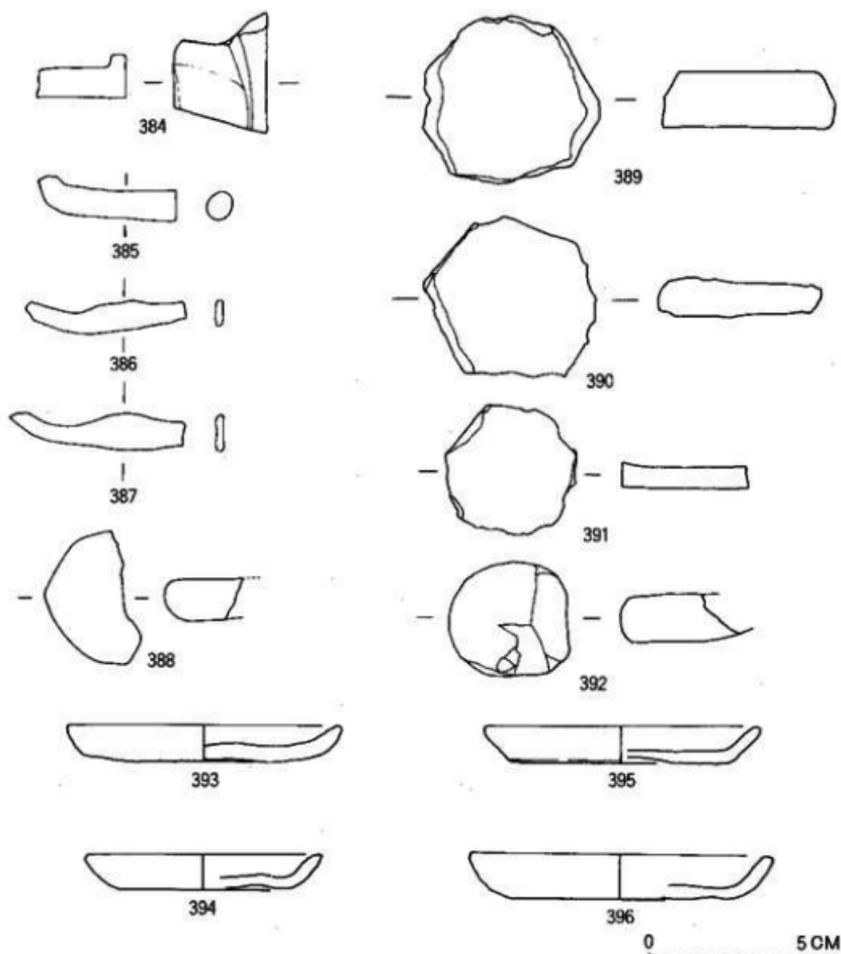
第84図 甕棺3検出状況 (1/30)



383



第85図 甕棺3出土遺物1 (1/8)



第86図 甕棺3出土遺物2 (1/2)

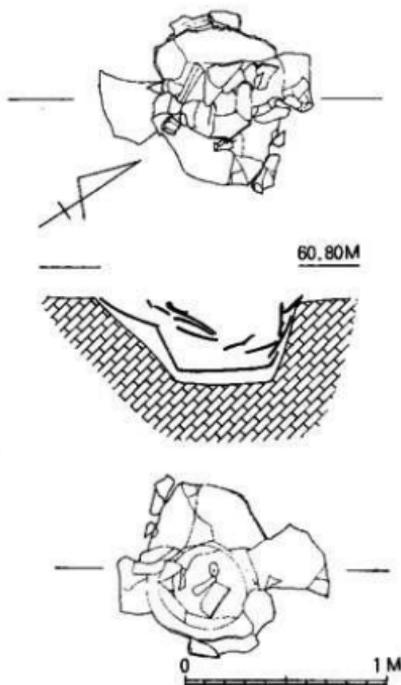
出土遺物はどれも、口縁部破片より下位で検出しており、副葬品として、棺内に入れられていたことがうかがわれる。

甕棺4

第1調査区のはほぼ中央部で検出した。直径約100cmの円形の掘り形に北壁に沿って少し底部を浮かした状態で埋設していた。他の甕棺同様に、甕上部が甕内部に落ち込んでいた。

甕は他の甕棺に比べ非常に焼成が良く、青灰色を呈す。口縁部は折り返しにより肥厚させ、下方に引き出している。そして口縁の下方約4cmのところ、折り返しの先端を下方に引き出している。外面は叩き調整の上を細いハケ目で消しているがほぼ全面で叩きの痕跡がみられる。内面は広いハケ目調整を施す。

甕棺1・2と同様に直径約27cmの粘土門板をもとに形作っており、底部外面外周にそって40ヶ所の縄の痕跡が残る。縄は太さ7mmで長さ約3cmにわたって残っている。



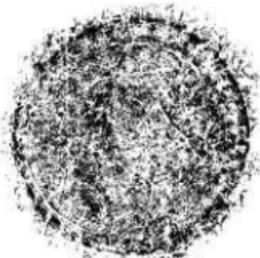
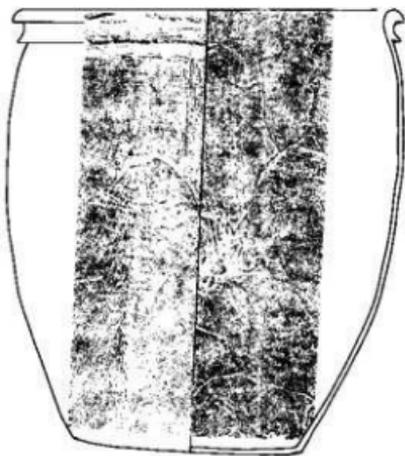
第87回 甕棺4 検出状況 (1/30)



397

0 2.5CM

第88回 甕棺4 出土遺物1 (1/2)



398

0 20CM

第89回 甕棺4 出土遺物2 (1/8)

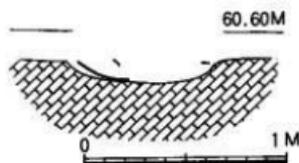
甕の底部から水滴1点と平瓦片1点及び底部にサビのため付着した状態で不明鉄器3点が出土した。水滴は白磁で上面は36×50cmの長円形を少し高さ22mmを計り、上半部は細かいしのごに青灰須で列点状に模様を入れており、少し青みがあった白磁釉がかけられている。産地については不明である。平瓦片が、水滴と一緒に出土しているが1/8程度の小破片で他に瓦は出土しておらず用途不明である。

甕棺 5

甕棺 4 の南東 2 m の地点で出土した。削平のためほとんど残存していなかったが、直径 70 cm 強、深さ 30 cm のくぼみ状の掘り形に甕底部と摺り鉢片が散在していた。他の甕棺と様相が異なり、甕棺と推定はできないがここでは甕棺として扱う。

前述した様に破片が散在していたため、埋設時の原状復元は不可能であり、摺り鉢の用途も不明である。甕は底部のみで胴部及び口縁部片は出土していない。底部の整形技法は、他の甕と同様に外面は叩き調整、内面は荒いハケ目調整をしており右撚りの縄痕が残る。

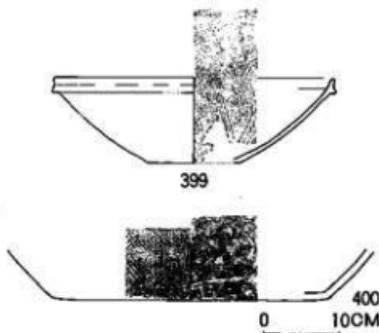
すり鉢は瓦質であまり焼成が良くなく、第 2 調査区斜面堆積層出土遺物に同様のおろし目の摺り鉢があるが、放射状におろし目を入れるのではなく、円弧を描く様に少し回っておろし目を入れている。



第90図 甕棺 5 検出状況 (1/30)

甕棺 6

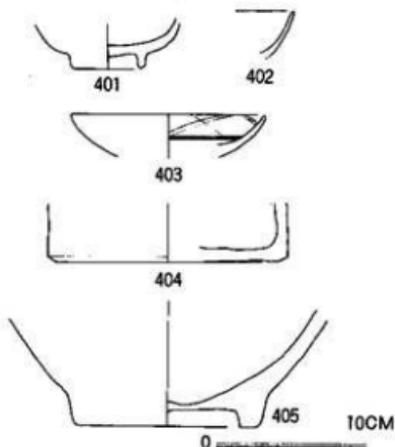
第 2 調査区の北端部で検出した。耕作土除去時に口縁部が検出され、唯一ほぼ完全な形で検出した甕棺である。直径 85 cm と甕の最大径と同じ大きさの掘り形の中央に据えられていた。甕棺内は地山土で埋まっており、底部より 30 cm 浮いた位置で唐津焼のこね鉢の底部と平瓦片が出土したほか、甕内上部において肥前系陶器・備前焼が出土している。甕は他の甕と少し様相が異なる。約 30 cm の粘土板を基に形作っている。



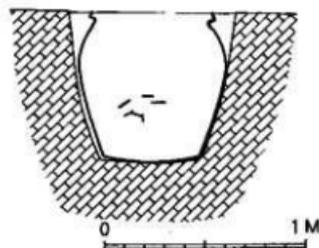
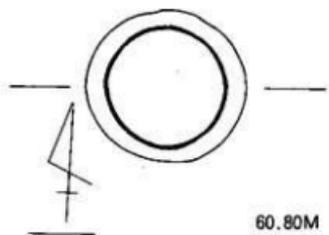
第91図 甕棺 5 出土遺物 (1/8)

やや外反する口縁部は下方に引き出される。外面は叩きの上を荒くハケ調整をし、さらに無でて消す。内面は荒くハケ調整を行うが胴部には指頭圧痕が明瞭に残る。瓦質で焼成も良好である。底部中央に5cmの方形の穿穴を持つ。401は肥前系陶器の椀底部である。焼きが少し悪く、青灰色のくすんだ色調を呈す。404はさや状の形態をした備前焼である。405は、肥前系のこねばちの底部である。鉄釉の上にハケで白色釉を波状に描く。

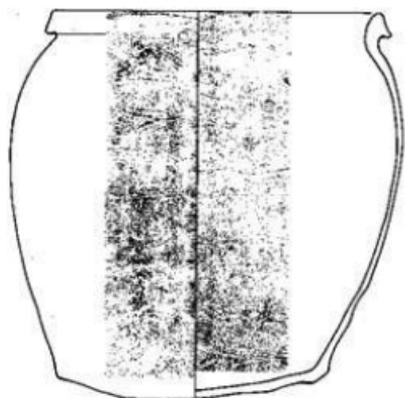
いずれの出土遺物も、破片の状態で出土して復元も出来ない。出土位置も壘上半部より出土副葬品とは考えにくい。



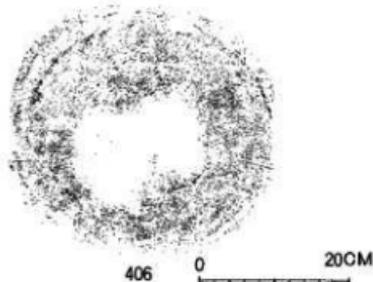
第93図 壘棺6出土遺物1 (1/4)

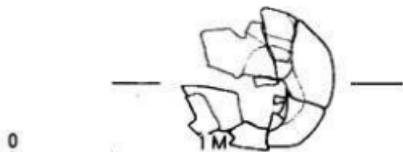
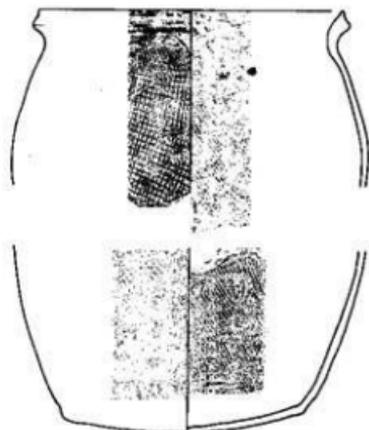
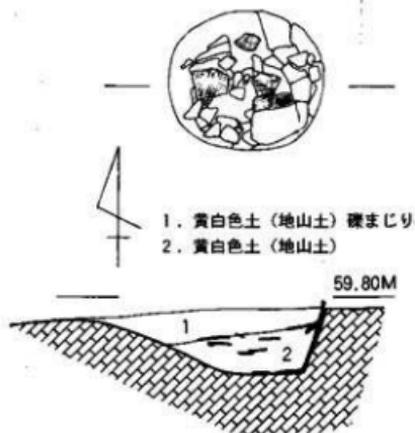


第92図 壘棺6検出状況 (1/30)

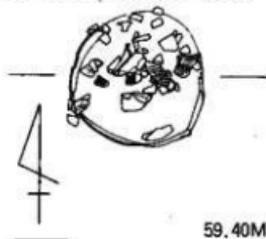


第94図 壘棺6出土遺物2 (1/8)

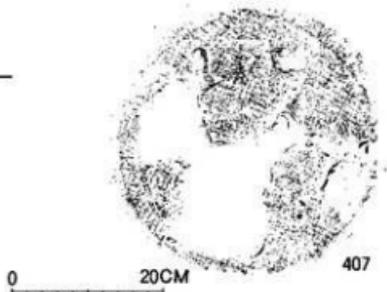




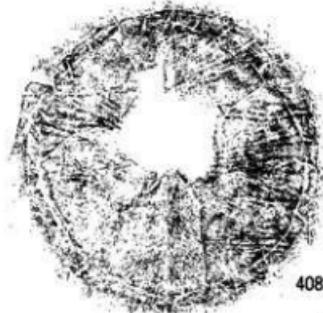
第95図 甕棺7 検出状況 (1/30)



第97図 甕棺8 検出状況 (1/30)



第96図 甕棺7 出土遺物 (1/8)



第98図 甕棺8 出土遺物 (1/8)

甕棺 7

第2調査区南側中央部で検出した。掘り形の東側に寄せて埋設しており、甕上部片は内部に落ち込んだ状態で出土した。甕内部は地山土で埋まっており、甕上部出土位置より上は礫まじりの地山土で埋まっていた

甕は他の甕と同様に直径約30cmの粘土板を基にやや厚みをもたせて形作っている。口縁部は肥厚して「く」の字形に外返する。外面は口縁屈曲部まで叩き調整をし、内面は荒い叶け調整を行う。底部外面は胴部と同様に叩きを行っている。

副装品等遺物は出土しなかった。

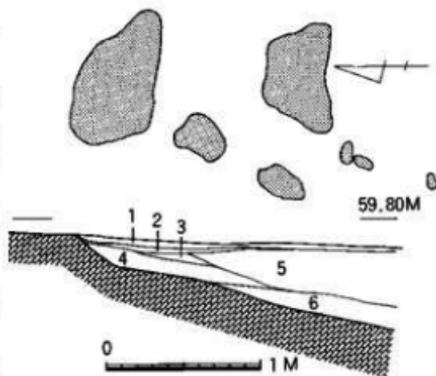
甕棺 8

甕棺7の東7mの地点で検出した。他の甕棺同様に削平のため胴上部の破片はほとんど検出できず、削平をまぬがれた底部と削平前に甕内部に落ち込んだ胴部片の一部を検出したのみである。瓦質で焼成もひじょうに良い。成形は他の甕同様に35cmの粘土板から作りあげている。胴部外面は叩き調整を、内面および底部外面は吐け調整を行っている。甕棺1などと同様な31ヶ所の縄痕跡が底部外内部に残るほか縄の痕跡がついている部分に外周にそって草の繊維の痕跡がついている。この痕跡は他の甕には見られない。副葬品は何も出土していない。

貝がら散布地

本谷C遺跡を調査するきっかけとなった地点である。

現地表面において貝の散布と中世I器片が見られるとして調査に着手した。しかし、表土層（調査前までは桃畑として耕作されていた。）では直径200cmのまともをもつて貝がらの散布が見られたが、表土層を除去してみると第100図に示すとおり数ヶ所のまともも周りにばらばらと散った状態であった。しかも、貝がらが散布しているのは本谷C遺跡として調査した平坦面を造成した時に旧傾斜地を埋めた造成土層からの検出であった。この造成土層は出土遺物から幕末以降の造成と考えられ、当初考えていた中世貝塚ではなく、近代かたら現代にかけてのゴミの投棄を行う考えられるが、多量の貝殻の出土を見た



第99図 貝殻散布地 (1/40)

1. 黒褐色土（貝を含む）
2. 黒褐色土（貝を含まない）
3. 地山土（礫まじり）
4. 地山土（粘質がかかる）
5. 地山土（砂質がかかる）
6. 地山土

ことと、当初の調査目的の一つであったため記載する。

貝殻はハイガイとニンガイのみで他の貝は検出できなかった。双方の貝で整理箱に約3箱分出土している。比率は体積比でハイガイ6に対しニンガイ4の比率である。

土壌墓1

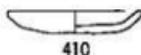
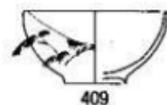
第1調査区東隅、第2調査区との境で土壌墓2とならんで検出した。掘り形は直径130cmのやや歪んだ円形を呈し深さ60cmを測る。掘り形のはぼ中央に底径120cmの棺桶の痕跡が認められた。木質は残っておりず、部分的に粘土化していた。

出土遺物は棺桶底部より、キセル雁首2点、碗1点、土師質小皿2点が出土した。

雁首は2点とも腐食がひどく、ぼろぼろで取り上げることすら出来なかった。碗(419)は竹の模様を青呉須で描いた白磁碗である。土師質小皿(410・411)は、いずれも口縁部に炭が付着しており灯明皿として使用されていたと考える。

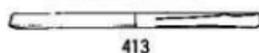
土壌墓2

土壌墓1の北西側にならんで検出した。土壌墓1より小さく、円形の掘り形は直径90cmとす

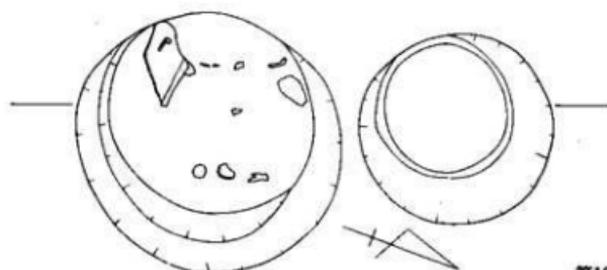


第101図 土壌墓1出土遺物(1/4)

60.50M



第102図 土壌墓2出土遺物(1/4・1/2)



1. 地山土(小礫を含む)
2. 地山土(円礫を少量含む)
3. 黄褐色土
4. 黄褐色土(砂礫まじり)
5. 地山土

第100図 土壌墓1・2(1/30)

墳墓1の約2/3程度の大きさである。

掘り形の底部において西南側によせた形で棺桶の痕跡を検出した。これによると棺桶は底部径80cmの桶を使用しており底部材の残欠から使用材は杉と考えられるが、側板は粘土化しており採取できなかった。

出土遺物は白磁碗蓋412・須恵質板状土器413及び火打金414の3点である。蓋412は、端反碗の蓋で模様は少しくずれがあるが雲竜文を表しており、具象化した雲と飛竜を描いている413は円形の蓋状のもので端部より2.5cm内へ1段稜線が巡る。作りは非常に丁寧で焼成も良く焼き締まっている。414は火打金である。約1/2強残っている。錆のため使用痕はあまりはっきりしない。

土墳墓3

排水溝2の南側で炉1・2・3・4・5・6と名付けて検出した。

最初は炉と並んでいたことと埋土中に炭が混じていたことから炉の可能性も考えていたが、木棺のうかがわす鉄釘の出土及びすべて破片であるが4点の出土遺物から土墳墓と考える。

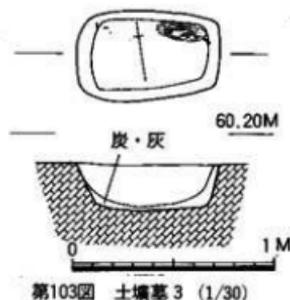
掘り形は70×55cmのやや胴腰の長方形で深さ25cmを測る。底部約5cmは炭と灰で埋まっていた。

埋土中から鉄釘が出土しているが出土位置から木棺を想定すれば、長さ55cmとなる。幅は掘り形から推定して最大25cmと小形の木棺となる。

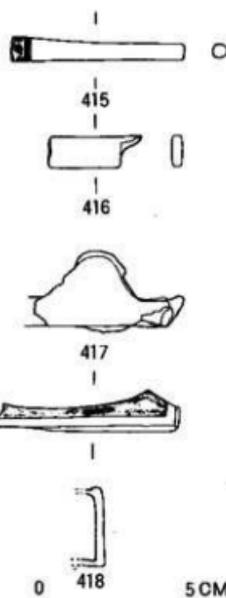
埋土中の炭は均一に敷き詰められているのではなく南側に多く北側は少ない。この炭と灰の層からは遺物の出土はなかった。炭は色々な雑木の小枝が主体で大きな幹の部分などは無い。またどんぐりの炭化した破片も少量出土している。

出土遺物は、煙管の吸口(415)・弁(416)・火打金(417)及び水滴(418)の5点である。

まず煙管の吸口は土墳墓出土等のほかの煙管と異なり非常に保存が良く、肩の部分にはヤスリ目による模様まで入っている。弁は水晶製である折れており残りの破片は検出できなかった。397は火打金と思われる。一部欠損しているがほぼ完形に近い。398は水滴の一部である。白磁製であり上面には青呉須で色付けされている。



第103回 土墳墓3 (1/30)



第104回 土墳墓3 出土遺物 (1/2)

土壌 1

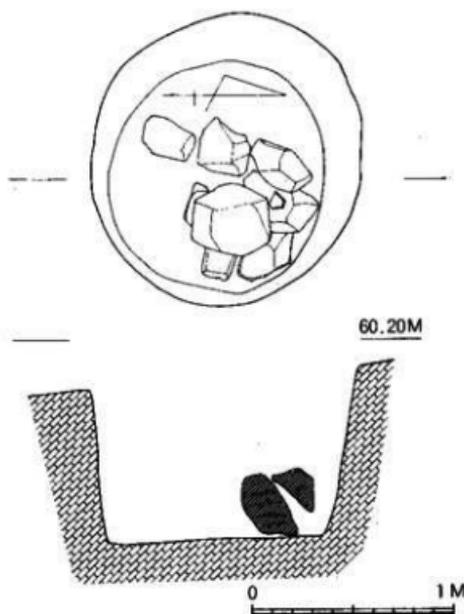
排水溝 2 の南側で検出した、直径約 140cm のやや歪んだ掘り形をした土壌である。

井戸 2 と同様に井戸の可能性も考えて掘り下げたが人頭大の石が 9 個無造作に底部にはいていただけである。

石に規則性はなくこの土壌の破棄ともなっていて入れられたと考える。

埋土は黄褐色上の地山上で一気に入られていた。

出土遺物は 1 点も無かった。

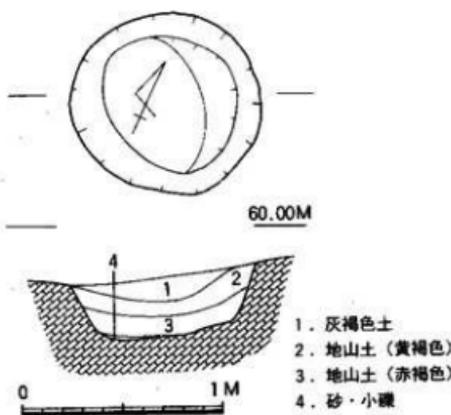


第105図 土壌 1 (1/30)

土壌 2

第 2 調査区、井戸 2 の南西側で検出し少し歪んだ直径約 90cm の円形の掘り形で深さ約 30cm の土壌である。

出土遺物は何もなかった。



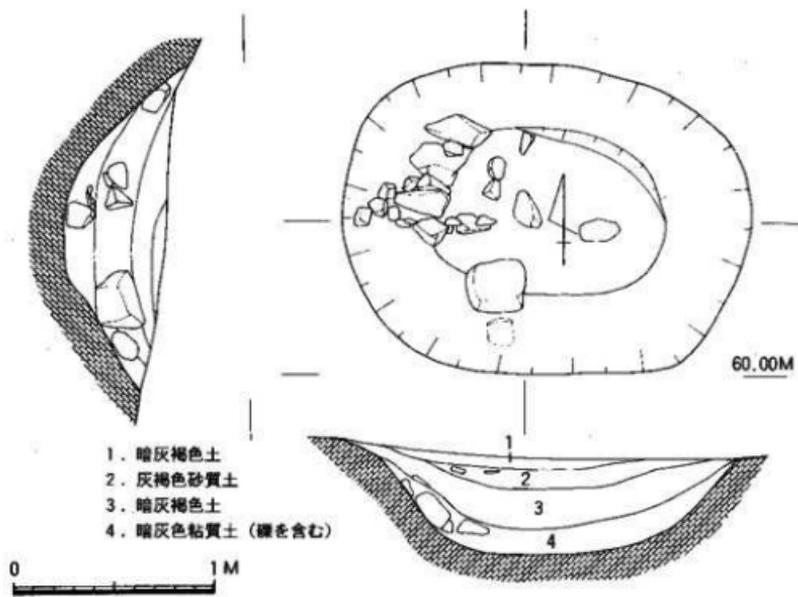
第106図 土壌 2 (1/30)

土壌 3

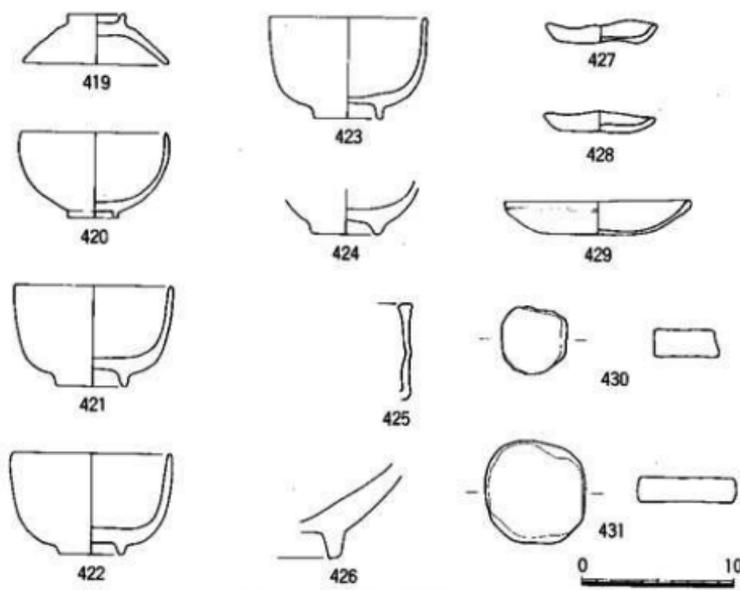
第 1 調査区の南東側で検出した。

150×200cm の歪んだ長方形の土壌である。西側には 4 個の石が配されていたほか多数の握り拳大の石が入っていた。石の配置から井戸の可能性もあるが現位置をとどめているのはこの 4 個しかないため、土壌として扱うこととする。

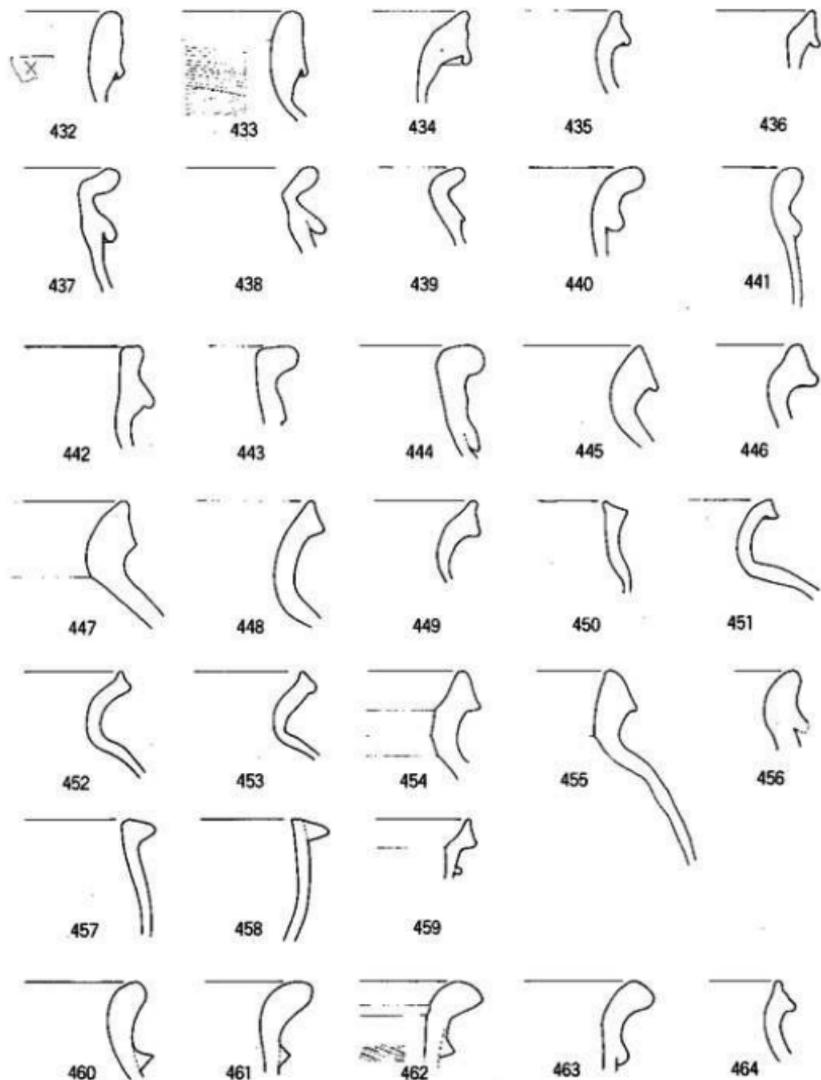
出土遺物は京焼の碗 420・肥前系の碗 421~423 青磁の線香立て 425 唐津焼きのこね鉢 421 のほか投弾 430・431 等が出土しているが、大半の遺物は余り欠損が無く原形をとどめている。



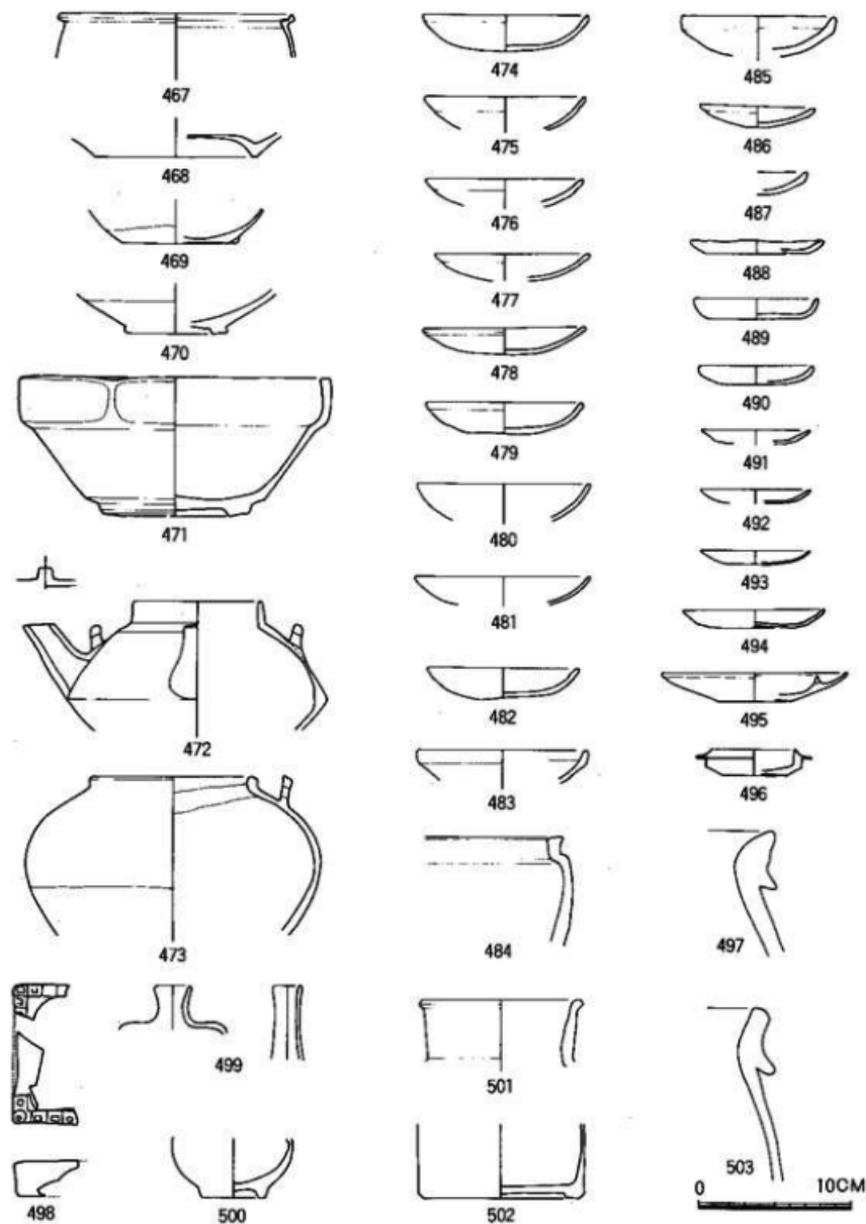
第107図 土壇 3 (1/30)



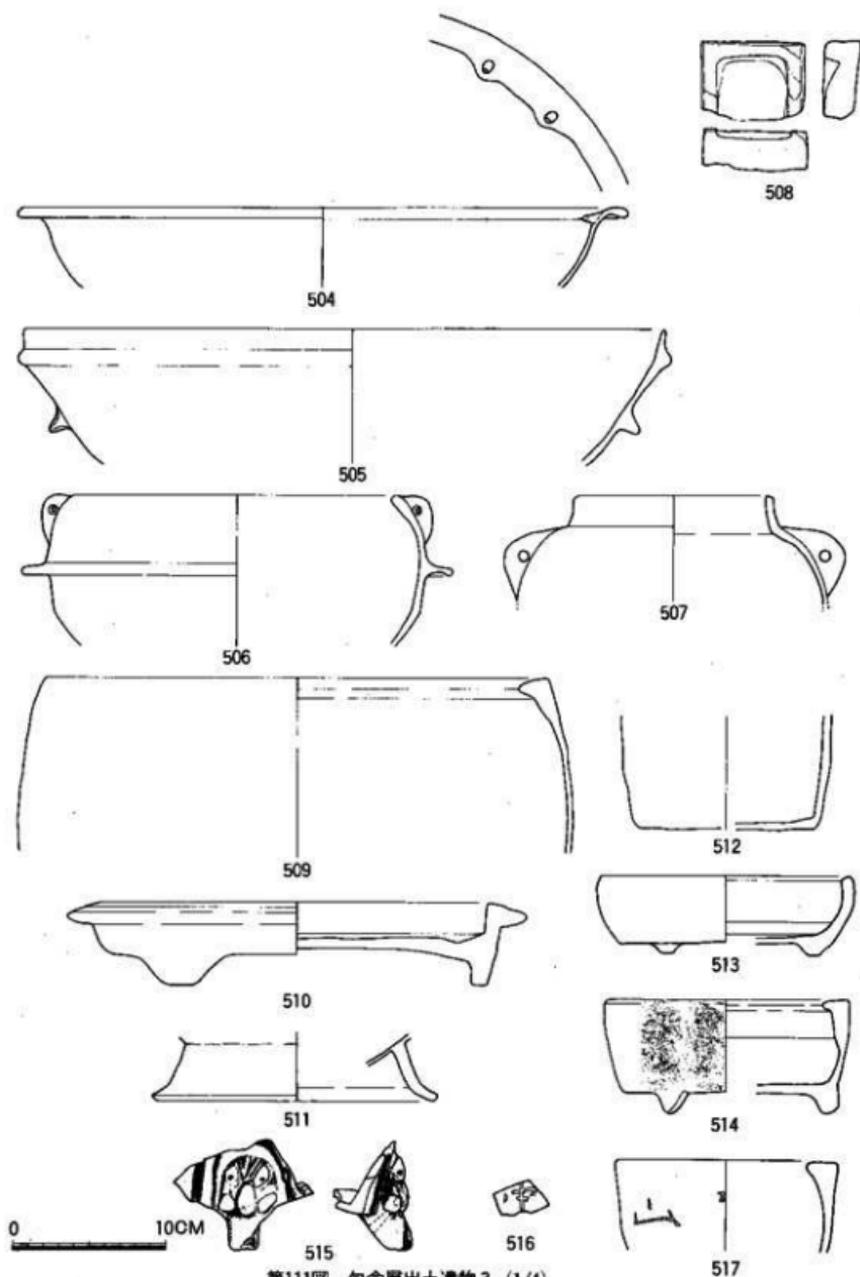
第108図 土壇 3 出土遺物 (1/4)



第109圖 包含層出土遺物 1 (1/4)



第110圖 包含層出土遺物 2 (1/4)



第111図 包含層出土遺物3 (1/4)

第3章 考 察

第1節 本谷遺跡発掘調査概要

本谷遺跡の調査の結果、尾根上の緩斜面で西から順にA・B・Cの3つの集落跡が確認された。それらは、鎌倉時代後半から室町時代に及ぶ中世の集落跡、江戸時代前半の墓群、江戸時代後半の建物(屋敷)跡などを含むものであった。個々の遺構・遺跡の性格的な位置付けについては、報告書中で述べたとおりであるが、これまで本谷遺跡の周辺地域は、遺跡の確認例に乏しいだけでなく、文献として残されている資料も乏しいことから地域史の空白の部分が多かった。そこで、以下の記述において、この発掘調査の概要を述べながら、本谷地区の歴史の中でのその位置付けをおこなってみたい。

まず、本谷地区での本格的な集落形成は、本谷A遺跡の出現を契機とする鎌倉時代後半の13世紀後半に始まると見られる。当時の海岸線は現在のものに比べてかなり奥にまで入り込んでいたであろうことが、周辺地域に残る地名(沼・沖山など)から推察される。今立地区を含めた今井地区の干拓事業は、文献上では明らかではないものの中世を遡るものではないといわれ、今井地区に入り込む入江の最奥部付近に位置するこの本谷周辺は遠浅の海を目前にした半農半漁的な地理条件を備えていたと考えられる。このことは、本谷C遺跡から検出された近世以後の小規模貝塚が一つの特徴的な存在である。

そこでちょうど後背する山間部の位置に集落が形成されたわけであるが、その場所は、北側の園井地区から峠を越えてきたところである。園井側の遺跡の状況については詳細不明であるが、本谷遺跡から約500m離れたところには、相前後して園井土井遺跡が形成されており、その規模からみて、この地域でも中核的な役割を果たしたものと考えられる。さらに、本谷A遺跡自身がこの園井側から山沿いに通じる道筋にあることから、園井土井遺跡に対して副次的な位置にある遺跡といえることができる。このことは、おそらく鎌倉時代を通じての「開発」の結果として、この本谷地区では、園井側から開発の進展が見られたことを示すものといえる。

その拠点となる集落の規模は、掘立柱建物2棟余りからなるごく小規模のものではあったけれども、順次谷部の荒地を耕地化していったことと思われる。とりわけ、峠を南に降りてきた付近は北側の谷筋からの天水利用が可能な場所であることから、この周辺の開発が室町時代を含めて生産の基盤となったのではあるまいか。出土土器の中で、高台を有する椀Bの消長・椀Cの出現・椀の消滅と皿の増加から、本谷A遺跡から本谷B遺跡、さらに本谷C遺跡への時代的な変遷を認めることができ、本谷C遺跡の形成期間として16世紀前半まで小規模で安定した経営がなされていたと考える。

特に、本谷A遺跡内に営まれていた中世墓は、後世も江戸時代を通じて墓地として利用されているが、その地点が遺跡周辺を見下ろすところにあるというだけにとどまらず、本谷B遺跡若しくは本谷C遺跡の人々が墓地を設けるに際しての、本谷周辺の開発の拠点であったところへの意識が表明されているのではないかと考えられる。

これらの集落は、本谷最奥部の限られた範囲内で規模的にも大きな変化は認められないが、位置については順次低いところへ降りていることが指摘できる。これは、当時進行していたと思われる今井地区の干陸化の傾向にも関連あるものと考えられる。即ち、本谷のさらに広い耕地の拡大を求めるといった労働力の方向が麓に向くにつれて、集落自身もその拠点的位置を徐々に変えてゆき、ついには、現在の山裾付近へと拡大したのであろう。

江戸時代になると本谷遺跡周辺の耕地は引き続き経営されたであろうが、遺跡部分にも開発は進み、地形の改変を伴う開墾が本谷A・B遺跡などにおこなわれている。これに対して本谷C遺跡においては、江戸時代初期17世紀代を中心に墓地としての利用がおこなわれる。

これらは、大甕を用いた土葬墓が大半を占めるものの遺跡の全域に渡ってアトランダムなかたちで検出された。後世の削平の状況からすると、本谷A遺跡で確認されたような素掘りの土塚墓も存在したのではないかと予測されるが、本谷遺跡に見られるような、旧来の拠点集落の跡に墓地の営造があることは、次代の意識の中で遺跡・集落が連続していることを示すものではないだろう。

ここで、本谷地区の歴史の一つの画期ともなるのが、本谷C遺跡北側に祭られる稲荷神社であろう。この神社の成立年代については詳細不明であるが、神社に残っていた札木に記された年代に、宝暦7年(1756)・文化3年(1816)の2点があり、少なくとも江戸時代後半の18世紀代には建っていたものと考えられる。この神社は現在も本谷周辺の人々の信奉を得ているものだが、注目すべきは、この18世紀後半代以後には本谷C遺跡第2調査区にも建物(屋敷)の存在が確認されていることである。その建物(屋敷)からは人量の陶磁器類を始めとして、井戸やがの跡などが検出され、とりわけ出土陶磁器の量・内容から比較的中位の農民の姿が描かれる。

この建物と神社を同一的な存在と見ることは早急であるが、この付近に神官の屋敷があったとする言い伝えはそのあたりの事情を反映している可能性もあると考える。いずれにしても、神社の造営期を境に本谷C遺跡の部分はさらなる造成・削平を受け、遂には墓地から屋敷地として転用されるに至る。今日残っている小字名によれば、本谷地区でも「本谷」という小字で呼ばれるのは山裾の一部に相当し、本谷遺跡の付近は、A遺跡周辺が「猪迫」、B・C遺跡周辺が「山之神」と呼ばれている。本谷地区の開発の先鞭を担ってきた遺跡群は、干拓による土地拡大と集落の移動の流れの中で、逆に近代後半以後の歴史の渦に埋没したのと考えられる。(網本)

第2節 出土遺構について

1 中・近世墓について

本谷遺跡群からは、中世墓2基および、近世墓は甕棺8基と土壇墓7基を検出している。

まず中世墓であるが、これは亀山焼および亀山焼類似の帯を使用した火葬墓と考えられる。これは本文中にとくに載したが、地山面に小さなテラス状の掘り込みを作り埋葬されていた。亀山焼を使用した骨壺の発掘調査は今回がはじめてであるが、現在までにも開発に伴い数点それらしき壺の出土をしている。本谷における中世墓は2基のみであるため、検出したという事実報告のみとする。

山陽自動車道の工事において、谷一つ東へ隔てた黒井遺跡において五輪塔と火葬骨のつまった外耳鍋および壺・焼成前の穿孔のある植木鉢状の形態をする深鉢が工事中に発見されている。五輪塔の数から最低12基の中世墓があったと推定される。このことや笠岡市立郷土館において本谷のすぐ南側に位置する大黒山遺跡において出土したと伝えられる五輪塔が11点保管されていることなど今後のこの地点の中世墓を考えていく上で重要な位置をしめるであろう。

近世墓については、土壇墓7基と甕棺8基との計15基検出している。まず土壇墓については本谷A遺跡で検出している。この4基については道路敷のはずれに位置し、すぐ脇の工事区域外にも墓が並んでいた。これらは江戸時代以降であったが一連の墓域を形成していたと考えられる。この4基の土壇墓は、幼児骨の入った墓をのぞき、長方形の土壇で、骨の残存状態の良い2基から推定すれば、正座もしくは胸の前で足を組む体勢である。いずれにしても座棺を思わせる埋葬である。また、木棺は痕跡すらなく想定することすら無理なことだが、土壇の形態から長方形と考えられる。つまり長方形の棺の中に死体を座らせて埋葬している。これに対し、本谷C遺跡で検出した土壇墓のうち2基は円形の掘り形を有し、木棺痕跡から桶状の棺が考えられる。時代劇などに登場する馴染み深い形である。この棺桶の場合普通に考えれば死体は座った形である。本谷AおよびC遺跡のどちらも座った形で埋葬されている点は興味深い。

次に甕棺墓であるが、本谷C遺跡において8基の甕棺墓が検出されている。検出地点にまともではなく、第1・第2調査地区全域に散って検出したが、甕棺6以外は削平を受けており特に甕棺5は埋設方法すらわからない状態である。また第2調査区東側の旧山道側への造成土中から多量の甕棺と同様の大甕の破片の出土をみた。このことから8基の近世墓の外にもまた何かの甕棺があったと推定される。

いづれの甕棺も埋葬方法はどれもあまり差異はなく甕の最大径よりやや広い土壇を掘り一方

の壁面に沿う形で棺を据えている。

このような甕棺墓については、いままであまり知られていないが、岡山県は備前焼産地ということもあり、俗に「死人甕」という名称で呼ばれ、備前焼の棺用の甕を使用した。同様の甕棺墓の存在は周知されているところなので比較対象として考えてみたが、備前焼においても江戸時代中頃使用されはじめ、昭和初期にはまだ使用されていたという程度で、あまり研究がされていない。使用地域については、備前焼のふるさと備前市はともかく、広範囲な流通はあまり行われておらず、岡山市においても旭川西岸ぐらまでのごくかぎられた地域で使用されている。しかし、土葬用の甕棺として製作され使用されていたことは何かの重要な手がかりになると考える。

さて本題にもどるが、この本谷C遺跡出土の甕棺について考えてみると、口径の胴部最大径と底径とあまり差のないずん胴形の器形は備前焼のそれと合通じるところがある。また時期についても各甕棺ごとの実年代についてはどの甕棺も副葬品が少なく、その上まれに出土している出土品からも実年代を推定できるだけの資料に乏しいが、煙管は18世紀後半から19世紀にかけてと考えられ、明治時代まで続くとは考えがたい。(岩崎)

2 祭祀状遺構について

本谷B遺跡第2調査区検出の祭祀状遺構に対し、それが水利に伴う祭祀に関連する遺構と考えた理由については、報告の中で述べたとおりであるが、特に、その目的についての考えの一つの根拠となるのは、この本谷地区の田畑の現状に目を向けてみて、本谷遺跡の真下を含めて地区内の比較的広い範囲の田畑への水の供給がこの谷を流れる小川に依拠していることである（発掘中の地元作業員からの聴取による）。

言うまでもなく、現在の地理的所見が中世段階にもアブリオリに適用されるかどうかは問題であるが、使用済のものの廃棄とは思えないこれらの上器群が、水利に関連する位置から出土していることは、何らかの「まつり」を想定することも可能ではないかと考えるのである。

ここで、類似の出土例に岡山市下足守南坂遺跡で検出されたものがある。担当者からの御表示によると、その遺構は、尾根上で古墳時代の土壇墓を切って検出され、皿を4点積んだ上に鍋が伏せられたような状態であったという。周辺から鉄釘が検出されていることから、中世墓との判断がされており、さらに、納竹箱的なものを想定しその上方に上器（鍋）を置いたものと考えられまいかとの見解であった。

本谷遺跡検出の土器群についても、碗・皿の積み重ねられた状態を復元してみると、鍋を上から伏せた時には縁が下にまで達せず、ちょうど碗・皿が三点で鍋を支えているような状態になることがわかった。さらに、鍋の口縁部はいずれも屈曲部に割れており、これらのことから推して鍋については、本来完全に伏せた状態ではなかったと考えられ、碗・皿の転倒後に現状のように伏したものと言える。従って、箱的なものに納められていて、それが腐食したものという想定も十分可能であるが、本谷B遺跡の場合、釘を確認することも箱の痕跡や土城を確認することもできなかった。また、たとえあったとしても鍋自身余りこわれていないことから、下の箱も小さなものかせいぜい鍋を立てかけた程度であろう。

さらに、本谷B遺跡においては、その出土位置が遺跡群全体の中でも低位であり、出土した土層も黒褐色の礫混じりのものであって、墓を設けるのに適した場所とは考えられない。むしろ、集落の縁辺部とはいえ日常生活に心理的距離の近いところへあることを逆に評価し、生活に必要な水を「まつり」（といっても具体的な内容については推測し難いもの）ことを意図した土師質土器の供献方法として、この遺構の性格は捉えておきたい。

なお、下足守南坂遺跡については、現在岡山市教育委員会において整理中であり、同文化課の根木修・神谷正義氏からは、未報告資料についての有益な御表示を賜った。記してご好意に厚く感謝するものである。（網本）

3 炉群について

本谷C遺跡第2調査区からは、その北側において炉群を確認することができた。これらは、調査区の北西にちょうど東西方向に作られている溝状遺構の東側と南側の2ヶ所で検出されているものである。焼土の残存から確実に炉と判断したものは、そのうちの1・2・4号炉であり、これらの性格については先に略述したとおりである。

この調査区に存在したと見られる近世の建物については、出土した陶磁器類から江戸時代後半の18世紀後半から幕末にかけてのものと考えられるが、その規模・位置関係などは明確でない。しかし、溝がT字状に分岐しているところに注目して、その東南付近が建物の隅になると見られる。従って、2ヶ所に分れる炉群（淡灰色土が入るのみの炉3・5・6を含む）の建物内での相対的な位置関係も自ずから推測される。つまり、建物の北西の隅に2ヶ所に覆って、火を用いる施設があったと見られるのである。

炉1・2については、炉1内に残されていた焙炉から炊事に使われたものと考え、この位置に厨房があったものと考え、さらに両者の木炭の残されていた方向により、炉1は西側・南側を、炉2は北側を焼成口側としたことがわかる。従って、これらはほぼ直角に交わる形で営まれているといえ、同時使用を考えるべきものではないと思われる。むしろ、それぞれが独立した施設内で機能を果たしていたのではないかと考える。

そこで、全体的に後世の開墾による削平が著しいために、炉の存在以外で具体的に厨房を示す遺物・遺構を確認することはできなかったけれども、近世民家での勝手の様子（註1）から類推して、より中心部に近い炉1に「いろり」（調理）状の用途を、それより北側で、建物の方向に向かって火を用いる炉2に「かまど」（煮沸）状の用途を考えたい。とすれば、炉2の周囲などは土間ではなかったかとも想像されるが、検出面のいずれも明黄色褐色の地山面であるためにその差異は確認できなかった。

炉3～6については、焼土の確認されたのが炉4のみであることから、これらの関係自身から考えねばならない。炉4については、木炭の残り方から推して南側が焼成口であったことがわかるほかに、炉4を含めてほぼ直線上に並ぶことから、これらは同時に使用されたものであることがわかる。とすれば、「へっつい」と呼ばれる連房式の「かまど」が想起されるのであるが、炉1・2との相対的な位置から厨房の一環とは考え難い。傍にまで延びていたと見られる溝との関係から、本遺跡では浴室など他の施設の可能性を指摘するにとどめたい。（網本）

註1. 光藤俊夫・中山繁信『すまいの火と水』1984

第3節 出土遺物について

1 中世土器について

本谷遺跡からは、その遺跡ごとに比較的まとまった量の中世土器の出土があった。そして、それらは器種構成・型式において僅かながらの変化が認められることから、中世土器の変遷を知る上で重要な資料になると思われるため以下に略述する。

中世土器の編年、特に瀬戸内地域での編年については、広島県草戸千軒町遺跡の資料によりその概略は組立てられており（註1）、その後のその他の遺跡の調査と資料の増加により具体相も明らかにされつつある。広島県東部においては、草戸千軒町遺跡のほか同じく港町として栄えた尾道市の尾道遺跡の調査（註2）、内陸部の集落群として福山市の大塚十井前遺跡ほか（註3）の調査が代表的であり、岡山県においては、岡山市の百間川遺跡（註4）、三手遺跡（註5）、総社市の樋本遺跡（註6）、浅口郡鴨方町の沖の店遺跡（註7）などが代表的なものとしてあげられる。

本谷遺跡出土遺物についても、大略的にはこれら資料の増加に寄与するものであるが、今回は、それぞれの遺跡単位で土器の様相に変化が見られる点で特徴がある出土といえる。

基本的には、型式変化のとらえやすい碗（註8）に注目してみると、本谷A遺跡第1調査区谷部包含層・第2調査区建物群出土の碗には簡略化しているものの高台が見られるけれども（碗B）、本谷B遺跡第1調査区テラス状遺構出土のものに見られなくなる。さらに碗Cの現れている第2調査区祭祀状遺構があり、本谷C遺跡第1調査区斜面包含層出土のものになると碗は衰退し代わって皿が基本的な器種になっている。これらの特徴は、全体として草戸千軒町遺跡の分類によるⅡ期の特徴に対応するものと考えられる。

本谷遺跡においては、それぞれの遺物は必ずしも遺構に伴うものばかりではないが、集落の形成期間とも合まってか夾雑物の少ない状態で土器群の様相をつかむことができ、このことと周辺の遺跡出土の土器編年観とに基づいて、次のとおりに時期区分したい。

まず、本谷1期としての本谷A遺跡第1・2調査区出土のものをあげる。この時期には、碗Bが主流を占めるものの既に高台の退化傾向が進んでいる。碗の口径は10.5～11.2cm・器高は3.8～4.2cmで、小皿の口径は6.9～7.2cmである。鍋は一貫して鍋Bが大半であるが、この時期には口縁端部を丸くおさめただけのものであって、草戸のⅡ期の中でも古い方に位置し13世紀後半代のものである。

本谷2期は、本谷B遺跡第1調査区出土の土器をあてる。碗Bは見られなくなり、碗Aや皿AⅡが見られる。鍋については大きな変化は認められないが、¹⁴C年代により14世紀前半を中

心とする年代が与えられている。本谷B遺跡第2調査区祭祀状遺構出土の土師質土器は、碗Cを中心とすることで、本谷3期のものとする。ここで出土している碗Cは口径に歪みが多いものの、94~10.2cmの範囲内を示し、器高も3.8~4.2cmを測る。小皿の口径が6.5~6.9cmと本谷1・2期に比べて縮小の傾向が明らかである。

碗Cは、草戸千軒町遺跡では出土数の少ない器種とのことであるが、とりわけ、本谷遺跡出土の碗Cは、本谷A遺跡の中世墓付近の造成土中出土のものを含めて器壁2~3mmと非常に薄く作られており、碗自身の形も屈曲をしたものであること、底部のへこみが中心部から外れているのが一般的であるなど特徴的な形態をしている。同様の碗は、鴨方町沖の店遺跡でも少数出土している(註9)が、本谷遺跡北西方の岡井上井遺跡では普遍的にかなり出土している(註10)とのことであり、本谷遺跡出土のものと同様の型式のものである。本谷3期の時期については、14世紀後半から15世紀初めのものと考えるが、この型式の碗の分布は現在のところ当該時期で岡山県西南部に限られるようであり、地域性を示す遺物として注目される。

本谷4期には、本谷C遺跡第1調査区斜面包含層出土の遺物をあてる。この時期には、碗は碗Cなどが僅かに残るものの、全体としては皿Aが主流を占めている。器高はいずれも2.9~3.3cmの範囲内に納まる非常に浅いものであるが、口径は10.2~11.7cmと比較的ばらつきが認められる。このほかに、口径の小さい皿で高台を貼り付けたものもある。鍋は、口縁部が大きく拡張されるものばかりになり、本谷3期に見られ始めた口縁端部に面を持つ傾向がますます顕著になったものが現れている。摺り鉢は、備前焼のものは見られないが、内部のカキ日が底部にまでは下りていないものばかりである。

これらの土器に合わせて、本谷C遺跡第1調査区南側隅出土のものを加えたい。というのも本谷4期では明確に内耳を伴う鍋が出土していない反面で、南側隅から出土している内耳付きの鍋が口縁部に対して未だ鋭角に付けられていることなど、古い要素を持っているからである。従って、総体として本谷4期は15世紀後半代から16世紀前半を含む広い範囲となり、主としては、15世紀後半のものと思われるが、細分の可能性も十分ある。しかし、今回出土した資料のみでは実証性に乏しいため、今後の類例の増加を待ちたい。

なお、包含層出土遺物として本谷B遺跡などで碗Bの中でも高台の高くしっかりとしたものが検出されている。これらに伴う遺構は確認できていないことから、詳細は不明であるが、本谷1期をさかのぼる遺物である。

以上が本谷遺跡出土の中世土器から見た時期区分案であるが、草戸千軒町遺跡での土器の変化と比べてみて、ほぼ同様の傾向は認められるが、本谷3期以後の変化にはこの地域独自のものも認められる。同じように地域的な動向は、資料の蓄積の進む尾道遺跡でも認められており(註11)、各小地域での遺跡の検討に基づく土器の編年が今後も期待されることであるが、本

谷遺跡・園井十井遺跡での特徴的な例Cの出上の分布圏がさらに明確になるならば、日常生活具である土器の流通ということで、荘園などを単位とする小地域での生活・経済圏の様相を知る一つの手がかりとなるのではないかと考える。現段階では、この本谷地区を含めて鴨方から福山に及ぶ海岸部約20kmの点としての分布範囲ではあるが、特に今井地区を中心とする経済的なまとまりが推測され、文献の乏しいこの地域にあっては興味深い問題の方向といえる。(網本)

註1. 志道直「草戸千軒町遺跡出土の土師質土器編年試案」『草戸千軒』48 1977

註2. 尾道市文化財協会「尾道市街地発掘調査概要」一土堂一丁目所在一 1977

尾道中世遺跡調査団「尾道市街地発掘調査報告」一土堂二丁目所在一1980

尾道市教育委員会「尾道」一市街地発掘調査概要一 1977～1982

同「尾道遺跡」一市街地発掘調査概要一 1983～1985

註3. 松井和幸「出土土器の比較・検討」『山陽高速道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ』(財)広島県埋蔵文化財調査センター 1984

註4. 福田正継「中世の土器について」『旭川放水路(白間川)改修工事に伴う発掘調査』岡山県教育委員会 1981

註5. 神谷正義「高台付碗に関する二・三の整理」『三年(庄内幼稚園)遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会 1981

註6. 高畑知功「遺物口2 中世」『榎本遺跡』岡山県教育委員会 1987

註7. 伊藤晃「2区溝及び4区包含層の出土遺物について」『山陽高速自動車道建設に伴う発掘調査2』岡山県教育委員会 1981

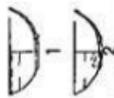
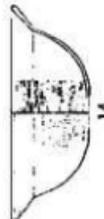
註8. 遺物の形式(器種)名については、草戸千軒町遺跡の分類に従っている。

註9. 註7に同じ。鴨方町歴史民俗資料館で同教育委員会のご好意により実現した。

註10. 山陽高速自動車道の建設により調査された遺跡で現在岡山県古代吉備文化財センターにて整理中である。調査を担当された福田正継氏からは多くのご教示・遺物実見の機会を賜わった。記して感謝したい。

註11. 註2のうち、『尾道遺跡』1985で皿Cと呼ぶものなど。

註12. 本谷遺跡出土の中世上器の整理に際しては、岡山県古代吉備文化財センター・広島県草戸千軒町遺跡調査研究所・浅口郡鴨方町教育委員会・尾道市教育委員会を始め多くの方々から有益なご指導・ご教示を賜わったが、未だ残された課題は多いと考える。今後の資料増加の中でさらなる検討を続けることで、感謝の意を表したい。

	椀 B	椀 C	皿	鍋
本谷 1 期				
本谷 2 期				
本谷 3 期				
本谷 4 期				
				
				

本谷遺跡土器出土器年表

0 100CM

2 出土文房具について

本谷群からは、いくつか文房具の出土がある。まず、本谷A遺跡では第1調査区谷部包含層と第2調査区北側を走る排水溝とから石硯が1点ずつ出土している。そして、本谷C遺跡からは、甕棺3から石硯、甕棺4・第2調査区斜面包含層から水滴がそれぞれ1点ずつ出土している。これらの遺物は、本谷A遺跡第1調査区出土のものを除いては、いずれも江戸時代のものと考えられ、そのうちでも遺構に伴うと見られるのは、本谷C遺跡の江戸時代の甕棺4内出土の水滴のみである。

石硯については、本谷A遺跡第1調査出土のもの(74)が楕円硯1Ac、第2調査区(110)・本谷C遺跡出土のものが長方硯1Bcに分類(註1)される。時期については、74が谷出土の土器により13世紀後半代のものと、110が排水溝の石に転用されていることから江戸時代のもの、508が甕棺群を埋める造成に伴うものとすれば江戸時代後半のものという年代が与えられる。

近隣地域での石硯の出土は、広島県福山市の草戸千軒町遺跡(註2)や尾道市の尾道遺跡(註3)などで確認されているが、岡山県南西部においては、浅口郡鴨方町沖の店遺跡(註4)から1点出土している程度である。もっともそれらの出土は大半が破片であり、遺構に伴っているものも少ない。さらに、出土している遺跡自身、草戸千軒町遺跡・尾道市街地遺跡といった中世の港町として栄えた場所であることが特徴的である。このことはすぐにも文字の一般的な使用が周辺部で遅れることを意味するものではないと考える。むしろ、本谷遺跡出土の楕円硯が陸部の著しく磨滅した、かなりの使用頻度を推測させるものであるだけでなく、陸地の小規模集落から出土したということに着目して、文字の使用はかなり日常的ではなかったかと考える。

これに対して、本谷C遺跡出土の水滴は甕の底部からのものであり、副葬品として埋められていることに注目される。墓から文房具が出土する例は中国には多いものの、日本では広島県世羅郡甲山町墓地での硯の出土など、類例には乏しいという(註5)。時代は下るものの被葬者の文人的なイメージを与える特徴的な出土といえる。(網本)

註1. 水野和雄「日本石硯考」『考古学雑誌』70～4 1985

註2. 篠原芳秀「草戸千軒町遺跡出土の硯」『草戸千軒』39 1976 ほか

註3. 尾道市教育委員会『尾道遺跡』1984 ほか

註4. 岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告42』1981

註5. 水野和雄氏からの御表示による。

3 近世土器について

本谷C遺跡第2調査区から多量の陶磁器、大甕などの出土したのでここで一括して記載する。

まず、陶磁器であるが、これは排水溝2から多量の出土があったほか造成土からも出土している。排水溝中の物と造成土中の物では差異がなく、同一の模様の蓋付き碗の身の部分は造成土中から、また蓋は排水溝2から出土するものあるいは、同一模様の破片がどちらからも出土することなど、破棄するときに造成土中に埋ったか、後の削平・造成により散ったかはさだかではないが、いずれにせよこの排水溝2を伴って立っていた建物の破棄の段階で投棄された遺物ではないかと考える。

まずこの陶磁器をみてみると肥前系（有田焼・伊万里焼等の名で親しまれているが、周辺部の窯、たとえば長崎・波佐見産のものも出土しておりここでは、「肥前系」ということばですべてを含めた形であつかう。）京焼・常滑焼・および地元の備前焼と、さまざまな産地の陶磁器が入ってきている。

出上品の殆どは碗・皿という日用雑貨である。特に肥前系の碗・皿が目につく。この肥前系の碗は広東碗及び端尻碗と呼ばれる器形のもので19世紀に入って現れる器形である。また4点ではあるが「焼継」と言う技法で補修されたものも出土している。この技法は、寛政以降流行した技法であり明治ごろまで行われたと言うことであり時代的にも一致している（註1）。

この陶磁器とならんで、本谷遺跡の出土遺物の大部分を占めるのが大原焼系の大甕である。甕棺の項目でも書いたがこの大甕は棺桶用の特別の器形である。8基の甕棺及び造成土で多量出土した。造成土出土については口縁部のみではあるが110図に記載している。

しかし今まで発掘調査にともなってこの大甕が出土したという報告はほとんどなく、同じ山陽自動車道に伴う発掘調査で4遺跡から出土したのみである。このうち3遺跡は隣接する浅川郡鴨方町での出土であり（註2）、もう一か所は金光町の亀山遺跡からである（註3）。鴨方町出土のもので肥料甕として扱っており亀山遺跡出土のものも単独出土と言うことで肥料甕の可能性を示唆されていた。しかしこのうち鴨方町の和田遺跡出土の甕は本谷同様土壌内に埋設されていたものもある。これらの大甕の器形は本谷のそれと同じである。この資料を含めて編年及び大原焼と亀山焼との関係などは今後の究明に待ちたい。（岩崎）

註1. 陶磁器については九州陶磁文化館の大橋康次氏の御教示による

註2. 伊藤晃外『山陽自動車道建設に伴う発掘調査2』岡山県教育委員会1981

註3. 調査担当者の御教示による

大原焼についてはまだ十分研究がなされていないため、当報告書の中でいう「大原焼系」という表現は、これを限定するものではない。

第4章 付 篇

第1節 笠岡市本谷A遺跡出土の近世人骨について

岡山理科大学 池田次郎

昭和60年から61年にかけて岡山県笠岡市教育委員会が実施した笠岡市本谷遺跡の発掘調査により、本谷A遺跡から中世墓2基と近世墓4基が検出されたが、そのうち近世墓のすべてに人骨が遺存していた。

1号墓人骨

すべて幼児骨で、上顎左の第1臼歯、右の犬歯、下顎左の中切歯のいずれも乳歯が、それぞれ2本検出されているので、二個体分を含んでいる。そのうちの一体の歯は、上顎左右の中切歯と第1臼歯、右の犬歯、下顎左の中切歯など6本の乳歯と上顎右の第1臼歯の歯冠からなり、これらは2～3歳のものと推定される。他の一体の歯は、上顎左の犬歯、第1臼歯、右の側切歯、犬歯、下顎左右の中切歯と犬歯、左の側切歯、犬歯、第1臼歯など10本の乳歯と上顎左右の中切歯から第1小臼歯までと、第1大臼歯、左の第2大臼歯、下顎左右の側切歯、犬歯、第1大臼歯など17本の永久歯を含む。第1大臼歯の歯根の状態からみて4～5歳の幼児のものと思われる。

遊離歯以外に4～5歳幼児に属するとみられる前頭骨、下顎骨など頭蓋骨の破片と左右大腿骨骨体の破片、2～3歳幼児のものともみられる頭蓋骨片が残っている。

なお、1号墓周辺で採集された人骨片、乳歯のうち前頭骨、下顎骨、右大腿骨の骨体は1号墓内の4～5歳幼児の破片と接続し、4本の第2臼歯と右の上下第1臼歯も同一個体に属す可能性が高い。

2号墓人骨

ほぼ全身の骨格が残っているが、いずれも著しく破損している。

頭蓋骨：頭蓋は頭蓋底を除き復元することができたが、土圧による歪みが著しいため正確な計測値はほとんど得られない。顔面骨としては、左右上顎骨の歯槽突起と前頭突起、左上顎骨体の大部分、左右頬骨の破片、左の下顎頭と右の筋突起、関節突起、下顎枝後縁を欠く下顎骨が遺存する。上顎骨には左の第2・第3大臼歯を除く全歯が、下顎骨には左の側切歯を除く全歯が釘植しており、上顎左以外の第3大臼歯が存在する。

主要な頭蓋縫合はいずれも癒合していないが、大臼歯の磨耗が著しいので被葬者の死亡年齢

は熟年前半と推定される。頭蓋の筋付着部は弱く、乳様突起はきわめて小さい。特記すべき非計測的小変異は認められないが、上顎右第2大臼歯の頰側近心隅に臼方結節が出現している。

胸骨：第1頸椎など椎骨と肋骨の破片が認められた。

上肢骨：肩甲骨の小破片と左の上腕骨と橈骨のいずれも骨体の大部分、左尺骨の骨体破片および指骨破片だけである。

下肢骨：寛骨の破片が存在するが、その形状から被葬者は女性と判定される。大腿骨は左右とも両端を欠き、左右脛骨は骨体の大部分が残っているが、左右腓骨は破損が著しい骨体の破片である。大腿骨は短く、粗線は女性としては強く発達している。大腿骨は骨体上部、中央部とも扁平、脛骨は中型である。

3号墓人骨

頭蓋骨、椎骨、肋骨、大腿骨、脛骨などの破片と遊離歯が残存する。脳頭蓋骨の骨壁は薄く、前頭縫合が認められ、後頭骨の鱗部と外側部は分離している。歯牙は、乳歯と永久歯を含むが、永久歯は歯冠だけで歯根は形成されていない。乳歯のうち上顎右の中切歯と

表2 本谷近世人骨の計測値と示数

	2号墓熟年女性		4号墓熟年男性	
	左	右	左	右
頭蓋骨				
26. 正中矢状前頭弧長	133			
27. 正中矢状頭頂弧長	127			
28(1)正中矢状上鱗弧長	68			
29. 正中矢状前頭弦長	112			
30. 正中矢状頭頂弦長	112			
31(1)正中矢状上鱗弦長	64			
27/26矢状前頭頭頂示数	95.5			
29/26矢状前頭小數	84.2			
30/27矢状頭頂示数	88.2			
31(1)/28(1)矢状上鱗示数	94.1			
61. 上顎齒槽幅	60			
69(3)下顎体厚	12		12	
腕骨				
5. 中央最大径	20			25
6. 中央最小径	15			19
7. 最小周	57		64	64
7 a 中央周	59			73
6/5 骨体断面示数	75.0			76.0
橈骨				
3. 最小周	37		38	
4. 骨体横径	14		17	17
4 a 中央横径	14			
5. 骨体矢状径	10		12	11
5 a 中央矢状径	10			
5(5)中央周	41			
5/4 骨体断面示数	71.4		70.6	64.7
尺骨				
11. 前後径			14	
12. 横径			18	
11/12 骨体断面示数			77.8	
大腿骨				
6. 中央矢状径	25	25	28	26
7. 中央横径	25	27	28	29
8. 中央周	81	84	88	87
9. 骨体上横径		28		33
骨体上最大径	29	28	34	33
10. 骨体上矢状径		24		25
骨体上最小径	22	24	24	24
6/7 中央断面示数	100.0	92.6	100.0	89.7
10/9 上骨体断面示数		85.7		75.8

下顎左の側切歯が失われており、第2臼歯の歯根はまだ完全に形成されていない。永久歯としては中切歯と第1大臼歯がそれぞれ4本そろっている以外、上顎左右の側切歯と左の犬歯、下顎左の側切歯と犬歯が同定された。被葬者は2歳前後の幼児と推定される。

歴	骨				
8.	中央最大径	27	28	(29)	31
8 a	栄養孔部最大径		34	36	35
9.	中央横径	19	19	18	18
9 a	栄養孔部横径		22	24	21
10.	骨体厚	73	77		80
10 b	最小周				71
9/8	中央断面示数	70.4	67.9	(62.1)	58.0
9 a/8 a	歴示数		64.7	66.7	60.0

4号墓人骨

一体分の骨格が残っているが、破損が著しく、四肢長骨はすべて近位・遠位両端を欠き、右尺骨、左右腓骨などは骨体の破片だけである。

頭蓋骨：前頭骨、左右の頭頂骨と側頭骨、蝶形骨、後頭骨、左右の上顎骨と頬骨が存在するが、接続し復元することはできない。下顎骨は比較的良好に残っているが、右下顎枝と左下顎枝の後部を欠く。上顎骨には左右の中切歯、側切歯、犬歯、第1小臼歯、第2大臼歯と左の第2小臼歯が、下顎骨には左右の中切歯、側切歯、犬歯、第2大臼歯と左の第1小臼歯、右の第2小臼歯と第1大臼歯が釘植している。下顎左の第2小臼歯と第1大臼歯の歯槽は閉鎖しており、第3大臼歯の萌出は確認できない。

眉弓の隆起は著名で、乳様突起は強大である。矢状縫合の外板は完全に癒合し、大臼歯の磨耗は強く、右上下の第1大臼歯は歯根近くまで磨滅している。下顎右の第1・第2大臼歯の咬合面は舌側から頬側へ斜めに磨滅しており、上顎右の第1大臼歯の咬合面の磨耗もこれに対応している。上顎左の中切歯、犬歯、第1小臼歯、下顎右の第2大臼歯に齶蝕が認められた。

上肢骨：左鎖骨、左右の上腕骨、橈骨、尺骨が存在する。上腕骨の三角筋粗面は強く、橈骨と尺骨の骨間線は極度に張り出している。

下肢骨：左右の大腿骨、脛骨、腓骨が残存するが、大腿骨の粗線は強く発達し、脛骨のヒラメ筋線も強く、右では突起状の破をなしている。大腿骨の上骨体、中央部とも偏平であるが、歴示数は中型に属す。

頭蓋骨の形状、太く頑丈な四肢長骨から被葬者は男性と判定され、頭蓋縫合の癒合、大臼歯の磨耗度、歯槽閉鎖が見られることから、その死亡時年齢は熟年と推定される。

第2節 本谷遺跡の¹⁴C年代測定について

京都産業大学 山田 治 小橋川 明

〔1〕はじめに

岡山県笠岡市本谷遺跡の¹⁴C年代測定の結果を記し、若干の説明を述べる。炭素試料は炭酸ガスを経てメチルアルコールに変換され、次いで液体シンチレーターと混合され、液体シンチレーションカウンターでのベータ線測定により¹⁴C原子の存在比が計算された。

〔2〕¹⁴C年代測定結果

測定番号	試料名	測定値
KSU-1377	本谷B 木炭	620 ± 40 B. P.
KSU-1378	本谷C 木炭	140 ± 20 B. P.

〔3〕¹⁴C年代測定値について

¹⁴C年代測定値は、次の様な国際的約束に従って表現されている。

(1) ¹⁴Cの半減期には、5568年を用いる。

いままでに得られた¹⁴Cの半減期のうちでは、5730±30年が最も確からしいとされているが、なお若干は修正される可能性があるため、将来統一的に修正するとしても、今のところは最初にLibbyが用いた5568年を一貫して用いていくのが国際的な比較に便利であるから、¹⁴C年代測定では5568年を用いる約束になっている。

(2) ¹⁴C年代測定値はB. P. Yearで表す。

AD1950年を起点としてそれ以前の年数をB. P. (もとの意味はBefore Presentの略) という記号をつけて表す¹⁴C年代独特の表現方法である。

(3) 測定誤差は1標準偏差(1シグマ、1σ)で示す。

科学的測定値には必ず測定誤差を伴う。精密な測定とは誤差の小さい測定である。あらゆる実験誤差が計数の誤差より十分に小さいとされるとき、1標準偏差(1シグマともいう)の中に真の値が含まれる確率は68%である。2シグマの中には95%、3シグマの中には99.7%含まれる。誤差が3シグマを越えることは1000個の測定値のなかに3個という程度で極めて稀である。

(4) 測定値には測定機関の記号(京都産業大学ならKSU)および測定番号をつける。

この記号・番号がないと、測定機関の台帳から索引することや、数値の確認をすることができない。公表のときには必ず測定値とともに測定機関記号および測定番号をつけることになっ

ている。

(5) ^{14}C 年代測定の世界共通の標準として、NBS シュウ酸を用いる。

世界中のどこでも同じ標準物質を用いれば、測定機関によって結果が違うということがなくなる。NBS シュウ酸は、日本アイソトープ協会を通じて誰でも購入できる。

NBS はアメリカ国立標準局 (National Bureau of Standard) の略である。

[4] 年輪年代への換算

^{14}C 年代は絶対年代の近似値ではあるが、完全な絶対年代ではない。木の年輪は数え違いさえしなければ絶対年代である。古い大木の年輪ごとの ^{14}C 年代を得れば、 ^{14}C 年代と年輪年代の比較対照表を作ることができる。今では、Ralph らにより7,000年前まで (Radiocarbon, 1974)、Stuiver らにより13,000年前 (Radiocarbon, 1986) までの比較がなされている。

E. K. Ralph らによる絶対年代への換算表によれば、1シグマの範囲で次のようになる。

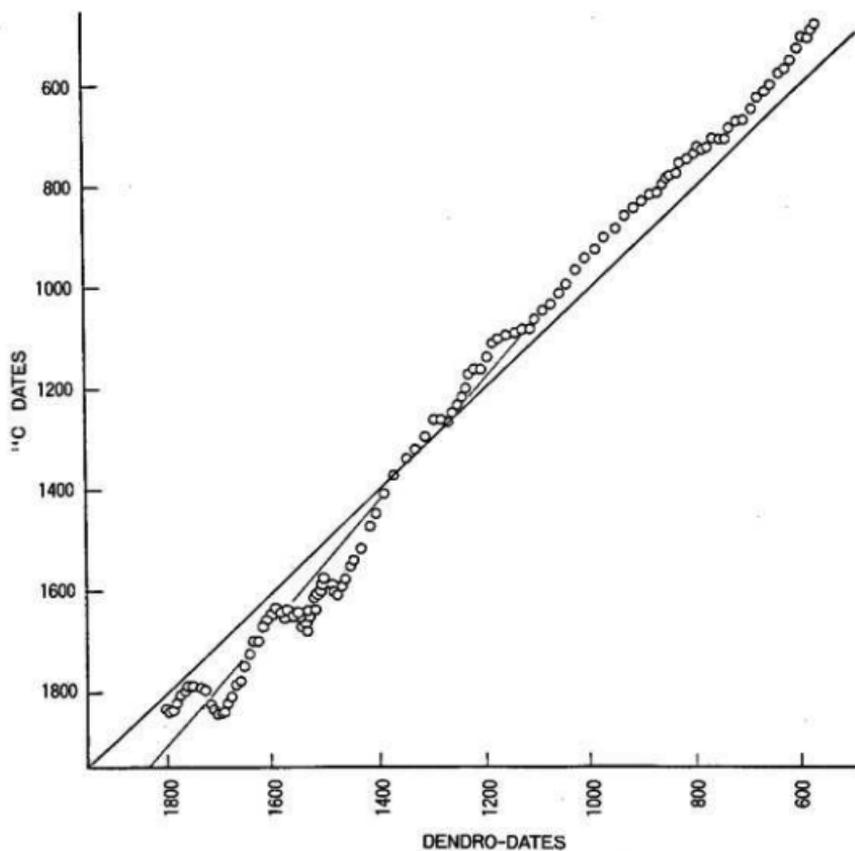
KSU-1377 (本谷B) : AD 1320から1350まで

これは、鎌倉時代末期から南北朝時代初期までにあたる。

KSU-1378 (本谷C) : AD 1670から1800まで

これは、江戸時代4代家綱のころから11代家斉のころまでにあたる。

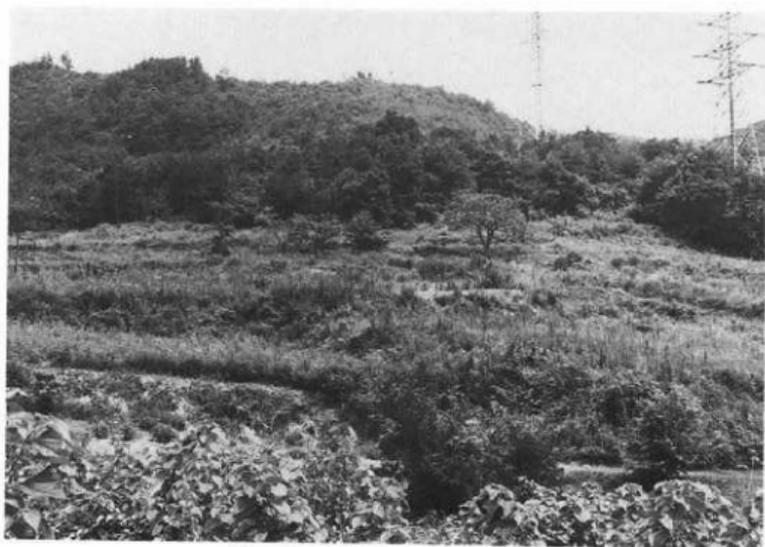
なお、AD 1800年からAD 600年までの年輪年代 (Dendro Date) と¹⁴C年代との比較のグラフを参考のために付記しておく。



年輪年代 — ¹⁴C年代対照表



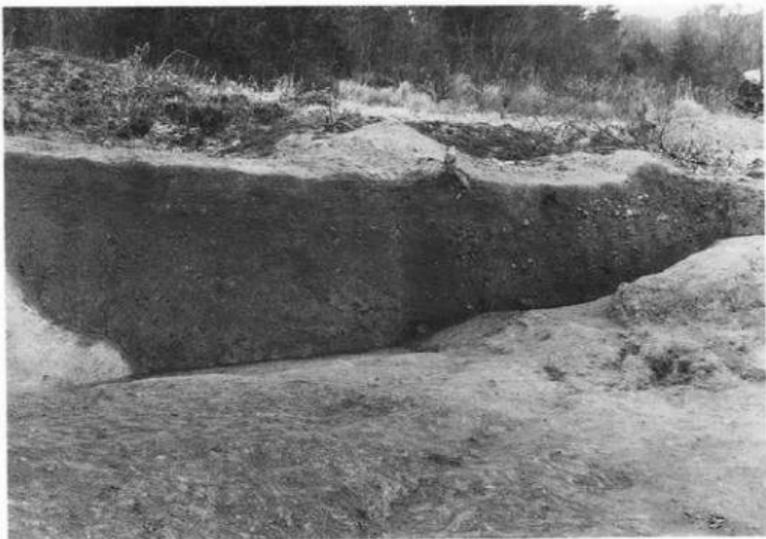
1. 本谷A遺跡調査前 (遠景南から)



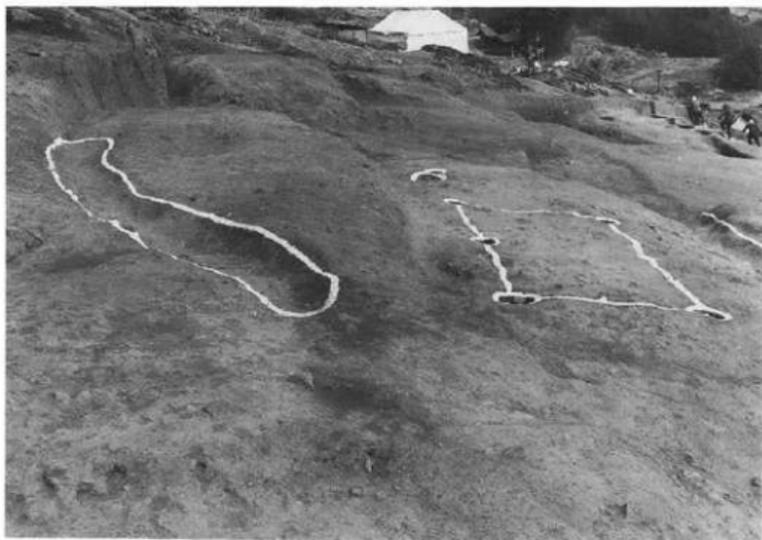
2. 本谷A遺跡調査前 (遠景西から)



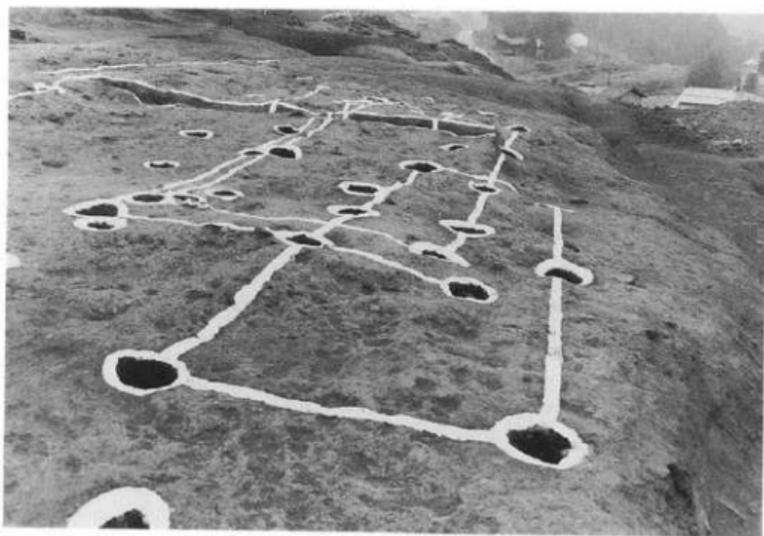
1. 本谷A遺跡調査風景



2. 本谷A遺跡第1調査区谷部横断面(南から)



1. 本谷A遺跡第1調査区遺構検出状況（西から）



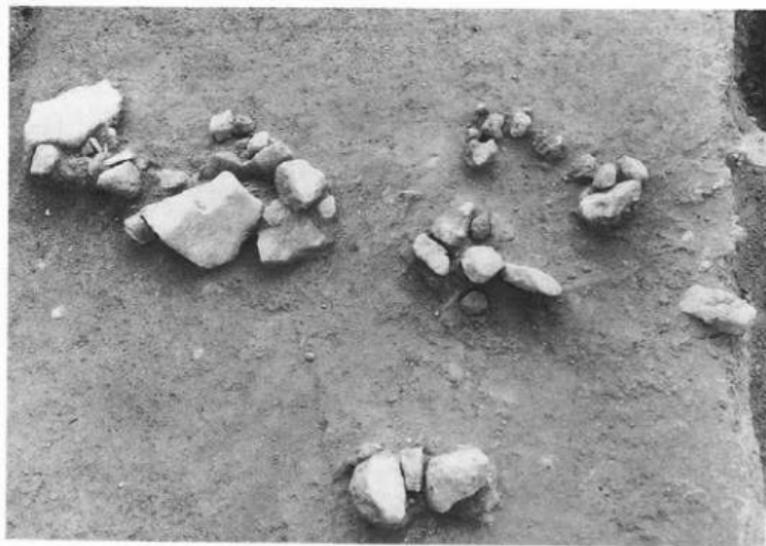
2. 本谷A遺跡第2調査区遺構検出状況（北から）



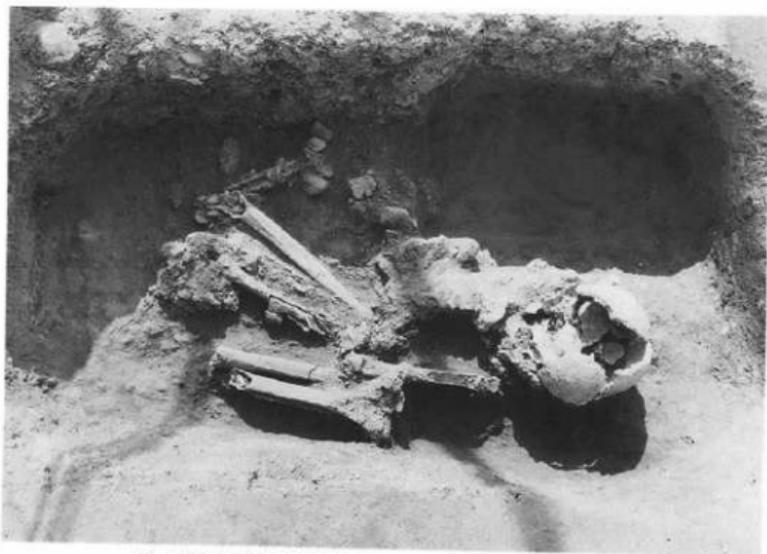
1. 本谷A遺跡第2調査区中世墓1検出状況（西から）



2. 本谷A遺跡第2調査区中世墓2検出状況（北から）



1. 本谷A遺跡第2調査区近世墓 3.4 検出状況 (北から)



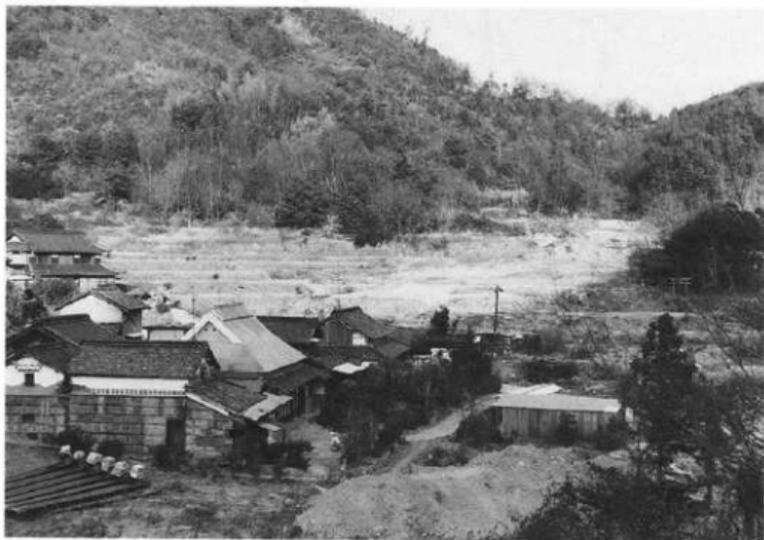
2. 本谷A遺跡第2調査区近世墓 2人骨検出状況 (北から)



1. 本谷A遺跡第2調査区近世基群検出状況（北から）



2. 本谷A遺跡調査後遠景（西から）



1. 本谷日遺跡調査前遠景 (西から)



2. 本谷東側散布地第1次調査終了後遠景 (北から)



1. 本谷B遺跡第2調査区祭祀遺構検出状況（南から）



2. 本谷B遺跡第2調査区祭祀遺構（内部）検出状況（東から）



1. 本谷B遺跡第1調査区遺構検出状況 (南から)



2. 本谷B遺跡調査後遠景 (北から)



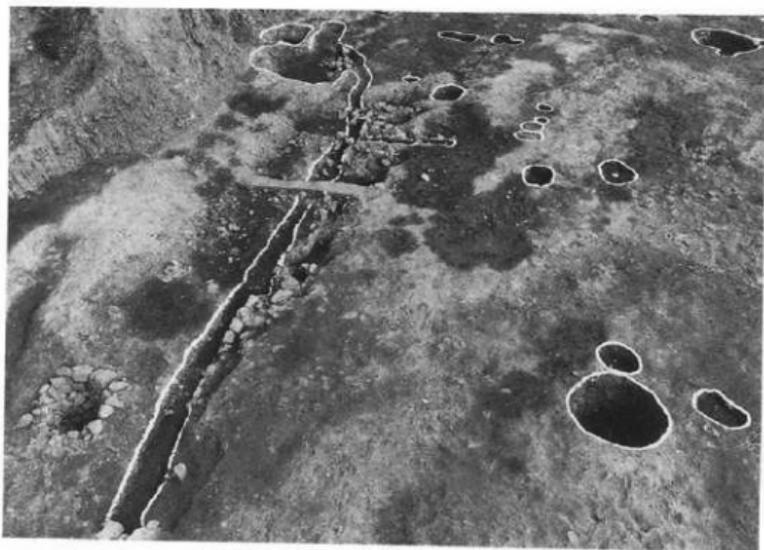
1. 本谷C遺跡遠景 (本谷A遺跡より)



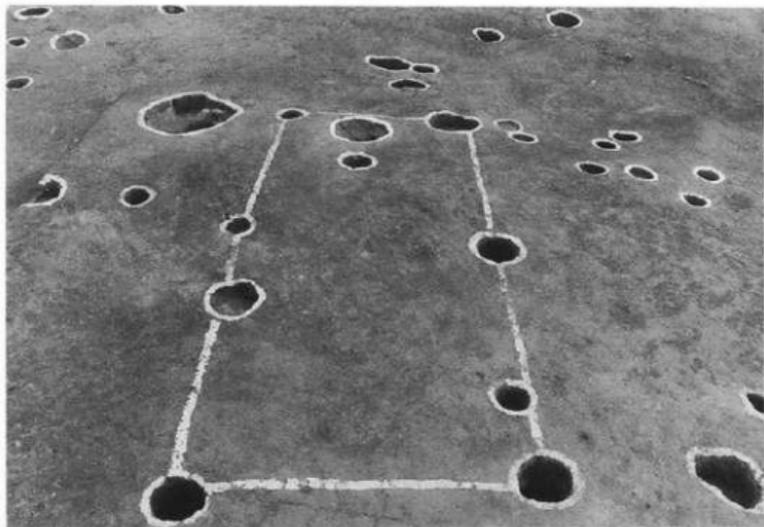
2. 本谷C遺跡第1調査区全景 (南から)



1. 本谷C遺跡第2調査区南半全景（西から）



2. 本谷C遺跡第2調査区北半全景（西から）



1. 建 物



2. 本谷C遺跡第1調査区斜面土器溜り（西から）



1. 本谷C遺跡第2調査区貝塚検出状況 (東から)



2. 本谷C遺跡第2調査区貝塚掘り下げ状況 (西から)



1. 井戸1 (東から)



2. 井戸2 (東から)



1. 排水溝 2 (北から)



2. 排水溝 3 (北から)



1. 妻棺1 検出状況（東から）



2. 妻棺4 検出状況（北から）



1. 壙棺3 副葬品出土状況(東から)



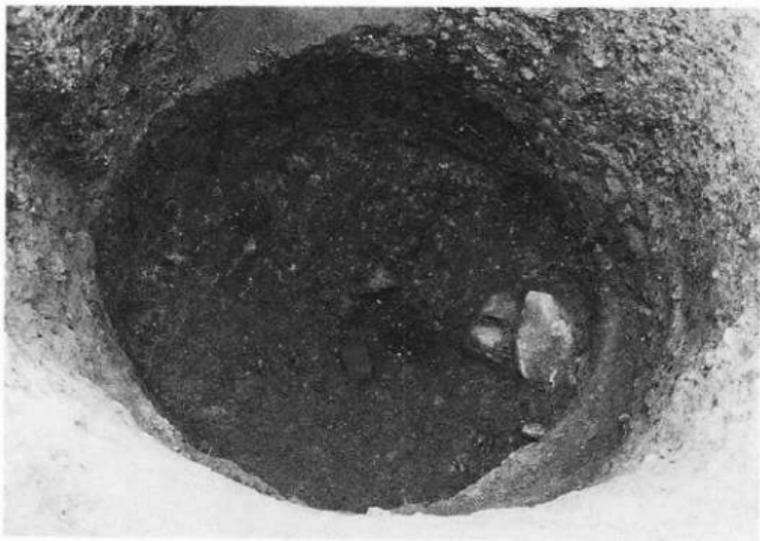
2. 壙棺4 水滴出土状況(北から)



1. 甕棺1 掘り上げ状況（東から）



2. 甕棺6（南から）



1. 土壙基1 (東から)



2. 土壙基3 (北から)



1. 炉1.2 檢出狀況



2. 炉1 遺物出土狀況



1. 土壇（北から）



2. 土壇（南から）



1. 調査風景



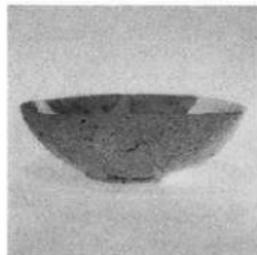
2. 現地説明会



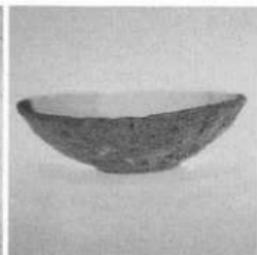
1. 調査終了後



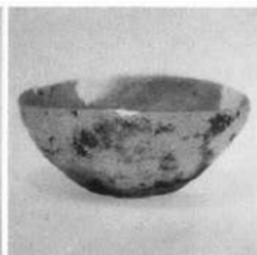
2. C調査区横 稲荷神社



6



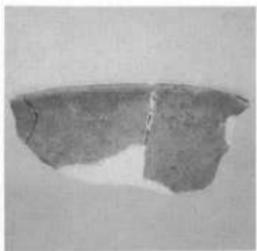
7



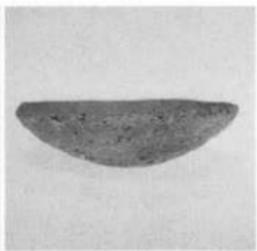
89



92



55



97



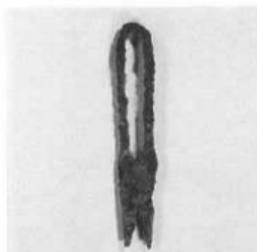
96



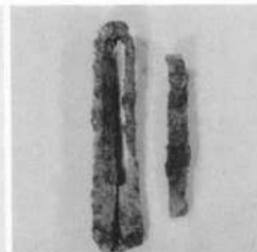
98



74



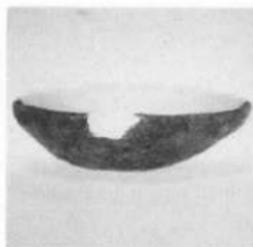
103



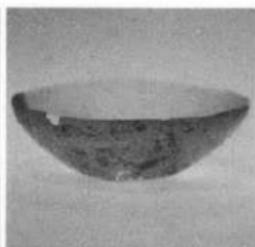
105



110



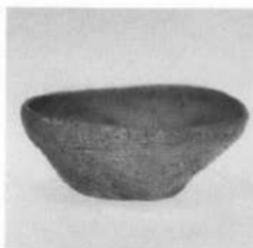
148



150



159



170



171



176



194



213



220



229



236



254

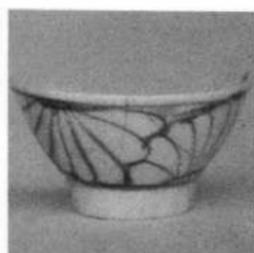
出土遺物



266・267



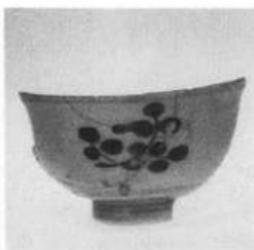
272



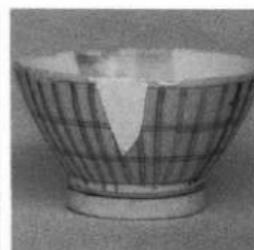
280



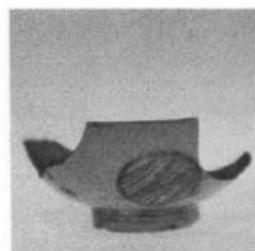
358・259



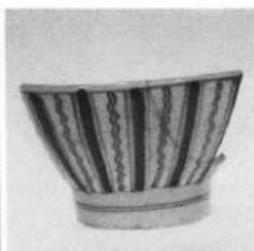
261



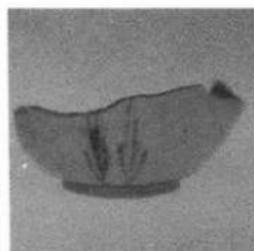
275



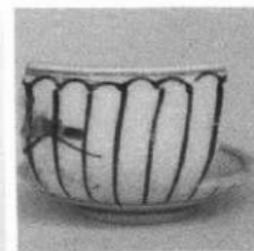
262



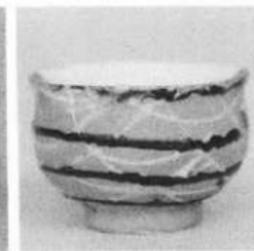
279



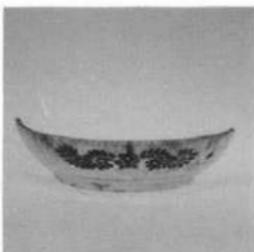
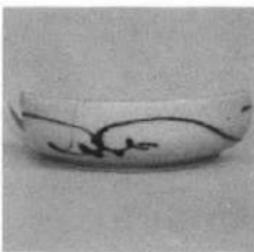
313



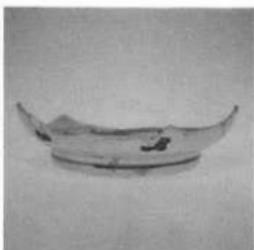
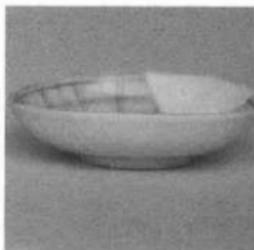
292



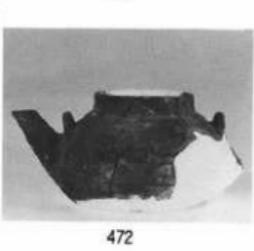
297



324



417



373

472



332

471

出土遺物



380



398



406



399



408



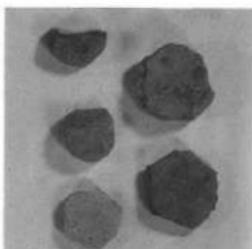
383



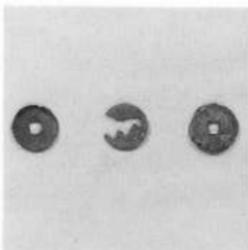
384



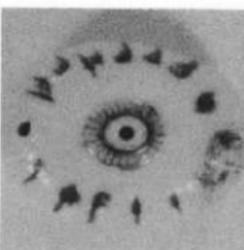
385~387



388~392



壙棺 3出土古銭



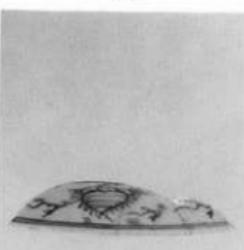
397



393



409



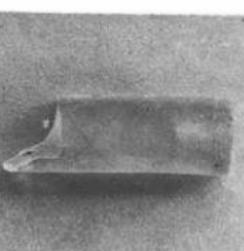
412



413



415



416



418

出土遺物



420



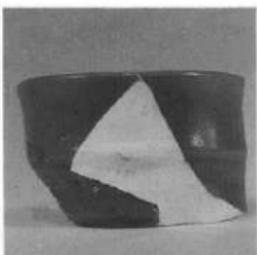
421



422



423



425



427



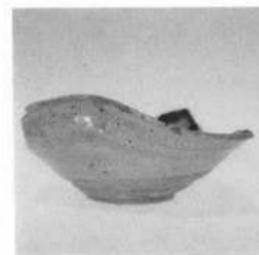
514



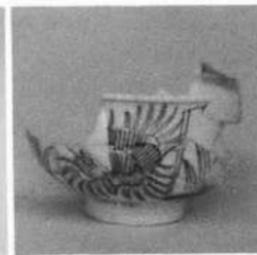
516



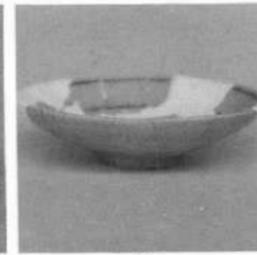
257



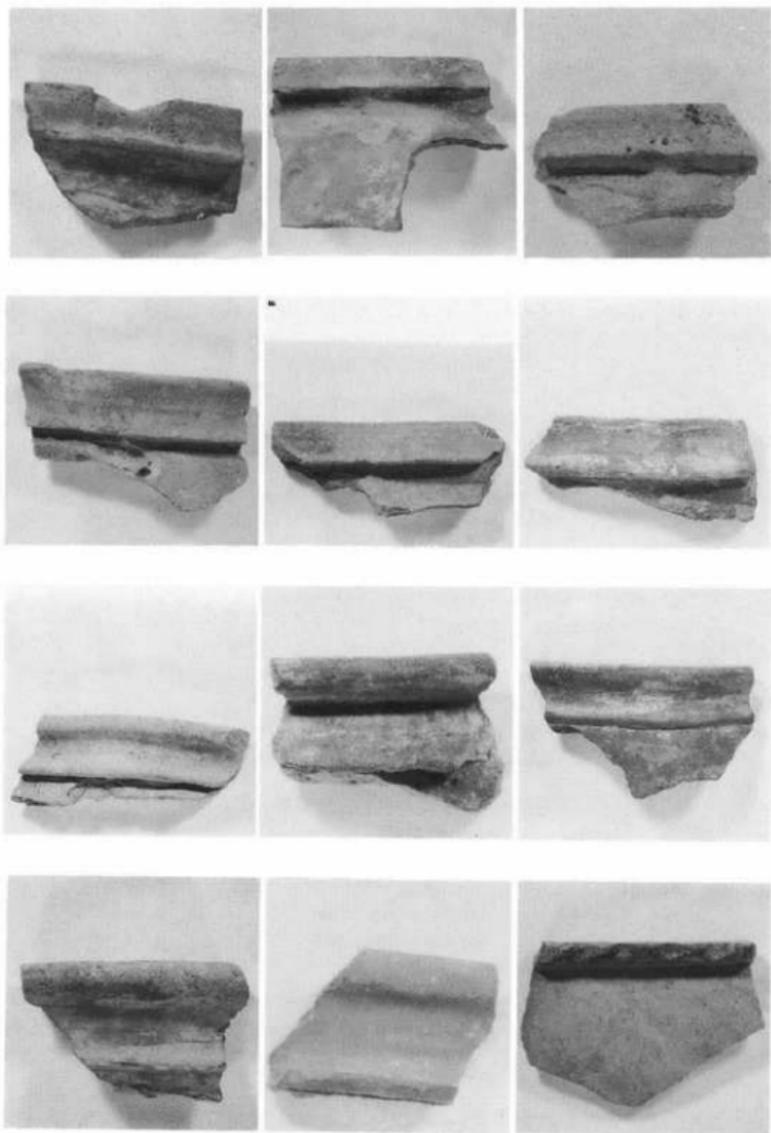
334



337



359



出土遺物

笠岡市埋蔵文化財発掘調査報告 1

山陽自動車道建設に伴う

本谷遺跡

昭和62年9月20日 印刷

昭和62年9月30日 発行

編集 笠岡市教育委員会

印刷 西日本法規出版株式会社

